

感染転生者の活動日記

フロストノヴァ実装しろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アークナイツの世界に転生した鉱石病感染済み少女の日記。

なお、タルラとは友人同士とする。

※アークナイツの小説少ねえ！書いたろ！って感じの小説、気分で書くので不定期、自己発散用。

それとある程度捏造とか入れるのでご了承して下さい。

偶に百合百合するかも知れん。

※本編完結

目次

感染転生者の活動日記	1
2 ページ目	11
3 ページ目	20
4 ページ目	30
5 ページ目	39
6 ページ目	49
7 ページ目	60
◆月☆日 雨「レユニオン・ムーブメントにて」	71
8 ページ目	81
9 ページ目	91
10 ページ目	99
『序章』	108
『断章』	122

感染転生者の活動日記

○月○日 晴れ

突然だが日記をつける事にした、というのも私が私である為に必要な事だと言われたからだ。

先ず最初に言おう、私は転生者だ、記憶は定かではないがこの世界が『アークナイツ』という架空の物語に類似している事から、似た様な世界、もしくは同じ世界に転生した事になった。

そして私はその中でも特に物語の根本に関わる感染者になってしまったのだ。

その時の精神的ショックから前世の記憶がフラッシュバック、もとい人格までも影響した上、これが安定しない。

人格を定着させ安定する為にもこの日記は欠かさず書いていく事にする、勿論誰にも見せる事は無いだろう、何時でも手元に入れておくでしょう。

……感染者になってしまったが、それを私の友人は非難もせず、迫害もせず、受けていれてくれた事に涙が溢れそうになった。

その時、友人である少女の姿に既視感を覚えた。

この先レユニオン・ムーブメントを過激な組織に変貌させる指導者でありカリスマ的人物……になるかもしれない少女によく似ている。

その事に気付いてひどく困惑した、こんな思いやりのある優しい少女が、あの『タルラ』と同一人物だとは思えない。

タルラといえば主人公であるドクターのロドスの最大の敵、ラスボスというにふさわしい存在だ、生憎と物語の全てを覚えているわけでもないが、これぐらいは覚えていた。

正直どうしたらいいかわからない、だけでも友人関係を切るわけにもいかない、未だ少ない生だがそれでも数年間共に育って生きているのだ。

……もういい、めんどくさい。

考えるのはやめよう。

頑張って生きよう。

○月×日 曇り

私のアーツが分かった、結晶の生成、対象の結晶化だ。

結晶化、目に見える対象を結晶に変貌させる、はつきり言って危険すぎる、ようはオリジニウムの生成を行える事と同義であり、つまり私に近づく＝鉱石病を患うという事に他ならない。

それでも彼女は一緒に居てくれた、だから彼女が感染者になるのは必然だったのだろう。

いずれ何処かで何らかの形で感染者になるのは分かっていた、それでも私が原因で感染者になってしまったのを私は……ッ

(震えた文字でこれ以上は読み解けない)

○月△日 曇り

昨日は散々だった、私は人を不幸にしてしまう事に酷く動揺し鉱石病が悪化するかと思っただが、友人である彼女の一言で救われた。

未だ十数年しか生きていない少女だと言うのにこんなにもカリスマ性に満ちているのは私が思い描く未来の彼女なのだろうと思う反面、一体何があったのか疑問だ。

そんなおかげもあって今は落ち着いている、あのまま感情が暴走してしまったら天災を起こし、そして鉱石病で死んでしまったかもしれないので本当に彼女には助けられた。

彼女以外の他の周りの人たちには私、ひいては彼女自身が感染者であるとバレていない、彼らは感染者を見つけ次第始末すると物騒なので、バレるわけには行かない。

……ただそれは、今のところうまくいっているだけであってこれから先は分からない、何かきっかけひとつで全てが変わってしまう。

どうにも悲観的になってしまいが、この世界に感染者の住む世界は余りにも……救いが無いんだ。

ロドスにでも保護してもらおうかとも思ったが……何というか、それは最後の手段にしたかった、私は主人公の裏に隠れた、まるで何でも知っているかの様なケルシー先生を信用できなかった。

きつと悪い人じゃあないんだろう、何かされるわけでも無いんだろう。

……本当の理由は、近くににいる彼女を見ていたい、彼女が『タルラ』であるとは限らないが、私が付いていけばレユニオンのあり方ももっと『らしく』なつて行くんじゃないかと、そう思ってしまったのは、傲りだろうか。

友人の思想はシンプルだ、感染者に対する迫害を無くす事だ。夢物語を語る彼女の言葉に私は惹かれた、友人の言葉に惚れてしまったんだ。

その事を言ったら「私と君は親友だろ？」と笑われてしまった。

……照れるなあ。

○月◇日 曇り

怒涛の1日だ。

まず最初から話そう。

事の発端は小さな喧嘩だった、意見の食い違いがやがて暴力に発展していつてしまふ、良くあるケースだ。

それがたまたま、彼女のアーツの制御が緩まっていたってしまった、とんでもない熱で殴った人間を溶かしてしまった。

正直言つてその人が溶けたことはどうでも良い、嫌いな考え方の人間だった、むしろ良くやったと言つても良い……流石に目の前で溶けた人間を見て動揺しなかった訳ではないが。

むしろ溶かした本人が困惑していたし、何より場所が悪かった、広場の中心の様な場所で分かりやすく原石製品を使用せずアーツを使った事が周りに広がってしまった。

私はこれから起きる逃走劇を一早く察知して彼女を連れてこの要塞から抜け出す事にした。

それから暫くは私につられる形だったが、混乱が収まると冷静な考えでこの要塞から抜け出すルートを考え始めたようで、私はそれに従う事にした。

道中、感染者を消す為の部隊に見つかり戦闘になったが、??? (潰れ

ていて読めない)はもう人を殺す事に躊躇は無かった。

それがどういう意味を保つのか、私は多くを察せない。

ただ、だからといって彼女だけに人殺しの罪を背負わせる事は出来なかった、???の死角を狙った一人の足を結晶化させて再起不能にした。

私も感染者だということが広がり、私も殺そうとした者たちを見える範囲で片っ端から結晶化させようとして。

彼女に止められた、その力は鉱石病を著しく悪化させると割と本気で怒りながら止められた。

ならばと弾丸の結晶を生成し追手の足を狙う、外れる弾丸は着弾した地面から木の結晶に変化させて相手の動きを封じる。

そうやって逃亡劇を続けていく内に、なんとか卷けた。彼女も私も無傷とはいかないが目立った傷は無い。

足が必要だ、生身の体だけでこの要塞から出る事は難しい、検問を敷かれる前に車に乗ってここから逃げる事にした。

それからは上手く隠れつつ、手頃な車を見つけてこの要塞から出られた。幸運だったというべきだ、もしかた見つかつたとして、年端もいかない私たちでは二度同じ様に感染者殲滅部隊を退ける事は難しかっただろう。

車は私が運転している、何処で運転を覚えたのかと言われたがそれは秘密だ、転生者の特権ともいうべきかな？

もう後戻りは出来ない、彼女に付いていく他道は無いだろう、少なくとも今はまだ。

「絶対に生き抜いて行こう」と言う決意に溢れた彼女の言葉に私は頷いた。

○月☆日 雨

起きたら???と目があった。

唇が触れるんじゃないかぐらいに近づいてたので思わず声を出して仰け反つたのは仕方ないだろう、それを見て親友は笑っていた。

先日要塞から逃げ出した私たちが、当てもなく車を移動させてい

るわけでは無い、というのも彼女には当てがあるらしく、私はそれに従って運転している。

途中オリジムシや狼が襲ってきたが私が何をやるまでもなく彼女が瞬殺した、さすが未来のレユニオンの指導者（おそらく）だ、現時点でとんでもなく強い。

私はどうとアーツの使い方について試行錯誤していた、生み出す結晶の硬質はある程度自由が利いており、触れれば簡単に割れるモノも作れば鋼鉄よりも固くする事も出来た。

私の目に見える範囲なら制作する事が出来るし、見える範囲の物質を持ったモノなら何でも結晶化する事が出来るようだ。

ただこれは、例えばフロストノヴァのような極低温で凍て付き周囲を凍らせるアーツと似て非なるモノだ。

私の結晶化に温度は無い。この結晶は冷たく感じる事もあればまるで熱湯のように熱く感じる事もある、細かいアレはわからないが術アーツの類である事は間違いない。

その様子を見ていた彼女は少し咎めるような視線を送っていた、私アーツを使う事を余りと良しとしていないようだ。

このアーツは問答無用で対象を結晶化する圧倒的な力があるが、それ故に体の負担が大きい、私の中にある血中源石濃度の進行が早まるようだ。

私も死にたくはないので余り使わないようにするが、それはそれとして私にはこれしか今の所戦う術が無い。

剣でも使うかと思いきや結晶で作った剣で手合わせしたが、10秒も保たなかった、私に剣の才能はない様だ。

「君は何もしなくて良い、私が守る」と言ってくれるのは嬉しいが、私だって役に立ちたい、足手まといにはなりたくないんだ。

その時の照れ顔は大変可愛かったです。

○月★日 曇り

ようやく目的地に辿り着いた、予想していたがやはりレユニオン・

ムーブメントの拠点のようだ、どうやってそれを知ったのか、タルラが私を転生者だと知らない様に、タルラもまた私に隠している事があ
るのだろう。

……彼女はここに着いてからタルラで呼ぶ様にしてくれと言った。
その事について何か思う事が無いわけでもない、それでも目の前の
少女は私の親友であり、行動を共にするパートナーだ。

信頼を置いているモノ同士、タルラが私に言わないならそれでも良
い、隠し事の1つや2つ、私とタルラの間は何の問題にもなり得ない。
ここからタルラがレユニオンの指導者になると思うと、なんだか上
手く説明はつかないが、ワクワクしてきた。

「感染者は自らの立場に誇りを持ち、積極的に力をつけ、そしてそれを
行使すべきだ」

この文言がレユニオンの信念である、出来る限り暴力以外の方法を
模索出来る様に、私はタルラについていくつもりだ。

私が間違えないとは思わない、もしかしたら私の知識通りに容赦無
用の過激な集団になるのかもしれない、それでも私は不思議とタルラ
と共になら出来ると思ってしまう。

これが良いか悪いかは分からない、それでも確固たる決意を持った
彼女のカリスマ性は、私の心を掴んで離さない。

……とりあえず、今日の宿から決めようか。

□月○日 晴れ

日記を書く暇もなかった……本当に忙しかった、前に日記を書いて
から数年は経過した。

やっと落ち着いたので、出来事をまとめようと思う。

まず最初に言うべき事はレユニオンの指導者がタルラになった、あ
りとあらゆる手段を使ってトップになる彼女は未恐ろしいものを感じ
じたが、タルラらしくもありなんだか誇らしい気分にもなった。

それと同時に私にもレユニオンの幹部になった、主にタルラの
秘書的な役割をしているが、私が運用する部隊も出来つつある。

それからタルラに紹介される形で、他レユニオンの幹部とも顔合わ

せをした、リユドミラやパトリオット、エレーナ、それから……あ
あいや、誰にも見せない日記とはいえ本名を書くのは少しまずいか。
ふとした時に言ってしまうそうだな、それで怒られたくはない。

中でもフロストノヴァとは話が合う、アーツの能力の使い方も似て
いるので時折こうした方が良いとか教授している。

……といっても、私もフロストノヴァも理由なくアーツを使うと寿
命が縮むので、意見交換だけだ。

後は時折メフィストとファウストと食事をしたりする事もある、こ
のレユニオンに入った当初は散々だったご飯は私が全ての労力を
持っていて“マシン”なモノとした、その事にこの二人は感謝をしてい
るらしい。

二人だけではないが、知識では飯がまずい理由でレユニオンから抜
け出す人も居たので、そういう者達には慕われてしまった。

……美味しいとは言えないまでのマシンな料理を提供できるように
しただけでも、私がレユニオンに与えた功績は大きい様だ。

話が脱線してしまった。

まあ兎に角、紆余曲折とあれレユニオンに属する感染者も多くな
り、1つの組織として纏まってきている。感染者にも正統な権利はあ
ると言う事を、どうやって示していくか。

その事でタルラと少しだけ揉めてしまった、タルラは私の考えを
「何百年と掛かる計画」と揶揄するが、それではダメなのか？

……結局は、ウルサス帝国のような感染者に対して排他的な姿勢を
持つ国家がある限り、私の目指している未来には辿り着かないのだろ
うか。

□月★日 曇り

最近、タルラの様子がおかしい。

私に隠し事をしているには今更なのだが、思想が過激になっている
ように思う。

何があったのか聞いたとしても、「知らなくても良い」の一点張り
だ。

……それは、なんというか。
悲しいよ。

□月□日 雪

Wと一緒に傭兵として一部隊を殲滅させた。

思えば彼女はタルラと同じぐらいに謎が多い、敵部隊に対して何処か楽しそうに殲滅する彼女は少し苦手だが、フアツションで気が合うので仲は悪くないと思う。

傭兵として得たお金は後々に必要になると言っていたが、それはやはり……そういうことなのだろうか。

やはり私一人では物語の流れは変えられないのだろうか？

レユニオンは居心地が良いし、幹部のみんなも、私の部隊も、それ以外の人達も皆好ましいし、私はこの空間が続いていくならそれでも良いと思っている。

その事をWに言ったら、軽く笑って「そういう所、私は好きよ」と言われた。

どういう意味だろうか？

△月□日 晴れ

感染者に対する迫害が深刻化してきた。

何故？非感染者も感染者も、同じ人類だ。

……本当に、暴力以外で解決出来ないのか？

△月△日 晴れ

私の部隊【クリスタルレンズ】は主に工作と情報収集を得意とする部隊だ、直接戦闘するケースは極めて稀で、今回はその極めて稀なケースにぶつかった。

感染者を迫害する集団的殲滅部隊とかち合い、そのまま戦闘。

スノーデビル小隊程ではないにしても、私の部隊は直接戦闘でもそこそこやりあえる、それでも苦戦を強いられてしまったのは、向こうの指揮官が私よりも策略を練るのが上手かったからだ。

一人も死なせる訳にはいかない、私は長らく使っていなかったアーツを解放して、周囲の地形を結晶化させた。

結果的に被害はゼロ、私は足元がぐらつき意識を失ってしまったが、それ以外は何も問題はない。

心配する部下達に「君達が死ぬよりマシだ」と言ったが尚更心配されてしまった。

……大丈夫だ、私は死なない。

タルラを一人にはさせないよ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

p. m 3:52 曇り レユニオン本拠地。

ある一人の作業員から見た彼女について。

一言で語るのは難しいな、タルラと同期にレユニオンに入ってあっという間にタルラはトップ、彼女——『ミラー』は幹部になった。

ミラーはなんとというか、このレユニオンでは珍しいタイプの奴だ、別段非感染者に恨みがある訳じゃないようだし、このレユニオンに入った理由もタルラについていく為だと言っていた。

だからって俺たちを下に見るわけじゃないし、分け隔てなく平等に接してくれる、ああそれとこのレユニオンの食事情を改革した人物でもあるな。

あんまり感情を表に出さないタイプなんだか、あの時ばかりは珍しくキレてたね、「こんな不味いものが飯と言えるか！」だってよ、笑えるだろ？俺らはそれでも良いと思ってた飯を一口口に入れた瞬間料理ごと結晶化させちまったんだよ。

それからは早かったな、どこからそんな知識を得たんだって疑問に思うほどの土地開発、農業や水産業の構築、まるで新しい文明だったよ。

……戦闘力について聞きたい？

圧巻だよ、アレは。

一度だけ、彼女と、その小隊の『クリスタルレンズ』に助けてもらった事がある。

まるで一つの災害だ、今まさに斬りかかろうとしてきた敵兵士を瞬

く間に結晶化させて、俺とその他のレユニオンの兵士以外の周辺を結晶世界に変えちまった。

銀世界ってのはああいう事を言うんだろうな。

それ故に使い過ぎると体が崩壊するって欠点もある、だから普段はサブマシンガンの二丁持ちだな、特製品らしい。銃の使い手としても一級品でよくファウストと競い合ってたりにしてよ。

それとタルラは勿論、幹部全員と仲が良いな、ほど良い関係を保ってるよ。

彼女のお陰でレユニオンの雰囲気も良いし……タルラが道を切り開く者なら、ミラーは道を整える者って印象だ。

ミラーが居るから付いて行ってる奴も多いぜ？実際。

俺もその一人だしな……久しぶりだったんだよ、美味しい飯食うのは。

ああでも、あんまりミラーを困らすなよ？ミラーが可愛いからって告白とかするなよ？

ああ別にミラーは怒らないけど、剣持ったタルラが追いかけて半殺しに来る。

……わかる、怖いよな。その気持ちわかるぞ。

まあ、こんな所だな、じゃあ仕事に戻るか。

2 ページ目

◎月○日 晴れ

フロストノヴァとその小隊の『スノーデビル』の人達と行動を共にした、彼らは気が良くて優秀でとても好ましい、その懐にあるアルコールの類については秘密にしておいてあげよう。

フロストノヴァに最近のタルラについて聞かれた、フロストノヴァも苛烈な思想になってきたタルラの行動を疑問に思っているからだろう、一番近くにいる私に聞くのも道理だ。

確かに武力行使が増えてきたが、それでも私と一緒にいる時はあまりその一面を見せない、その事を伝えると何故か納得したようだ。

帰りにWと出会ってそのまま飲み連れていかれた、その後の記憶はあまり覚えてない。

◎月□日 晴れ

珍しい人物と出会った。

各種実地踏査などを主に活動するライン生命の外勤専門員、マゼランだ。

と言うのも個人的興味からポリビアの黒流樹海に来ていた私は、同じく実地調査に来ていたマゼランと出会ったのだ。

こんな未知の領域に人がいると思わなかったのだろう、マゼランはオーバーリアクション気味に驚いていたが私も驚いた、私の知識の中でも出会う事は無いと思っていた人物の一人だったからだ。

マゼランは私の事をレユニオンの幹部の一人と知っていたようで、敵対心の無い私に困惑していたが、私にマゼランをどうこうする理由はない。

ライン生命医学研究所に対しても、特に思う事は無い。寧ろライン生命の生命科学には興味がある。

ロドスのオリパシーの治療を目的とした研究もそうだが、鉱石病に関わる事は何かと詳しく知りたいのだ。

本当に鉱石病がどうにかなるのだとしたら、それに越した事は無い

のだから。

マゼランにあつたからといって行動を共にする訳でも無いので、そのまま別れる事にしたら今度はマゼランが私についてきた、私が攻撃的行動をしないと判断したマゼランは元気満々に話しかけてきた。

元気に押されて少し引いてしまったが、一人で探索するより二人で探索しませんかと提案されたので、半ば押される形で了承した。

道中マゼランのドローン技術を見せてもらったが、とてもでは無いが私には理解出来なかった、すごいものだと言う事ぐらいだ。

対してマゼランは私の結晶化するアーツに興味があるようで、調査した結果オリジニウムそのものに近い物質を生成しているようだ。

それはつまり、私がアーツを使う〓オリジニウムをその場で生成する〓感染者を増やす事に他ならないらしく、私の命を狙っている者は多いとの事。

日記でも書いた例の部隊同士での戦闘で起きた結晶地帯は非感染者が向かったその日のうちに感染者になったと、そうマゼランに言われた。

……やはりというか、危険すぎるアーツだ。

後残りしないよう、結晶化したモノをこの世から消すことにしよう、労力はかかるが、出来ない事もない。

私が持つには過ぎた力すぎる、だからと言って今更世の為にこの身を犠牲にする事は出来ない、私は簡単には死ねない。

目的のものは黒流樹海にはなかった、マゼランはまた会いましょうと言ってくれたが……それは難しいだろう。

彼女を感染者にしたくない。

笑顔で見送ってくれる彼女を見て尚更そう思った。

◎月☆日 にわか雨

イーサンと出会った、出合い頭感謝されたが何のことだろうか？

聞いてみると、飯が不味いレユニオンをここまでまともな食環境を整えた私に敬意を表しているらしく、いつか出会いたかったのだと。

そういえば私の知識では、イーサンは食事がまずいという理由で口

ドスに加入したと記憶している、まあ気持ちは理解出来る、あんなものは食事とは言えない。

ただ本当にそれだけの理由でレユニオンから離れたとは考えにくい、彼にも何かがあるから起きて、結果的に積み重なった不満が爆発してロドスに行つたのだろう。

あわよくばこのままレユニオンに居て欲しい所だ、彼とは敵対したくない。

……そもそも、私はロドスとも敵対したくはない、それは少しばかり欲張りで、恐らく実現不可能なことだが。

しかし実際に彼の擬態能力を見てみると本当にそこから消えたように感じる、まるでファウストのようだ。

その擬態能力は是非とも私の部隊『クリスタルレンズ』に欲しい逸材だ、それとなく誘つてみると、考えてみると言つてくれた。

良い返事が返つてくると嬉しい。

◎月◇日 曇り

珍しく、スカルシュレッダーと食事を共にした。といつてもたまたま相席になっただけなのだが。

スカルシュレッダーは私も含めてあまり他の幹部と関わろうとしない、これを機に親睦を深めようと距離を詰める事にした。

幸い私に対してはあまり不信感や嫌悪感を感じてないようで、そこそ話が弾んだ、その時に少し踏み込んだ話をされた。

もう一度姉に会いたいと言つた彼に私はきつと会えると返した、それは私の知識の中で会うとわかつていたから言つた言葉だが、スカルシュレッダーは本気には捉えなかつたようだ。

……家族か。

転生前なら兎も角、今生に家族と言えるのは……それこそタルラしか居ない。

私が物心ついた時には両親は鉱石病で死んでいた、幼い私が何とか生きられたのはタルラと出会えたのと、環境が良かったからだろう。

結局その日常も感染してから全てが変わつた。変わらなかつたの

は私とタルラの関係性ぐらいだ。

家族であり親友であり同胞、それがタルラと私の最も近い関係性だろう。

その事をスカルシユレットダーに伝えたら驚いた様子だった、そういえば人に私とタルラの関係性を言うのは初めてか。

「あなたにとってタルラが特別な様に、タルラにとってあなたも特別なんだな」と言われ、少し照れた。

そうであつたら、嬉しい。

どう思う？タルラ。

◇月□日 暴風雨

思えばこのテラの世界で私は一度も天災に遭遇した事は無かった。

この日は初めて天災に遭遇したので日記に書く事にした。

暴風雨、洪水、噴火のみならず隕石の落下までもが天災に含まれている、今回はその暴風雨に遭遇した。

とてもではないがああ風をまともに受けたら人は愚か建物すらも簡単に暴風で破壊されるだろう、すぐに移動都市を起動させ離れたが、その際にオリジニウムで変貌し、進化した魔物と呼ぶべきクラスや、ワイバーンのようなモノ達と交戦した。

都市にいるレユニオンの構成員を私の指揮で適切に動かし倒していく、同時に私もサブマシンガンで応戦して何とか退けた。

二丁の短機関銃は私に良く馴染む、今まで気にしていなかったが複雑な銃器を扱える事から私の種族はサンクタ族だったようだ。

……思えば大規模なアーツを行使する時は天使の輪つかのようなものが頭上に出ていたな。

それにしてもこんな時にタルラも私以外の幹部も居ないのは本当に辛い……一人も犠牲が出なかったただけ良かったか。

このテラという惑星に救いはあるのだろうか？

破壊されていく大地を見て私は疑問に思わずには居られなかった。

◇月☆日 曇り

起きたらタルラが隣で寝ていた。

ええつと、まず整理しよう。

昨日は久々にタルラと共に居た、書類等や政策等々を一緒にある程度纏めて、たまには息抜きに飲みに行こうと誘ったのは覚えている。

そんな余裕はないとか渋っていたタルラを強引に連れて行って飲み始めたのも覚えている。

久々に二人きりで飲む酒は美味しく、結構なペースで飲んでいたらタルラもそこそこ飲んでいた気がする、途中その様子をファウストが「それ以上飲むのは辞めた方が良いんじゃないか」と言っていたのもなんとなく覚えている。

それをWが面白がってさらに酒が追加されてから記憶が無い。

なんで私もタルラも脱ぎかけなんだ……？

は、恥ずかしくなってきた、何をしていたんだ？何かしたのか!?

い、いやいや、女同士で何かあるわけじゃない。暑くて脱いだんだろう、きつとそうだ。

しかし、寝顔が綺麗だな……穏やかに寝ているタルラを見るのは何年振りだろうか、最近では難しい顔で常に考えていることが多い彼女だった。

私は少しでも、タルラの役に立っているだろうか？

その独り言が聞こえていたのか、タルラが起き上がって「君がいて良くないと思った事は一度もない」と寝ぼけた声で私に言った。

……このタラシめ。

とりあえず次Wに会ったら殴ろう、そうしよう。

◇月◇日 晴れ

元レユニオン幹部と出会った、タンカラーに赤色がアクセント（ゲーム内SDでは黄色）のEOD（対爆）スーツに身を包んだ大柄な男性、Big Bob 『大柄のボブ』

変わらない現状に絶望し、自らに賛同する『兄弟たち』を連れてレユニオンから離反したボブは、最初は私を連れ帰る為の追手だと判断しあわや戦う羽目になりそうだったが勿論そんな事は無い。

基本的にレユニオンは去るものは追わない、それに戦ったとして私一人でボブ、そして彼らの兄弟たちを完全に無力化する事は難しいだろう。

ならばなぜ出会ったかといえば偶然としか言えないだろう、私は他のレユニオン幹部と少し違う立ち位置で活動しているのだから、こう言う事も起きがちなのだ。

鉱石病についての研究、安全な環境を作ること、もしくは移住する為の拠点探索、食改善の為の現地採取、技術開拓の為の未知の領域調査などを私は主に行っている。

その事を誠心誠意伝えたら納得してくれたようで、戦闘にならずホッとした。

レユニオンは変わったか？と聞かれたので、あるがままを伝えた。「結局、戦いからは逃げられないのなら俺たちに居場所は無い」と言った彼の言葉が印象深い。

だけど私は、非感染者の考えが一変しない限りその居場所は作れないと思った、そしてその考えを一変させるには感染者が、レユニオンが表立って権利を主張し勝ち取る他ないと。

それを暴力以外でどう話す？と問い掛けられ、話し合える事に越した事はないと返した、それでもそれが実現出来ない矛盾を抱えたまままだ。

「ミラー、君がトップなら或いは」と言ってくれたが、私にタルラほどのカリスマ性もなければ、志も強くない。

タルラについていく事を決めたのは私自身だ、その責任は自分で取る。

私の考えを聞いて満足したのか、ボブはクルビアに移住する事を私に告げてその場を後にした。

……クルビアか。

もしあの時、私がもう少し知恵を振り絞ってクルビアに車を走らせていたら、タルラは???のままだったのかもしれない。

そこに後悔は無いが、少しだけ過去に戻りたくなった。

◇月★日 曇り

(酷く乱雑な文字だ、読み解く事が出来ない)

◇月×日 曇り

昨日は不安定になっていたようだ、最近はずつと使用していないから大丈夫だとは思っていたが、それでもやはり起きる時は起きるようだ

偶にこう言う事が起きる、人格が安定しなくなる。どうやら二重人格などでは無いようだが、それに似た傾向らしい。

目の前の長い金髪の女性、感染者援助団体「使徒」に属している、ナイチンゲールからそう告げられた。

人格が崩壊して倒れていた所を保護してくれたようで、私は彼女に感謝した、お礼を言われることでもないと言うが私はレユニオンの幹部であり、見つけるものかもし違っていたら私はこの世に居なかったか、政治的人質に使われていたのかもしれない。

というとナイチンゲールは「レユニオンの幹部なんですね」と驚いていた、あれ。私実はそんなに知られてない？

それから少し話して気付いたが、ナイチンゲールの感染状況は私より危険だ……短くはないが、そう遅くもない、そんな印象を受けてしまう。

何とかしてあげたいが、私が出来たことはその逆でしかない、私に触れる事は感染を悪化させるだけだからだ。

ナイチンゲールが私の検査をしてくれたお陰で気付いたが、どうやら私の体は他の感染者よりも更に他人に対して鉱石病に悪影響を及ぼす体のように、自意識がある今は制御できても、寝ている時や人格が保てない時は周囲を結晶化させるようだ。

そんな状態の私を保護してくれた事に改めて感謝しないといけない。

……だからこそ、私は少しでも早く彼女が良くなるように、ケルシー先生の事を打ち明けた。

私はもう戻れないが、ナイチンゲールは私とは違う、正当に診て貰

えるだろう。

クリスタルレンズの構成員が私を捕捉して迎えを寄越してくれるまで私はナイチンゲールと他愛のない話をした。

また会いましようと言われ、もう会わない方が良いと返すのも彼女で何度目だろうか。

「それでも、私は会いたいと思いますよ」と、笑顔で言う彼女に少しだけ嬉しくなった。

彼女と敵対する事は出来そうにないな。

◇月○日 強風

普段は無口なクラウンスレイヤーだが、今日は饒舌だった。

口が酒臭かったので飲んで酔っ払ったのだろう、珍しい事だ、こんな機会もなかなか無いので酔っ払いの相手をしてあげよう。

クラウンスレイヤーは最近仕事ばかりで疲れたと喚いていた、確かに最近のクラウンスレイヤーの仕事量は多い、主に諜報活動など。

まあクラウンスレイヤーのーツはそれらの作戦にうつってついで替えが利かない、だからタルラも酷使するし、仕方ない無いことかな。

だからそれは頼られてるって事だ、と言うと納得し得意げな様子だ、案外乗せられ易いのか？私は心配になった。

そんなこんなで飲み（私は飲んでいない）話していたらタルラが乱入しに来た、タルラもまた疲れが溜まってきたのだろうか。

……なんで怯えているんだ、クラウンスレイヤー。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

p. ml : 15 曇り 感染者援助団体「使徒」本部

ナイチンゲールの検査結果。

【源石融合率】 15%

明らかな感染症状。

【血液中源石密度】 0.63u/L

基準値を大きく上回っている。非常に危険であり、充分な処置をし

なければ長くは無い。

彼女のオリパシーは一般的なオリパシーと比べてその在り方が異質だ、主に他者に対して危険な影響をもたらす。

鉱石病を飛躍的に進めてしまう物質が体内に存在している、まるでオリジニウムそのもののようなのだ。

もし彼女が死に、それが災害になるとして。その災害は世界を巻き込むだろうと容易に想像できる。

何とか感染者の基準値まで治せたが、気休め程度だろう。

これは考察だが、ミラーは時折人格が保てなくなり意識を失うと言っていた、私が発見した時も意識を失っていた状態で見つけた。

彼女の周囲30メートルが結晶の波で出来ていた事から……恐らく、体内で生成される結晶が致死量に至ると体の防衛本能としてそれを体外に放出しているのだろう。

本当なら定期的に彼女を検査したいが、彼女にはやるべき事があり、もしレユニオンの幹部を匿っていると周囲から知られると「使徒」としても不都合が多すぎる。

……ミラー自身も好感の持てる女性でした、彼女はもう二度と会わない方が良いと言っていました、それは私の体を案じて言ってくれたのでしよう。

そういえば、私が自己紹介する前から私の事を知っているようでした、それ自体はどうとは思わないのですが……。

不思議な方、まるで旧知の存在のように感じてしまいますね。

3 ページ目

☆月□日 晴天

ロドスに出会った。

少し語弊がある、より正確に言うならロドスのトップの一人、ドクターと出会った。

これが記憶を失う前のドクターかと、新鮮な気持ちになった、少なくとも確かに、私の知る知識のドクターと似ているようで似ていない、不気味だ。

出会ったからと言って私に敵対する意思は無いし、それは向こうも同じだったようで私としては助かった。

「最近のレユニオンは過激な集団だと聞いたが、君は違うらしい」とはドクターの言葉だ、ドクターと会話していると思う事は?????（文字が潰れていて読めない、意図的に潰された様だ）

彼、或いは彼女と私の鉱石病に対しての思想はとても良く似ていた、今からでもロドスに来ないかとも誘われ、それもまた良いかもしれないと思う、だが私には背負うべき責任とやるべき責務がのしかかっている。

何より親友を一人には出来ない。

そう告げると少し残念そうにして、いつでも君を待っていると言った。

悪い気はしなかった。

☆月○日 晴れ

パトリオットと行動を共にするのはこれが初めてだ、レユニオン幹部の中でも一番の古老で、軍人氣質な彼と行動を共にするには少し緊張してしまう。

その緊張が伝わったのか、そう固くならないで良いと気を使われてしまった。

パトリオットはレユニオンの食事改善を行った私に一定の信頼があるようで、厳格な性格でもやはりレユニオンの食事は不満だったの

かと少しおかしくなった。

話してみると、他の幹部の人たちとはモノの見方が変わっているようで、非感染者というより、ウルサス帝国の現状の体制を敷いている存在に対して強い敵意を抱いている印象だ。

「君はどうなんだ、何故レユニオンに居る」そう問われて、私は少し言葉に迷った、私は非感染者に対してそれほど強い憎しみがある訳でもない、パトリオットのように帝国の、国家の闇を作る人物に対しても、憎しみとまでは行かない。

感染者が平等にしっかりとした権利を持った一人の人として全世界にそれを伝える為に居る、これが私の考えだ。

……それと、タルラを一人にしてはおけない。

そう言うと、パトリオットは頷いて先を進んだ。

良かった、納得してくれたようだ。

☆月×日 豪雨

久しぶり、というかこの豪雨に外出するのは気が滅入るので自宅にいる。

レユニオン幹部になってから貰った一軒家だが寝る事と書類作成やその他諸々以外に使っていない、女の子らしいものの類が少ないのは、単に家に物を置かないからだ。

一人の時間というのも珍しい、基本的には他の幹部や、そうでなくても外出した時は高確率で誰かに会ったりする。

少し寂しい。

何かをしていない時に私は一人でいる事が嫌いのようにだ、初めて知った。

誰かが玄関にやってきたようだ、扉を開けてみるとそこにはフロストノヴァがいた、どうしたのだろうかと聞いてみると、遠征帰りで偶々寄ったららしい。

そういえば、フロストノヴァ好みのウイスキーを買っていたのを思い出した、家で飲まないかと誘うと快く受け入れてくれた。

こうやって誰かが会いにきてくれるのは嬉しい事だ。

この関係がいつでも続いてくれるよう、私も頑張らないとな。

☆月◇日 晴れ

サーミの伝統のログハウスの製作技術が欲しいと言われたので、私がサーミに行く事にした。

ログハウスの製作技術が欲しいというのは建前で、本当の所は飛空装置の運用テストだ、タルラ自らやると言っていたが万が一が起きても困る。

そう言うとタルラは「君に万が一が起きたらどうする」と言っ、言い合いになってしまい、だが最終的にタルラが折れて私が使う事にした。

無事サーミに辿り着くことが出来たので、手頃な要塞がないか探して入る事にした。

何かいい手土産はないかと物色していると、声をかけられた。聞き覚えのある声だ、私の中の知識がこの声はサーミ出身のミステリアスな学者だと告げる。

タロット占いを最も得意とし、カードゲームにも造詣が深いギターノだ。

どうやらタロット占いをしているのだが客が来ないとの事、確かギターノのタロット占いは素晴らしいとの事なので、興味本位に占ってもらおうとしよう。

……料金が割高だから客が来ないんじゃないだろうか？

早速タロット占いが始まる、タロットカードがシャッフルされ、六芒星のように配置されていく、ヘキサグラム法でのタロット占いらしい。

何か質問して欲しいと言われたので、私は親友とうまくやれるのか、今後大きなことがあっても関係性は崩れないか聞いてみる事にした。

1枚目は逆位置の運命の輪のアルカナが出た、急速に運気が落ちて、現状が悪化していく、ただその変化はあくまで一時的なことから、変化の到来を告げる事が過去に起きた？と言われた。

たしかに、言われてみれば当てはまる、感染者になって現状が悪化した、それは後に起きる変化の到来を告げる言葉でもあったからだ。

次に2枚目は正位置の魔術師のアルカナ、現在は起源やチャンス、創造と捉えて、新しい可能性を自ら切り開いていく、と言われた。

もう私はこの時点でギターノの占いに釘付けになってしまった、まるで年頃の少女のように次を急かしてしまう。

苦笑しつつギターノが3枚目を開く、結果は逆位置の世界のアルカナだ、このままの未来では答えにたどり着けない中途半端な状態を表し、未完成という意味合いが強まるようだ。

続いて4枚目を開く、対応策や未来に対するヒントのカードらしい、結果は正位置の力のアルカナ、自らの目標を強い意志で、達成することが出来れば3枚目の世界のカードは正位置になるはずだとギターノは言う。

5枚目は相手の気持ちを示すカードらしい、これは正位置の女帝のアルカナが出た、物質と精神面で満たされた気持ちを表しているようだ。

……嬉しいけれど、恥ずかしいな。

6枚目は相談者の願望、相談者の気持ち、つまりは私の事だ。

結果は月のアルカナ、月が欠けていくかのように、その人の心が不安になっていくようすを表し、将来が見通せない気持ちが強く出ていると言われた。

そして最後の七枚目、結果は星のアルカナ、理想や希望など、心が煌くような現実の到来。

最終的に、心の扉が開くかのように、あなたの世界が輝きだすとの事だ。

ギターノの占いが必ず100パーセント当たる訳ではないが、満足した。

ギターノも面白い占いが出来たと満足してお代は要らないと言ったがそういう訳にもいかない、少し多めにお金を置いて、ギターノに別れを告げる。

ギターノは最後に、これは現時点での占いで、状況によって変わっていく事もある、だから最後は貴女の心の持ちよう次第だと言われ、私は改めて決意する。

私の望む未来を掴むために。

先ずは手土産を探す事にした。

☆月★日 晴れ

この前の飛空装置の運用テストで分かったが、アレは私やサンクタ族でなければ扱えない事が判明した。複雑な操作を強いられる為、機械の造形に理解のある種族でなければただの鉄のガラクタだ。

量産するのは無理だろう、そのまま私が譲り受ける形となった、といつてもこの飛空装置を使いながら戦闘を行なったりするのは現状難しい、移動手段にしか使えないだろう。

それでも移動面のコストを考えると遥かに楽だし、重宝するだろう。

しかし両親は何故あの都市に居たのだろうか。

両親がサンクタ族であり、私もサンクタ族なら普通はラテラーノ公民としてその地域から離れる事は無いと思うが。

私自身の謎が深まるが、自分の出身にそこまで興味がある訳ではない、結果的にタルラに出会い今に至るなら種族など問題にはならないだろう。

感染者に種族間での問題など、些細な事だからだ。

☆月△日 曇り

メフィストが歌を歌おうと頑張っている所を目撃してしまった。

彼の非感染者に対しての恨み、所業は私としてはあまり褒められたものではないが、彼が心優しい人物だという事も理解しているつもりだ。

メフィストとファウストの二人の物語を、私は知識としても本人の口から語られた話としても知っている。

全ては私の体を、メフィストを、感染者の体を蝕む鉱石病が悪い。

この致死率100%の病がテラの先^{エーシエンツ}民全てを狂わせた。

メフィストは気配に気付いて、「僕はまた歌えるかな」と私に問いかけた。

歌えるさ、きつと。

今は歌えなくても、生きてさえいれば歌える日が来る。

ファウストは生き続ける事に意味はないというが、私は生き続ける事にこそ意味があると、それが気休めでしかなくても言い続ける。

感染者には辛い現実しかないのかも知れない、私では救えないかも知れない、それでも私は彼らには生きていて欲しい。

「ミラーの為に生きないとね」とメフィストは言ってくれた。

私は現実から目を背けさせているだけなのかも知れない、私はタルラのように人を導く才能は無い、寄り添えるだけの優しさもない。

ただ君に生きて欲しいと願う、私にはそれしか出来ない。

★月☆日 晴れ

東国出身の人物と出会えた、流浪の武者マトイマルだ、大量のオリジムシを一網打尽にする様は正しく鬼武者と呼ぶにふさわしいだろう。

手を貸さなくても良いかと思ったが、これを機に極東について出身者から情報を得ようと助太刀した。

と言っても大部分はマトイマルが片付けて、私は倒しきれなかった分のオリジムシを射殺するだけだったが。

マトイマルは私に感謝を告げて直ぐに去ろうとしたので慌てて引き留めた、せつかく会ったんだから話でもしようと言うとマトイマルは嬉しそうに頷いた。

……私の知識通り、なんとというか、ちよろい。単純だ、騙されやすい性格なのは本当の様だ。

それとなく極東について聞いてみるが、あまり有益な情報は出てこなかった、強いて言うなら極東には米がある事がわかったので、何とか極東と交易関係を結べれば、レユニオンの新たな食事処に米料理が増える事だろう。

米料理、良い響きだ。

聞いてみると麺類なども盛んだと言うじやないか。
レユニオンに帰ってやる事が決まったな。

★月×日 にわか雨

Wにドクターと出会った事を伝えると驚かれた、Wの知るドクターと私の出会ったドクターとでは印象が違った様だ。

一体ドクターは幾つの顔を持っているんだ、謎が深まるばかりだ。
Wによれば私の思想と彼の思想は交わる事はない、水と油だと言っていたが、どう言う意味だろうか。

それは内緒らしい、なんかむかつくな。

私が拗ねた事に苦笑しつつ、一杯奢ってくれたので許した。

そういえば、Wが珍しく高価なワインを置いて行ってくれた、何故と聞くとニヤニヤした顔で「秘密」と言われた。

むう、なんだろうこの疎外感は。

★月○日 誕生日 晴れ

タルラ曰く、今日は私の誕生日らしい、やっとまともに祝える日が来たと珍しく笑顔で祝ってくれた。

そうだったのか……前にWが高価なワインを置いて行っただけはもしかしたら誕生日の贈り物だったのかも知れない。

思えば、私が転生したと自覚してから誕生日を祝われることはなかったし、感染者になる前の記憶は定かではないので、自覚がない。

タルラはどうやって私の誕生日を知った？と聞くと、私の口から直接聞いたと言っていた。

なら感染者になる前の、記憶が定かでない時に言ったのだろう、深くは考えない様にした。

そうと決まればとタルラは私の手を掴んで私を色々な所に連れて行く、道中同じ仲間達が祝ってくれたり、贈り物を貰ったりもした。
クリスタルレンズの最年少の仲間がこっそりと教えてくれた、かなり前からタルラが「この日はミラーの誕生日だ」と伝え回っていたそうだ。

て、照れるな。

素直に嬉しい、私もタルラが誕生日の時は同じぐらい派手にやりた
いものだ。

それをタルラが聞いていた様で珍しく嬉しそうに照れていた。

それを見た同胞の一人が「あの、タルラの姉さんが照れて
るー！？」と大声で驚愕としていた。

……照れ隠しにその同胞をぼこぼこにしていたのを必死で止める
ファウストとクラウンスレイヤーを見てなんだかおかしな気分
になった。

★月☆日 曇り

最近是比较的タルラの思考も落ち着いており、当初の性格に戻つて
きた。

このままなら、もしかすると過激な暴力以外での感染者を“人”た
らしめる政策活動が出来るのではないかと私はそう思わずにはいら
れない。

ファウストが私の存在や影響がタルラを繋ぎ止めていると語つた
が、それは言い過ぎだろう。

しかし……そうと決まれば目先の問題はやはりウルサス帝国だ、他
の国家や団体に比べて感染者に対しての迫害は、あの帝国に巢食う者
を纏めて変えていかなければ一生変わる事は無いだろうと思える程
だ。

ウルサス帝国だけではない、他国も感染者に対する軽蔑の目は私達
レユニオンの活動を以てしても、変わらない現状がある。

……難しい問題だ、どうすれば非感染者と私達感染者が同じ釜の飯
を食える様になる？

それとも、そんな未来は鉱石病研究の進展が起きない限り、未来永
劫訪れる事は無いのだろうか？

私に出来る事は何だろうか、感染者を助長させるこの体で出来る事
は何か無いのだろうか。

今一度考え直さないといけないのかもしれない。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

a. m 9 : 29 曇り

有鱗目科の少年の独白。

最初に出会った時のことはよく覚えている、タルラから「ただ一人の親友だ」と紹介された彼女は、俺達に気付くと何故か少し悲しそうな表情で俺達を見た。

あまり深い話はしなかった気がする、だがなんとなく信用してしまいたいそうなのは、タルラとはまた違った別のカリスマ性を持つ人物だからだと客観的に判断した。

タルラは俺には救いは必要ないと言った、同じくミラーも「私には救いを与える力は無い」と言っていた。

だがそれと同時に「それでも救いたい者は居る、成したい事がある。だから生き続けている」とも言った。

俺は、この世界で生き続けて良い事なんてないと思っっている、ただイーノと二人で生きていける、俺はそれで良いと思ってる。

だがミラーは生き続ければ良い事があると、信じて生きてる。俺と思考がまるで違うが、その考えに好感を持つてしまうのは――

いや、よそう。

ある時に、タルラは「彼女は私を支える精神的柱であり、彼女を脅かす全てを排除しなければならない」と言っていた、確かそれから少しずつタルラは以前のタルラから掛け離れていったのだと、後になつて気づいた。

ミラーという間にその片鱗はあまり見せない、タルラが大きな動きをする時は決まってミラーを遠征させたりしていた事から、ミラーにはあまりその深淵を見せたくない様だった。

「それで良いのか」と思わず意見してしまった、だが珍しくタルラは「わからない」と表情を隠して、そう言った。

ここで、もしミラーの気持ちを考えず独断専行で更に過激な思想に染まっていたら、俺はイーノを連れて離れていたかも知れない。

まだタルラは迷うだけの判断ができる、気晴らしでもしたらどうだと告げると、思い出したかの様に近々ミラーの誕生日があるとだけ告げた。

祝い事でもするつもりだろうか。

結果的にそれは良い方向に運ぶと思う。

ただ性分からか、悲観的な考えをしてしまう、今がよくても後は分からない、レユニオンはあの二人の関係性で大きく変わる。

ミラーは指導者にはなれない、道を切り開く強い力を彼女は持っていない。

タルラは指導者だ、だが強すぎる意思是、行き過ぎればそれはもはや狂気の所業だ。

少なくとも俺は、今のレユニオンは居心地が良いと思う。

所でメフィスト、誕生日に何を渡せば喜ぶだろうか。

酒類？いやしかし、ミラーは酒癖が悪いからな……。

4 ページ目

×月○日 雪

北方に位置する国家。北という言葉から感じる通り雪に閉ざされた、カランド山を聖山として崇める山岳信仰を国教とした謎多き宗教国家、それがイエラグである。

保守的国家であるイエラグは情報が入りにくいので定期的に誰かが諜報活動をしないと情報を入手する事はほぼ不可能だ。

こういったことは普段はクラウンスレイヤーがやる事だが、あいにくとクラウンスレイヤーは別の任務を受けているようで、最終的に手の空いていた自分に回ってきた。

それにしても、閉鎖的なこの雪国でよく国家としての形を保てるなと感心している、最近ではカランド貿易がイエラグの閉鎖環境に風穴を開けたとの事だ。

現にこの情報を得られたのもそのカランド貿易あつてこそだ、何をもつてイエラグに変革をもたらすのか、張本人であるシルバーアツシユの動きにも注目していきたい所だ。

もし協力できる思想なら、互いに協力し合いたいものだ。

×月×日 晴れ

タルラが机に突っ伏して寝ていた、疲れているのだろうか、掛け布団をかけてあげようとしたら起きてしまった。

起こした事に謝ったが、謝らなくて良いと言われ、そのまま仕事を始めようと動いたので止める。

もう今日はいいだろう、私の相手をして欲しいと告げると、苦笑して「わかった」と言ってくれた。

今のタルラはレユニオンに来る前の性格に近い、憑物が落ちた様な印象を感じる、まるで何かに生き急いでいたかの様なあの雰囲気が消えたタルラは、君主として正しいカリスマ性を秘めた誰もが認めるレユニオンの指導者だろう。

それとなく、何故暴力的活動を頻繁にしていたのか聞いてみた。す

るとタルラは難しそうな顔で、言い渋って話さない。

ジツとタルラを見つめていたら根負けした様で「私や、君が生きている内に変革を成すには可及的速やかに今の情勢を変える必要があるからだ」と語った、暴力を持ってして制す事は最も単純な原始的制圧だと言う。

だがそれは、非感染者と感染者の溝が更に深まるだけに過ぎない事だと私が言えば、タルラはそれに何の問題がある？と問い掛けた。

私達感染者が、同胞が受けてきた痛みは話し合いで埋められる物じゃない、全てが話し合いで終わるなら戦争は起きないと語る。

……たしかに言い分はわかる、私は到底叶わない綺麗事を言っているだけに過ぎないのだろう、だがクルビアなど他と比べて感染者に対して理解のある地域や他企業国家、鉱石病を治療する機関などもある。

その者達と協力する為にも、暴力で制す事は極力避けるべきだ、譲り合い手を取り合えば感染者の人権も、鉱石病だっていつかは解決の糸口が見えるはずだ。

「君は正しい事を言ってるんだろう、ただその正しさを受け入れられない者達が居ることも理解するべきだ」

それがタルラの言葉だった、その時だけは、私に見せたことの無い表情で見つめていた、目は逸さなかった。

タルラは、その正しさを受け入れられない者のうちの一人なのか？「他にもない君の声なら、納得はするさ」

納得はする、か。

なら、これから先も納得させ続けてやるさ、そして一緒に探して行く。

親友だからね。

……照れ顔、ごちそうさまです。

×月☆日 曇り

このテラには私の生きてきた知識と、転生者としての知識を総動員しても理解出来ないモノが多数ある、そのうちの一つがアピサルだ。

遍く生命の発祥の地である海と関係がある事ぐらいいしかわからず、その地域の種族性もまばらだ、何か宇宙的な、超自然の……オリジニウムとはまた別の強大なナニカが潜んでいると、考察する。

私の知る、行った中で海を見た事も、文献から探す事も出来なかった、私が今立っている大地と、海とでは隔離されているのではないかと思う。

私の知識では、アビサルの出身の彼女らは共通してオリジニウムアーツへの適正が欠落しており、また地上では普及しているオリジニウムアーツに対する知識が非常に乏しいという。

海はオリジニウムが存在しない場所なのだろうか？

では知識の中のスカジヤスペクターのような、圧倒的な戦闘能力は何と戦い手に入れたものなのだろうか？

もし海に行く機会があるなら、是非探索してみたいモノだ。

×月□日 曇り

対空装置で移動していた所、気になる事が起きていたので降下した。

するとそこにはめっちゃくちゃに破損した車の前で無防備に睡眠をとっていた青髪のサンクタ族が居た、ああいや、サンクタ族でありそうではないのだったか？よくわからないな、ただ純粋なサンクタ族ではなかった気がする。

それは私もか、そもそもサンクタは生まれて知能が芽生えた瞬間から頭上に輪っかが現れるそうだ、私の場合はアーツを解放する時だけ輪っかが現れる。

……もしやと思うが。

そこまで考えて青髪の堕天使、神出鬼没の謎多きトランスポーターことモステイマが起き上がったので思考を閉ざす事にした。

レユニオンのナンバー2が何でここに？と問われたので、ただの興味本位で来たと告げると、この車を壊したのも貴女の仕業？と敵意をもって聞かれた。

いや、いやいや、私が来る前にはもう壊れていたが。

あわや戦闘になるか否か、といったところでモステイマが気を落として「どうやって帰ろう……」と落ち込んだ。

どうやら龍門に帰る最中だったようだ、そういえばモステイマはペンギン急便の従業員だったな、なら私が連れて行ってあげようと提案すると良いの?!と言われた。

と言っていて気付いたが、私に近付き過ぎると鉱石病に罹る恐れがある、どうしたものかと思つたが「私なら大丈夫だよ」とどこか誇らしげに話すモステイマに、少しだけ救われた。

私の飛行装置『EXIT2A』は改良を重ね、人一人分ぐらいなら乗せられるようになった、飛空用バイクの様なものだ、最もコスト的に量産は厳しいが。

モステイマを背後に乗せて運転する、その際モステイマと色々な事を話した。

話してみるとたしかに、微笑み続け冷静に会話するその様子ではまるで空気に近い、ただ感情が無いわけではない、少し考えている事が分かりづらいいだけだ。

そう言う私に「君は不思議な人だね」と言われたが、それがどういう意味で言つたのかはわからなかった。

それとなく、アーツを使つた時にだけ輪っかが出現したり、輪っかが無い天使が居るかと思うが、見たことも聞いたこともないらしい。

……ならば私は？

自分の出身や種族に特に興味は無いと前は思っていたが、段々と自分の体が不気味に感じる。

モステイマは私の様子に「心当たりが無いわけでもないんだけどね」とだけ言つてそれ以上は教えてくれなかった。

教えてくれたら嬉しかったが、知らなくていい事だとモステイマは変わらぬ表情で言う。

龍門に近づいて来たので、付近で下ろす。

また会える時もあるだろう、その時は教えてと言つたら微笑みながら「会えたらね」とだけ言われた。

不思議な女性だった、初めてのサンクタ族との邂逅は更に私の体の

謎を生むだけだった。

×月☒日 曇り

レム・ビリトン、国家ないし国営の鉱山採掘場。私の二丁のサブマシンガンを改良させる為に此処で取れる鉱石が必要で、私はそれを回収しにレム・ビリトンに来ていた。

とても寒くて、街の空気からも錆臭い臭いが漂う場所と転生者の知識として知っていたが、実際に目の当たりにするとここまでとは、長居は出来ないな。

それに感染者に対しての扱いもあまり見ていられない、それとなくレユニオンに来るよう促しておこう。

しかし……そう遠くない未来のロドスのトップの一人、アーミヤはこんな所で過ごしていたのか。

どうやって暮らしていたのだろうか、当然だが私は彼女達について“知識”以上の事柄は知らない。

本当の意味でわかり合うには、知識以上に縁を築かなければ、彼女達とは手を取り合えないだろう。

鉱石病をどうにかするには、きつと協力し合わなければならぬのだ。

……私が持つ疑いの気持ちも抑えて、嘘偽りなくケルシーと互いに話す機会が出来れば、実現出来ない未来ではない筈だ。

×月●日

フロストノヴァとWという、珍しい組み合わせにばったり遭遇した。

何やら話し合っていたようだが何について話していたのかは教えてくれない、気になるじゃないか。

周りのスノーデビル小隊の同胞達に聞こうとしたらフロストノヴァが「話せば腰にあるポトルは私のモノだ」と言ったので誰も教えてくれなかった。

Wが「ミラー、服でも見に行こうよ」と誘ったのでわかったと言おう

うとした時に、「ミラー、良い店があるんだ、行こう」とフロストノヴァが私の腕を掴んだ、つめたっ。

それから私を取り合うように二人が衝突しあって喧嘩になった、何してるんだ……三人で行けば良いじゃないか。

「ミラー姉さんは女心がわかってないっす！」とスノーデビル小隊の一人に言われた、ちよつとショックだ、私も女の子なんだけどな。

そしたら瞬時にWとフロストノヴァの拳がそう言った隊員に降りかかった、痛そう。派手に飛んだなあ。

というか二人とも本当は仲が良いんじゃないか？と言うと同じタイミングで否定した、やっぱり仲良しじゃないか。

仲良くやろう、三人で服を見に行き、その後には飲もう。

その方がきつと楽しい。

×月◇日 天災

歴史に残る1日だ。

メフィストとファウストの部隊がオリジンシヤ狼と交戦していると報告を受けた、それだけなら何ら問題もないが、どうやらそれらを束ねている巨大感染生物と遭遇したと報告を続けられ、即座に飛行機を使つて飛んだ。

私の知識には無い敵だ、だが似たような生物は知っている、野生の巨大感染生物、特殊な環境で育つた変異個体。

アレは高温化での成長だったが、今から出会うその巨大動物は百獣の王が鉱石に感染し、異常な成長を遂げ、育つた変異個体らしい。

それはさして重要では無い、早く助けにいかなければ。

メフィストとファウストの部隊と合流した時には、既に何人かの同胞が事切れていた、間に合わなかったと後悔する時間はない、今生きている同胞を助けなければならない。

ファウストに部隊を引く様言い、メフィストに倒れたものに対して治癒のアイツを使えと命令した、メフィストは極力ファウスト以外にその力を使わないが私やタルラの命令なら別だ。

一人では無茶だと言われたが、メフィストは勿論ファウストもこの

スケールの化け物に大した有効打は与えられない、私がやるしかない。

巨大感染生物を見たのはこれが初めてだ、まるで一つの災害、大地を抉り、天空を破壊するその姿は、まるで前に見た暴風雨そのものだ。

一人で戦うには骨が折れるな。

ああいや。

……どうやら一人じゃないらしい。

いつからどうやってここに来たのかは問わない、ただ私の隣には最も信頼する世界で唯一の親友が立っていた。

長らく使っていなかった結晶のーツを解放する、サンクタ族特有の天使の輪っかが出現し、私の本来のパフォーマンスが発揮されていく。

同時にタルラも腰に携えた剣を解放し、視界に映る空間を歪ませるほどの熱量が放たれる。

これが最後の日記にならないければ良いな。

いや、タルラと一緒にそんな未来は古来永劫訪れないだろう。

後に名の付くこの戦いは、レユニオンの最大武力を全国家に知らしめ、また天災規模の巨大生物の撃破による世界貢献は、ある人物から『レユニオンは世界を一度救った』と言わしめる程であった。

(白紙が続く、数ヶ月以上触れていなかった様だ)

○月×日 晴れ

数ヶ月の月日を経て漸く目が覚めた。

天と地を分け、私とタルラで再起不能にしたライオンの様なあの巨大生物は後々に専門家が調べた所、動く天災となり得た非常に危険な生物だったようだ。

それを再起不能に破壊し尽くした私とタルラ……というよりレユニオン・ムーブメントは他国家から一定のレベルまで認められる様になった。

それが結果的に圧倒的な武力を周りに示した事で得た結果だとしても、認められる様になったことは大きい。

私は喜んだが、私の体を診た医療担当者は深刻な顔を崩さない。

何となくわかる、私はあの日、全力を以ってアーツを発動した、鉞石病が悪化したのだろう。

「もう二度とアーツを使う事はお勧め出来ません、軽いアーツの使用ならまだ目を瞑りますが、あれ程の大規模なアーツの使用は命を削ります」と、医療担当の彼女は少し涙目で語る。

私も死にたいわけじゃない、極力使わないようにするよ。

そこまで言って医療室の扉が乱雑に開いた、息を切らしたタルラがそこにいた、心配してくれていたようだ。

抱き付かれた、少し息苦しい。

「ミラー、一人にしないでくれ」

……勿論だよ、???

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

p. m 5 : 14 ??? ロドス・アイランド

【殲滅記録】

これは巨大感染生物、歩く災害である百獣王『ビースト』をたつた2人で殲滅したという恐るべき、誇るべき偉業をその目で目撃した元レユニオン構成員の情報を元に記した【殲滅記録】である。

大地を崩し、崩した大地の岩層を暴風のように操るビーストに対してその全てを結晶化させた後に、霧散させ物質を消滅させる、それは『結晶世界』という二つ名に恥じない、強力かつ広大な規模のアーツ術だ。

そうして出来た隙を『生きる怪物』は爆発的な熱を持ってしてビーストを融解させていく、暴風が効かないと判断したのかその巨体を翻し、生きる怪物と対峙するビースト。

しかしビーストは受けた傷を体内のオリジニウムで癒し構成組織を再構築していく事でその傷を治していき、時間が経っていくうちに生きる怪物が不利になっていく。

そこで結晶世界がビーストの手足を結晶化させ、破壊した。

体制を崩したビーストの再生が追いつく前に生きる怪物は瞬く間にビーストを融解していき、そこでビーストが最後の力を出すかのように、大地が裂き、雨雲が生成される。

強大な落雷が生きる怪物に対して、いやテラに対して衝突する、直撃するその寸前に、結晶となりその動きを完全に止め、崩れた結晶がビーストの体に突き刺さり動きを封じて行く。

これで最後だと言わんばかりの生きる怪物による最後の一振りが巨大生物を切り裂き、その生命活動を停止したのだ。

そして直ぐに生きる怪物も結晶世界も横たわった、限界を超えた力を使ったのだろう、倒れ力尽きたが、その後の適切な治療で重傷が残る事もなく、今も生命活動を続けている。

死体をそのままにしては甚大な鉱石病を促す発端になりかねない、レユニオンのみならず他国までもが迅速に処理したようだ、それでも戦闘の跡はテラの大地にくっきりと刻まれている。

後にこれらの英雄的行動は『百獣王討伐災害事変』と名付けられる事になった。

レユニオンの体制がどうあれ、感染者の有り様がどうであれ、レユニオン・ムーブメントに感謝をせねばならないだろう。

歩く災害である件の生物が彼女らによって討伐されなければ、歩く災害により世界の均衡は崩れ、先^{エーシエンツ}民はこのテラにいなかったかもしれない。

少なくとも私^{??????}（不自然に黒く塗りつぶされている）は彼女達を評価する。

世界の英雄として感染者が時代の上に立つ、それは新しい時代の改革なのかもしれない。

以上で報告を終了する。

5 ページ目

●月●日 晴れ

やっと万全に動ける様になった、さて早速何かしようとした所タルラに止められた。

もう少し安静にしていると言うタルラに心配性だなど苦笑する、もう残る様な痛みもない、大丈夫だと告げても怒る様な、心配する様な顔で私を見つめてくる。

仕方ないので、遠くには行かない事を伝えると溜息をひとつ吐いて「レユニオンから出るなよ」と忠告し、タルラは病室を後にした。

むう、折角なら一緒にお昼でも共にしようと思ったのに。つれないな。

入れ替わる様にメフィストとファウストがやってきた、もう体は大丈夫なのかと言われたのでこの通り問題は無いと安心させる。

「無理をさせてしまった」とファウストが謝るが、謝る事じゃない、全力を出していなかったら負けていただろうし、何よりアレは生かしてはいけない存在だ、結果的に後の災害を未然に防いだ事でレユニオン・ムーブメントとして次のステージに進んだ事を喜ぶべきだろう。そういうとファウストは複雑そうな顔をしたので、気分転換に食事でもしようと誘った。

メフィストは了承し、ファウストも付いていく形で同行してくれるようだ、「聞いてよミラー、この前ね」と他愛のない会話を繰り広げるメフィストに、彼らを守れて良かったと思わずにはいられなかった。

●月×日 晴れ

久々に私の部隊『クリスタルレンズ』の構成員全員が集まった、誰一人欠けていない事に安堵を覚える。

彼、彼女らは実を言う私やタルラと同期に近いような関係であり、年齢は疎らだがレユニオンに入ってから月日は同じ年月を得ている。

私が幹部になった時に、自主的に着いてきてくれた信頼出来る同胞

達だ。クリスタルレンズの最大の利点であり最強の力でもあるのは皆一概にレユニオン内部でしか存在を知られていないという事。

有名になってしまった私とは違い無名な者だからこそ、やれる事は多くある。クリスタルレンズが持ち帰る情報は貴重かつ重宝するモノが多い、いつも助かっている。

そんな彼女らだが、各々好きにやるスタンスなので私自ら指揮をとって部隊を動かす事は滅多に無い。

なので何故集まったのか聴いてみると「退院祝いです！」と元気よく構成員の少女が言った。

私一人のために？と言うと、さも当たり前のように勿論と言う、それはなんと言うか、嬉しくなった。

こうして全員で集まるのも久しぶりだ、今日は私が奢ってあげよう。

(以降文字が崩れている、読み解けない文字が続くが楽しげな感情で書いた様だ)

●月◇日 曇り

あまり記憶が無い、飲み過ぎた、あたまいたい。

何故か私の家には何人かの同胞達がいるし、私は何をしたんだ。

いつかにWに「その酒癖直した方が良いわ」と言われ、余計なお世話だと言ったが、もう少し自覚した方が良いかもしれない。

彼女達を起こしてとりあえず朝食を一緒に食べて、私が何をしたのか聞いた。

「べろべろに酔っ払って介抱しただけですよ」

……露骨に目を逸らしている、本当にそれだけか？

まあいいや、さてどうするかといった所で、改めて今のレユニオン・ムーブメントの立ち位置を考える。

一つの災害を止めただけで感染者の蟠りが消えた訳じゃない、ただ少なくとも『その猛威がもし此方に及んだら？』と考える国家は増えた。

結果的に外交が円滑に進みやすくなった、人的被害を出さないでこの結果を出せたのなら、まあ頑張った甲斐もある。

ただ、武力を見せつけそれを利用して事になっては本末転倒だ、これを機に感染者に対する偏見の目を無くしていき、鉱石病そのものをどうにかする考え方にシフトさせる必要がある。

どうやってそれを実現させるか……悩ましい、少なくとも二日酔いの頭で考えられる事ではない。

差し当たって私は水を飲む所から始める事にした、お水が一番。

●月★日 晴れ

私は数人のクリスタルレンズの構成員を連れてヴィクトリア王国の首都、ロンディニウム市に来ていた。

勿論密入国だ、ヴィクトリアは龍門の検問ほど厳しくない、隊員の独自の潜入ルートで簡単に市内に入る事ができた。

まあなんて事はない国家調査と、それからヴァレリーというケーキ屋に用があつた。

少し早い、もう直ぐ誕生日だからね。

ヴァレリーに着き、なんのケーキを頼もうかと物色していると、記憶にある人物が目に見えた。

後にロドスで常勤の後方支援スタッフを務めながら、戦場でサポートを行うオペレーター、ムースだ。

裏でケーキの製作、パンの焼き方や茶菓子の組み合わせなどを専門的に学んでいるのだろう、平和そのものの暮らしを行う彼女も、そう遠くない未来に感染者になってしまうのかと憂いてしまう。

願わくば彼女の手が異貌の手にならない事を願う。

未だに鉱石病そのものを治す手立てはどの企業も進展していない。

●月☆日 曇り

まさか私がきっかけで彼女の脱獄の手助けをするとは思わなかった。

最初から話そう、一人にケーキをレユニオンに持ち帰らせて、他数人をロンディニウムの調査で置いていき、単独でヴィクトリアの感染者隔離エリアに潜入していた。

この国の感染者に対する偏見はまるでウルサス帝国を彷彿とさせ

る、組織としてレユニオンの立ち位置が確固たるものになりつつあるが、感染者そのものはなんら変わらないとこの現状が著している。

虐げられ、石を投げられる。もはや当たり前前の光景だ。

悔しい、だが悔やんでも仕方ない、どうにかしてこの現状を変えなければならぬ。

彼らをここで解放するのは簡単だ、私が今すぐにでもタルラに連絡し、私の知識の中にあるチエルノボーグ事変の様に武力を持ってして鎮圧する事は容易い。

でもそれではダメなんだ、他の方法を探さないといけない。

ただその他の方法と言う道が、限り無くゼロに近い、まるで暗闇に手を伸ばしている様で……はつきり言う、疲れてしまうな。

だが私はこの先死ななくても良かった者達の為にもこの道を決して諦めない。

と改めて決意した所で、近くで爆発が起きた、アレは……監獄だ。監獄で爆発が起きたのだ。

監獄と隔離区に施された高い壁、感染者の犯罪者を収監する特別な監獄と、思考を巡らせてピンと来た。

私の転生者としての知識の一つに、現状を説明出来る一人の人物が思い当たる、爆発が起きたであろう場所へ向かう途中、倒れている者を発見した。

その人物こそ恐らくこの騒動を起こした張本人、ヘイズだ。

これが何度目かの脱獄の一つなのだろうか、如何にせよ無視はできない。

彼女を抱えて、すぐにその場から走り去る、道中見つかりそうになつたので仕方なくアーツを展開した。

使うなど口煩く言われているが、数秒ぐらいなら大丈夫だろう。

鉱石病が悪化したという事は即ち、私のアーツがより強力になつた事に他ならない。

事象の歪曲。

結晶の力の派生で、空間の認識を書き換えまるで自分が鏡の前に立っているかの様に錯覚させる。

数秒程度続くその状態を追手に掛けて、安全なところまでヘイズを匿う。

途中から起きていた様で「なんで助けるの」と問われた、君が倒れている以上に理由なんてない、そう言うのと怪訝そうに、ただ満更でもない様で深く帽子を被った。

追手も捌き、これからどうするんだとヘイズに問うと「付いていつちやダメなの？」と逆に問われた。

問われて言葉が詰まった、私の転生者としての知識として、彼女は脱獄後にロドスに加入すると決まっている。

現に私が今回ヴィクトリア王国に來なければ、今回か、また別の脱獄で抜け出し、ロドスへ向かったのだろう。

その流れを私が変わえていいのか、彼女をレユニオンに連れていっていいのか？

私は迷い、私に付いていく事は君にとつて必ずしも良い結果であるとは限らない、それでも良いのかと言った。

返事は早かった。

直ぐロンディニウムに残っている構成員達に連絡を入れて、ヴィクトリアから脱出する事にする。

これは私が初めて、本来の史実を変えた1日になった。

▲月☆日 晴れ

ヘイズは私の助手として行動する事になった。

というのは建前で、彼女はのんびり自由にどこかにいたり急に私の家で寝ていたり、まるで猫みたいだ。

まあ、それで何か悪いのかと言われるとそうではない、伸び伸びとする彼女は好ましい。

その事にタルラはなんだか怒ってるような雰囲気だったが、理由は教えてくれなかった。

▲月★日 曇り

気分が優れない、この前のアーツ使用がいけなかったのだろうか？

咳が多くなったように感じる、たまに目眩もする。

こんな姿、タルラに見せられないな、もうアーツは使いたくない。まだ倒れる訳にはいかないのだから。

▲月○日 晴れ

フロストノヴァが何故か怒った様子で私に「ヘイズはどこだ」と聞いてくる、何かあったのだろうか？

詳しく聞いてみると、楽しみにしておいたウイスキーを盗まれたよ。うだ……ああそういうえば、窃盗癖があったな、見つけたら氷の半身浴をお見舞いしてやろうと言っていたので、相当楽しみにしておいたのだろう。

まあまあ、後でヘイズに言っておくから、そんなに怒らないでやってくれ。

そう言う、「ミラーはヘイズに甘すぎる」と言われた、うむむ、それは仕方ないよ、猫好きだし。

まあまあ、それなら今から飲みに行こう。これでどうだ。

そう言う、「仕方ないな……」と言って怒りを収めてくれた、良かった。

「ミラーは飲み過ぎないように」とも言われて今度は私が不機嫌になった、良いだろう別に、私のお金で飲むんだぞ。

因みに飲んでる途中にしれっとヘイズも参加していた、勿論フロストノヴァはヘイズに説教していた。

しゅんと垂れ耳になっていた、かわいい。

▲月□日 雨

まさか私が暗殺を受けるとは思わなかった。

クルビアを飛行装置で移動中に第六感がざわつき反射的に身を翻した、瞬時に衝撃音。

術アーツだ、私は二ト口を起動して加速し、森の方へ身を隠す。

何処の者だ、私を狙うと言う事はレユニオンに敵対する者達、現状で一番近いのはウルサス帝国の部隊だろうか。

極力アーツは使わない、二丁の短機関銃を手に取り索敵する。

発見した、アレは――――まさか。

だからこそ、何故？私、そしてレユニオンはあの企業とは無干渉だったはず、私を狙う理由が見えない……考えるのは後だ、本人達に聞いてみるとする。

森の影と重なるように移動しつつ、一人ずつ手足を打ち抜き抵抗する力を失わせる、これが数百人と数が多かったら逃げの一手だったが、十数人程度なら問題ない。

最後の一人になったところを組み伏して「動けばお前を結晶化する」と脅しをかける、効果は靦面のようでも抵抗をやめてくれた。

最初の奇襲で倒せなかった場合こうなる事は分かっていたとも言え、なら何故追いかけてきた、それだけ私に恨みがあるのか？

恨みは無い、ただ本部はその強大すぎる力を恐れているし、理由は教えて貰わなかったが欲している、だから襲ったのだと語る。

……前々からあそこは黒い噂が絶えなかった、オリジニウムを使った非人道的な実験を私は転生者としての知識で知っている。

ライン生命、私の体が欲しいか、この鉱石病に蝕まれた体が。

「なあ……あんた、サンクタ族なんだろう、じゃあなんで輪っかが無いんだ」

そんな事、私に言われても知らない。それこそ???（二重線が引かれている）

この話もういい、私は拘束を解いて見逃す事にした、甘いなども言われたが私を狙ったこの者達にどうしようと言う気が無いだけだ。

私の中での警戒先がまた一つ増えてしまった、治療と称してその実はオリジニウムを利用し、何らかのモノを作ろうとしているように思う。

それを私は容認するつもりはない。

帰って対策を練らねばな。

▽月×日

タルラに押し倒された。

事の発端を一から話そう。

レユニオン・ムーブメントはタルラの政策活動、それから私の食事改革で「感染者の行き場がなくなったらレユニオンに行けば良い」とまで言われる事になった。

全てを受け入れたいが、すべてを受け入れるだけの受け皿は用意出来ていない、領地を開拓し都市を作ろうかともタルラと意見交換したが、最大の脅威である天災が降りかかってしまったら全てが終わる。新たに移動都市を持つ必要がある、これに関しては、長い計画になってしまいうだろう、ただ成功すれば更に同胞たちを迎えられる。

企業、国家との外交面は相変わらずだ、幾らタルラが『テラの英雄』だからといって、そもそも感染者であるというただ一点で進展しない。

ロドス・アイランドはどうだ？と言ってみた、私達と同じ思想、協力出来るんじゃないかと言ってみる。

「得体の知れない製薬会社に、同胞を送れと？」と鼻で笑われてしまったが私は冗談で言った訳じゃない、そう言うのと沈黙した後、「他は」と促した。

ライン生命はこの前の事から目指している目的は相容れないものだとわかる、国家で言うならシエスタなどは良いんじゃないかと思っただが……感染者集団と手を組んだと揶揄され、苦境に立たされるリスクを抱えるとは思えなかった。

「自分が考えている以上に、感染者を受け入れる者は居ない事実を君は再認識するべきだ」と、タルラは言う。

その言葉に私は「それでも今のレユニオンがそのまま成長していけば必ず未来はある」と返した。

こうなった私達はイタチごっこだ、ああいえばこう言うし、お互い譲らないし、どちらも譲れない。

言い合いを続けていくうちに私もタルラもヒートアップして、互いに止められない所まで言い合ってしまった、最近では珍しい事だった。

言い合い、押し問答を繰り返して、遂にタルラが立ち上がり「何故分かってくれない？」と言いながら、ゆらゆらと近付いてくる。

私は逃げなかった、何をされたって私の決意は、意思は固いぞ。
そのままタルラは倒れ込むように、私を押し倒した、その行動に痛みは無かった。

「私が、何より君が生きている時間で、その願いは本当に叶うのか？ 友達感染者の限られた時間で、理想に手が届くと本当に思うのか？ 君が死んでしまった後の話をしているんじゃない、私は今を話している、今のこの現状を見て言っているんだ」

タルラの綺麗な銀色の髪が私の頬にかかる、銀色の中に燃える黄金色の様な瞳に目が合う、私は場違いに美しいと感じてしまった。

互いに無言になる、タルラが目を逸らすまで私も目を逸らせない。タルラと言いつい合うのももう何度目だが、こんな事は初めてだ、少しドキドキしてきた。

そんな私達の均衡を崩したのはシャッター音だった。

音のした方へ向いてみると、ニヤニヤと今まで見た中で一番なんじゃないかといった顔で、カメラを持ったWが立っていた。

「お楽しみに」とフェードアウトしていくWに数秒固まって、私とタルラは互いに同じ事を思ったのだろう、互いに顔を見合わせて頷いた。

全力を以ってWを探し捕まえなければならぬ。

生きている内に叶わない願い、か。

それはやってみないとわからないよ、タルラ。

それに?????
(不自然に消された跡がある)

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

p. m 7 : 20 曇り??????

泥棒猫、信頼度MAX会話。

自由を求めて飛び出した、そのままヴィクトリアから逃げ出すだけだという所で力尽きて倒れた所を私とそう変わらない印象を受ける少女に助けももらった。

黒い、所々が灰色な髪。背丈は高くも低くもなく、特別目立った格好ではないまでも白が目立つ服装で、何より決意に満ちた黄昏色の瞳が印象的だった。

不思議な少女だった、あの時は聞けなかったが、なんで私の名前を知っていたのか、不思議だ。

脱獄者である私をなんで助けたのか聞くと、「君が倒れていたから以上の理由なんてない」ときっぱりと言われ、少しなんとなく怖くなって、それ以上に嬉しくもあった。

ここまで来ればといった所で、これからどうするんだと聞かれて、私は何か考えるより前に「付いていっちゃダメなの？」と問い掛けた。

驚いた、私が人に付いていきたくないなんて思う日が来るとは思わなかった。

その少女は少し迷って、こう言った。

「私に付いていく事はヘイズ、君にとって必ずしも良い結果であるとは限らないよ、それでも良いなら私は君の手を取る。それが嫌でも、ヴィクトリアから離れるまでは面倒を見るよ」

そう言われて、あくまでも私の意思を尊重するその在り方に、付いていってみようと決めた。

今でも私の大事な思い出なあ。

6 ページ目

○月×日 曇り

日記で人生の積み重ねを書き記す以外、私に趣味らしい趣味はない。

まあ日記は趣味というより、より精神を安定させる為に必要な事だが。

お酒は定期的に体に入れなければならぬ必需品だしアレは違う、煙草の良さは私にはよくわからなかった、吸っている姿を見るのは好きだが。

本を読むと言っても戦術本や鉱石病のついての事などだし、私はどうやら運動音痴のようでスポーツなどはてんでダメだ、まともに出来るのは的当てぐらいだろう。

あ、いや一つある。

服は好きだ、人に似合った服装を選ぶ時などは心躍る、あれはもう趣味と言つていいだろう。

だが他には無い。

服選びと日記以外に趣味がないなど、寂しい女じゃないか、これでは「レユニオンは堅苦しい所だ」と言われてしまうかもしれない。

それはだめだ、確かにタルラは堅苦しいし、常に表情を変えないし、高圧的だし……まあそういう所もタルラらしいけど、って違う違う、そういう事ではなくて。

ええい、兎に角。

私は趣味を増やしたいのだ、思い立ったら行動あるのみ、こういうのはWに聞くのが早い。多趣味そうだし。

ただそう思っても神出鬼没な彼女はなかなか見つからない、ならへイズに聞いてみる事にしたが「お酒を飲んでだらしくなってるのが趣味じゃないのおく？」と言われた。

解せない。取り敢えずモフった。

にやあにやあ暴れるへイズ、やはり猫は良い。

そうだ、ファウストに聞いてみるのはどうだろう、彼程真剣に考え

て的確なアドバイスをしてくれる人は居ない。

早速聞いてみた、すると暫く悩んで「絵でも描くのはどうだろう」と提案された、ミラーは書く事が好きなようだから、絵もきつと上手く描けるはずとの事だ。

なるほど。

たまたま通りかかった私の部隊の子が期待した眼差しで見ているように、ならば転生者の特権を使おうじゃないか。

私の知識にある数多の物語のキャラクターを思い思いに描いていく。

その、まあなんだ、結論を記す。

私は画伯らしい。

……悪い方で。

○月★日 晴れ

タルラが難しい顔をしていた、最近では見ない顔だ。

気になるので単刀直入に聞いてみた、するとまたいつもの様に黙秘を続ける。

隠し事は良い、それは私がタルラを信用し信頼しているからだ、だけれどもタルラはその顔は見たくない。

そう言うと「相変わらずだな」と言って頭をぽんつとされた。

あ、新しいアップローチだな……照れる。

大した事ではない、ただ強大な敵に立ち向かうには私達レユニオンはどうしたらいいか考えていただけだ、とタルラは言う。

抽象的な表現で、具体的な事を言ってくれなかったが、まあ良いか。すると、私の目を見て続けてタルラは口を開いた。

「分かり合えないモノは居る、君はそのモノ達をどうやって対処する？君の意見が聞きたい」

それは私が知り得る中で初めての出来事だった、あのタルラが他人の、私の意見を聞きたいと言うなんて、今までそんな事は無かった。「頬が緩んでるぞ、どうした」と指摘されて気付いた、私は嬉しくなったのだ、当たり前だ、唯一の親友が困ったから助けてくれと初めて言ってくれたんだぞ？これが嬉しくならないはずがない。

本当の意味で『二人で考えて生きる』事が出来つつある、今日は記念日だな、祝うべき日だ、やっとタルラが素直になってくれた。そう言うのとタルラは私に背を向けたがこれは照れ隠しだ、私には分かる。

未来が見えた。

私とタルラと共になら、どんな困難も解決する、してみせる。そんな未来を。

○月◇日 雷雨

(何故か白紙だ、何かを書こうとして辞めたのだと推察する)

○月☆日 雨

私が感染者になって、このレユニオンのNO2になって、初めて同胞が^{オリバン}鉱石病で息絶えた。

いつかは来ると思っていた、身近な者がそうなる未来が来るんじゃないかと、そうならないように医療分野に投資したり、他企業の成果や研究を独自に調査したりなどはしていた。

レユニオンの医療班は優秀だ、それこそ名のある者達には劣るが、十分以上に頑張ってくれている、ただそれでも遅らせる事が関の山なのだ。

私のよく知る人物だった、まだ若くて、笑顔が似合う、私の部隊の中のマスコットの立ち位置の子だったんだ。

悲しいなんて生易しいものじゃない、家族同然の様にこのレユニオンで出会ってから共に過ごし生きてきた子だったんだ。

こんな呆気なく死んでいくなんて。

同胞の一人が「楽しかったんすよ、隊長と居るの、だからずっと笑顔だったんだ、隊長は最後まであいつに楽しさを与えてあげたんだ、隊長はあいつの希望だ、俺達の希望だ、だから頼むから、そんな目をしてしないでくれ」と言った。

私は何も言えなかった、私は、私は……そんな立派な人なんかじゃ

ない。

様々な感情が溶け合って消えて、生まれてを繰り返す、やがて最後に残った一つの強い感情は単純だった。

憤怒ただ一つだ。

鉍石病そのものに対しての怒りが私の決意を強くする、こんなモノはさつきと消えるべきだ、居なくなるべきだ、排除すべきだ。

だが私の思いだけで消える病ならとつくに消えている。

私は何をすれば良い？

どうすれば良い……？

乾いた滴が雨と共に流れ落ちた気がした。

◆月◇日 曇り

今日起きた事は私の胸の中に留めておく事にする。

少なくとも今死????、結論を出すのはまだ早い、私は??に??されないぞ、(一部が黒く塗りつぶされている)

◆月●日 曇り時々雪

ぼったり、本当に偶然だが、旅医者であり感染者援助団体の一人、サルカズの医師で、アーツと医学の分野において深い学識を有する者と出会った。

ここまで言えばわかるだろう、シャイニングだ。

シャイニングに医療者だけでは無く、剣聖としての一面がある事は転生者としての知識として知ってはいたが、まさかあれ程とは。

とんでもない強さだ、一閃で何体ものオリジムシを斬り裂く一撃は私では避ける事が精一杯だろう、そんな未来が無い事を祈る。

シャイニングは私の事を知っていた様で、「ナイチンゲールが会いたがっていますよ」と言った、シャイニング自身それを構わないと歓迎してくれた。

だが私のこの体を蝕む鉍石病がそれを許してくれない。

未だに制御の利かない私の体の中に眠る感染源は危険過ぎる。

今でこそ記憶が飛ぶ事や急に倒れる事は少なくなったが、いつその

日が来るかもわからない。

タルラやレユニオンの面々は私が疫病を振り撒く体である事を知って、その上でそれでも良いと受け容れてくれている、長年共に生きてきたからこそ、私が『暴走』した時の対処法も理解している。

ナイチンゲール一人では私の『暴走』は押さえつけられない、そう言う事だから、私の事はあの日を境に忘れてほしいと伝えてくれとシャイニングに伝えた。

「なら私が貴女の言う『暴走』を止めましょう」とさも当然の様に語った。

「それに一度貴女の鉱石病についても研究させて下さい、今は治すことが出来なくても、ある程度抑制する事は出来るはずですよ」とも。

嬉しかった。

だがシャイニング、君は非感染者だろう。私に近付く事は鉱石病を患うリスクを抱えている事に他ならない、本当ならこうして会話する事だって危険な事なんだ。

「この世から鉱石病を消せば、鉱石病を治す手筈が出来たら私自身が鉱石病になる事など、些細な事です」

そう瞬時に、さも当然の様に語るシャイニングは、その名通りの光そのものだ。

強い光じゃ無い、優しい光だ。当てられて焼かれる事もなく、静かに温めてくれる、彼女は『良い人』だった。

私は私の知る鉱石病の知識をシャイニングに共有する事にした、目の前の女性を信じる事にしたのだ。

シャイニングは感謝を告げたがその必要はない、私の心がその光に当てられたからこそその結果だ。

次会う時は私の親友も呼びたい、少し気難しいが、私の紹介なら疑う事はしないはず。

私とタルラ、ナイチンゲールとシャイニング、今度は四人で会おう、その事を約束して彼女とは別れた。

「また会う日まで」

互いに生きている事を約束した。

◆月□日 曇天

レユニオン・ムーブメントとしての外交は基本タルラに任せている。

と言っても鉱石病感染者に外交する企業や国家は少ない、あるだけでもまだ良い方だ、『世界の英雄』としての功績はやはり大きかった。私自身は個人的に取引する事はあれど、レユニオンとしての導きは基本タルラか、別の幹部かに任せられる事以外はしない。

だから私がレユニオン・ムーブメントのNo.2として表立って動く事は極めて稀であり、今日はその極めて稀なケースだった。

移動都市を譲るし軍事資金も援助するからこの国家を潰してくれ、内容は大体こんな感じだ。

まずメリットとして、移動都市の確保。

移動都市を入手出来ると言う事は即ちより多くの感染者を受け入れられる事になるという事であり、虐げられた者達に居場所を与えられる。

勿論それだけがメリットではないが、これが一番大きい。

デメリットはその企業を潰す為に戦争を起こすという事で、死者が出る、重傷者が出る、「レユニオンはやはり危険な連中の集まりだ」と言う事が周囲に広がる、さらに感染者と非感染者の間に亀裂が走る。

はつきり言って受ける義理もない、交渉は決裂。

何より、レユニオン・ムーブメントを良い様に利用する、その事が気に入らない。

そもそも、どんな理由であれ断るつもりだった。

ウルサス帝国の申し入れをレユニオンが受ける筈がないだろう。

そう言うウルサスからの使者は含み笑いで「後悔するぞ」と告げる。

ウルサス帝国がお前達レユニオンを滅ぼすのは簡単な事だと、暴力の全てを持ってして潰すと、そう脅しにかかる。

ふざけた妄言を言い放つ奴らだ。

まずレユニオンに戦争を私は決してさせない。それが如何に愚かな行動であるか私は知っている。

ウルサス帝国が行う感染者に対する悪行、暴力は必ず正さねばならない、話し合いで通用しないなら戦争は免れない事だとしても、レユニオン側から戦争を始めてしまったら、その時点でレユニオンは『悪』になってしまう。

だがウルサス帝国が仕掛けるのなら、私は命を懸けてレユニオンを守り、ウルサス帝国を滅ぼす。

私を侮るな、私は世界に通用する力そのものだ。

そんな力は貴様には無いと言われたが、それはどうかな。

ウルサス帝国の使者は舌打ちを一つし、「まあいい、分かっていた事だ」と開き直る、さあ帰ってもらおうか。

使者を見送り、安堵する。

決して強がりでは無いが、極力争いは避けたいのだ、ウルサス帝国の市民全てがソレの思想に染まってるわけじゃない、戦争は罪のない者まで手をかける事になる、それはしたくない。

ただ、少し不気味になった。

何故このタイミングでレユニオンに外交を仕掛けたのか。

タルラ、今君は何処にいる？

◆月△日 雪

パトリオットと話し合った。

件のウルサス帝国の一件、またパトリオットが独自に仕入れてきた情報、その事からレユニオンは今、分岐点に立たされているとパトリオットが判断する。

「君はどうする、何をしたい」と言われた、私は昔も今も変わらない、感染者の権利回復運動、いずれは鉱石病を無くす事だ。

では帝国と事を交える事は無いと？と威圧的な空気を纏い、厳しい目で私を見てくるが、必要ならやると言うと言と厳しい目はそのまま、威圧的な空気は霧散した。

パトリオットは「やるべき事をやる」とだけ告げると、暫く此処には帰ってこない事を私に言った。

行く前にフロストノヴァに挨拶してはどうだと言うと「必要ないだろう」と言った、それが信頼関係で成り立っているものだと分かったので、私はそれ以上何も言わなかった。

寂しくなるな。

ふと、パトリオットは振り返り私を見る。

私は無言で返す。

そのやり取りに思慮深い彼は何も言わなかった、ただ一言「達者だな」とだけ言う。

また生きて会おう、ボジヨカステイさん。

彼の姿が見えなくなるまで私は同じ方向を見続けていた。

?月あ日 ?

(乱雑に書かれてる、読み解くことができない)

ル月?日 ?

(乱雑に書かれてる、読み解くことができない)

?月?日 異

(乱雑に書かれてる、読み解くことができない)

?月?日 ?

??????、
?????????)

◆月☆日 晴れ

Wが私に合う服を買ってきてくれたみたいだ、素直に嬉しい。

後で着るよと言うと「私が着せてあげようか?」とニヤついた顔で言うのでとりあえず叩はたいた。

Wの良く知る飲食店があるらしい、贈り物も渡したし、それじゃあ飲みに行こうとの事、まあ行かない理由もないのでついていく。

珍しくWが先導する、それにしてもどんだん人目につかない所に行っているが、隠れた名店とかだろうか。

誰もいない路地裏に着いたところで、Wが足を止める。

振り返ったWの顔は真剣だ、初めてだった、Wのそんな表情を見るのは。

「貴女は私に何の警戒も抱かないのね」と言われたので、仲間を警戒する理由が無い、Wを信頼しているのだから当たり前だと返す。

彼女は珍しく少女らしく笑顔になった、ジリジリと近づいて、私は壁に追い込まれた。

「あいつも、フロストノヴァアイツもない、私が貴女にする事を止める邪魔者奴らは誰も居ない」

赤色の瞳と目が合う、私は彼女の表情から何を考えているのか分からなかった、心地良いものではない、でも悪いものでもない、そんな感情が伝わってきた。

W、近いよ……。

いつまでそうしていただろうか、ほんの一瞬かそれとも数分か、名残惜しそうにWは距離を取って『いつもの』表情を作る。

その後はWと飲んで、楽しく終わった。途中からスカルシユレットとその部下達が飲みに加わって暫くしたらWはいつの間にか帰ってしまったようだ。

「ミラーは酔うと面倒くさいからな！ガツハツハ！」と笑われた、失礼なやつだな、その同胞は酒で沈む前に私が沈めてあげた。

Wは何を考えていたんだろう？

この日はいつも以上にわからなかった。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

a. m 10:10 雪

??????

愛国者の独白

彼女を初めて知った時から私は何かを感じ、期待した。

まるで決まった事だと言うように数年もすれば彼女はレユニオン・ムーブメントのNo.2になっていた、彼女の在り方は確かに指導者ではない、だが彼女程良識を持ち常識で語り理想を求める者は居なかった。

レユニオン・ムーブメントの中でのみならず分け隔てなく人と接する彼女はある意味では最も感染者らしくなく、先民のどの種族にも当て嵌まらない外見も相まって、まるで別の世界から来たみたいだと思つた事もある。

平和を求むその志は私の好むものだったが、優しさだけでこの先を進む事は出来ない、彼女に「何をしたいか」を問い掛けた事がある。

何故レユニオンにいるのか、何を為したいのか。

彼女の本質を見極めようとした。

「感染者に一人の『人』としての真つ当な権利の取得、その為にも鉱石病を無くす必要があるし……ああでも、まあ、その……言いくいけど」

「親友を一人にしたくは、無い」

おかしいだろうか？と言う彼女に私は一つの結論を出し、納得した。

目の前の少女の在り方は青臭い物だがそれが若さだ、その若さは嫌いではない。

やがて月日は流れ、もう一度彼女と対面する機会が訪れた、ウルサス帝国に最も関わりのある私に相談するのは間違っていない。

私の調べた事象と示し合わせて、奴ら帝国が何を狙っているのか理解した、それが今後の選択次第でレユニオンの在り方がどうなるのかも察した。

分岐点に立たされているのだろうか、だが今も昔も変わらぬまま成長を続けている彼女が選択を間違えるとは思えない、正しく、自らの信じる秩序を曲げず、決意に満ちた目は今も変わらない。

心配は要らないだろう、ならば私は自らのやる事を優先するのみ。

懸念があるとすればタルラの事だが、私が考えてもどうにもならな

い事だ。

後ろを振り返り、無言で見送る彼女に私も無言で返した。

それが何を意味するのか、この身が身をもって理解している。

ふと、彼女と飲み交わした事は無かったなと思う。

フロストノヴァが彼女と飲んでいる光景を一度見たが、まるで年頃の少女のようだった、平和ボケをしているわけでもない、現実を理解して尚、楽しむ事を忘れていない。

私の拾った少女が良い友人を持てた事は幸運だった。

私では与えられないものをミラーは与えられるのだ。

私を呼ぶ声がする、準備が出来たようだ、愛国者として成すべき事を成す。
パトリオット

私はウルサス北部にてその一步を踏み出した。

7 ページ目

□月□日 晴れ

やったぞ、私はやったんだ……！

私は遂にやった、レユニオンに『米』を輸入する事に成功した。

遂に東国食の文化を自ら学び、信頼を勝ち取り、『米職人』に認められ……やっと、輸入する事に成功したのだ。

実にここまで長かったが、それに見合う成果を得られたと自負している、ここ数ヶ月の未来が見えるぞ。

レユニオンの同胞が数ヶ月『米』の魅力に取り憑かれ、三食全てが米になる未来が。

米は美味しい、何にでも合う……いや流石に、ケーキやパンなどには合ったもんじゃないが。

しかし、東国は食文化が遥かに進んでいて非常に面白い国だった、もちろん密入国だが。

けれども米職人……いや師匠には私が感染者である事は直ぐ様見抜かれ、だが私が『米』に対して真剣なのを察し、私を『米職人』の後継者として育ててくれた。

師匠、私は米文化をレユニオンで成功させ、他国、企業にも繁栄させる事を約束します――

ふふ、最高の気分だ。

やはり美味しいご飯を食べる幸せは何物にも変えがたい幸福だ。

□月○日 晴れ

どうやら聞いた話によるとアビサルには『刺身』と言う文化があるらしい、曰く海に生息する生物を、生で食す文化らしい。

生で食べるなど、怖い文化だ……残酷だ。

しかし味はとも良いらしく、鮮度が良いと天に登る程だと。

アビサル、何れ行こう。

□月×日 雨

二度目の暗殺を受けた。

私が一人になる所を狙った計画的犯行、姿格好もまばらな事から金で集められた殺し屋だろう、恐らくライン生命からの依頼だろうが、粗末なモノだった、アーツを使うどころか本気を出すまでもなかった。

それが狙いだっただろう、不意に現れた殺意を背後に感じ間一髪で致命の一撃を避ける、そうして振り向けば、もうそこに人がいた形跡さえ掴めなかった。

次に感じた殺気に今度は躲しきれず左腕が掠れた、掠れただけだと言うのにその衝撃は私に浅くないダメージを与えた。

次は直撃する。

そう確信のような第六感が働き、私は封印していたアーツを解放する、私を中心にして一瞬で周りに結晶を作り出す。

私のアーツに予備動作は必要としない、随分前から視界外に結晶を作る事も容易になった、だというのにその暗殺者は結晶の中に閉じ込められる事もなく、軽傷程度で済んでいた。

その暗殺者には見覚えがあった、この戦闘能力、まるでステルスのような認識の「ズレ」を起こす能力。

私の転生者としての知識を総動員させ、特定した。

ああ確かこの少女は、ロドス・アイランド着任以前、指定対象の排除に従事していたことから、前職は殺し屋だったと推測されていたな。

潜伏や侵入、敵陣営への奇襲を得意とする人物、マンティコア。

まさかこの少女が殺し屋として私の前に立ちはだかるとは、どうしたものか……この実力、無力化するのには容易では無い。

私アーツを使うか、彼女が気配を遮断するのが先か？

睨み合い、均衡した所で先に動いたのは私だ。

二丁のサブマシンガンをフルオートで放つ、直ぐ様その位置から消えるマンティコアだが、気配を消してもそこにいない訳では無い、私の周りに具現化している結晶は鏡のようにそこに居る人物を写す。

環境を作り出した私の勝ちだ、何れロドスのオペレーターになり、活躍するだろう、だが無傷で無力化出来る相手ではない、両足を撃ち

抜きその機動力を潰す。

苦悶の表情を浮かべた彼女に心が痛むが、手を抜いて私が殺されるなど目も当てられない、申し訳ないがここで寝ていて貰う。

結晶を霧散させ、マンティコアに近付く、何処か怯えた様な表情を浮かべる彼女には私がどう写っているだろうか？

「殺しはしないよ」と言ったが更に怯えてしまった、あわよくばレユニオンで保護しようと思ったがそれは難しそうだ、素早く彼女を気絶させる。

このまま放置するのは少し危険だと感じ、彼女をおぶって危険とは無縁の所に寝かせる事にした。

しかし、とんでもない暗殺技術、殺し屋としての腕前だった、もし最初の一撃をまともに受けていたらそこで私の生命活動は終了していたかもしれない。

今後もこれ程の実力者に狙われる事があると仮定して慎重に行動した方がいいだろう、まだ死ぬ訳にはいかない、為さなければならぬ事を終わらせる、その時まで私は歩みを止めるつもりは無い。

レユニオンで私の護衛が出来る人物、か。
どうしたものか。

□月☆日 曇り

昨日は騒がしく賑やかな夜を過ごした。

クリスタルレンズの皆と食事をしていた所、フロストノヴァとスノーデビル小隊の隊員達がレユニオンに帰ってきたようで、自然と大宴会になった。

クリスタルレンズの彼、彼女達は私と同じ隊員以外にあまり関わりを持たない、これを機に絆の繋がりを増やしてくれると私は嬉しい。

まあ、スノーデビル小隊の隊員達は皆良い子達なのでそれ程心配していなかったりするが、最終的には仲良く肩を組み交わして酒を飲んでいたので、私は嬉しくなった。

その光景を酒のつまみにしながら飲んでいたら酔ってきた、「ミラー姉さんが酔う前に二軒目いこうぜ！」とか言っているスノーデビ

ルの隊員には後でお仕置きをするでしょう。

フロストノヴァもいつもよりペースが早い、どこと無く彼女に熱を感じた。

気付けばクリスタルレンズ&スノーデビル連合達は二軒目に向かい、フロストノヴァが私の相手をしてくれるようだ。

「一人で飲むのは……あの日以来か？」と言われたのでどの日だろうと考えてみる、たぶん日記にも書いた私の自宅で飲んだ時だろうか？
と言うと、そうだと言うのでそれがどうかしたかと聞いてみる、特に深い理由で呟いた訳では無いようで、そうかと返し酒を飲む。

……ん？これは酒では無い、お水だ。

「それ以上は体にも悪い」というがそれは本心では無いだろう、まさかフロストノヴァにも酔っ払った私は面倒くさいと思われていたのか？

ショックだ、かなしい。

「面倒では無いが……ああいや、やっぱり面倒くさいな」

うう、そうなのか、そこまで言われる程酒癖が悪いのか私は、自覚している以上に厄介なタチらしい。

(段々と文字が砕けている、どうやら酔いが回ったようだ)

□月★日 たぶんくもり。

あたまいたい。

ふつかよい、ねる。

あれ？フロストノヴァいる、なんで？

ねてていい？じゃあねる。

□月▲日 晴れ

恥ずかしい、フロストノヴァには悪い事をした、反省はしているがフロストノヴァに介抱されるのはこれが初めてでは無い。

きつとまたやると言う「素直なのは良い事だ、ミラーの世話をするの悪くない」と言われたので、素直に甘える事にしよう、うん。

フロストノヴァは次の任務が下されるまでレユニオンに滞在して

いるらしい、休暇とも言うべきだろう、存分に堪能して欲しい。

良い機会だ、改めて今現状のレユニオン・ムーブメントの幹部達の動きをまとめてみよう。

パトリオットは「やるべき事」をすると告げ、Wはあの日からあまり連絡が取れなくなり、フロストノヴァはレユニオンに滞在。

メフィストとファウストはタルラに色々任されているようで、その内容は私には知らされていない、少し不満に思うが私が知らなくても良い事なのだろう、そう思う事にする。

スカルシユレッダーはパトリオットと行動する事が多かったが、今はパトリオットが居ないので私が依頼を回している、というか『米』の輸入を一任している。

その事に対して文句を言われたので米の味を覚えさせた、するとスカルシユレッダーとその部下達は意欲的に仕事をするようになった。

ふふん、米の魅力に取り憑かれたな。

クラウンスレイヤーは基本単独行動、タルラからの直接的な指示が主だが、私もたまに頼む事がある。今はレユニオンに居ないが、何処にいるだろうか。

では私かというとタルラがレユニオンに戻るまでの代行役、時に一人で実地調査や他国、他企業との外交などが主だ。

幹部ではないが、ヘイズは私の家の管理を主にしてくれている、つまりは自宅警備員、ニート猫。

……甘やかし過ぎたな。

ヘイズをいつまでもそうしているのは中々勿体無いので、私の護衛役にしようと思う。

気怠そうに「いいよお」と言っただけの中に埋もれるヘイズ。

こ、こやつめ……

□月◇日 曇り

朝起きて鏡を見ると、左の目の色が変わっていた。

元々黄昏色の目をしていた私だが、今では黒い……まるでオリジンウムの様な色になっている。

鉱石病が進行したのだろう、腕や脚などの見える場所に影響して
なくて良かった、色が変わったからと言って視界が変わっている訳
じゃない。

私は大丈夫だ。

□月◆日 豪雨

遂にこの日が来た。

ロドスの最高幹部の一人であり、医療部門の総責任者。アーミヤの
主治医であり、指導者。

ケルシーだ、私が最も会いたかった人物の一人に出会えた。

護衛のレッドはもう居るのか、クラウンスレイヤーに近接戦で圧倒
できる実力、まず勝ち目は無いが私は戦うつもりは無い。

「レユニオン・ムーブメントのNo2がどうして此処にいる？」とケル
シーは言うが、本当に偶然だ。

最近は妙に調子が良い、豪雨であっても私のパフォーマンスは充分に
動ける状態だ、なのでこの地に現れたと説明するが、ケルシーは更に
怪訝そうに私を見つめる。

依然として警戒は解かれず、私との距離は一定を保っている、何故
そんなにも警戒する？ 私たちレユニオンとロドスの行動概念は概ね
一緒の筈だ。

「それだ」

「我々は、いやロドスは表向きには製薬会社だ、確かに裏では感染者を
保護している、鉱石病の研究もしている、今ではその裏を知る者も多
くなった」

「時に、ドクターが珍しく妙に饒舌に語った時がある、その時ロドス・
アイランドは無名であり、実績の一つも公表したことすら無い」

「ミラー……何故その無名のロドスをさも『前々から知っている』よ
うに話していた？ 英雄の片割れ、『結晶世界』と評されるレユニオン・
ムーブメントのNo2」

お前は何者だ？

敵意、背後の左側から来る狼の影を紙一重で回避する、待つてくれと静止する間もなく目の前に急接近してくる蹴りに両腕で防ぎ、衝動から私の体は簡単に吹っ飛んだ。

まずい、私の転生者としての知識が仇になった、こうなるなんて思ってもいなかった。殺すような一撃ではなかったので、恐らく拘束し、目的や正体を探るつもりなのだろう、ここは……敢えて捕まるか？

思考がブレたその瞬間、私は深淵の???を見た。

なんだこれは、いや確かこれは『Monster』……この謎の生物から明確な殺意を感じ取った。

私を殺す気か？ケルシー。そこまで私が信頼出来ないか、信用できないか？

私も同じだよ。

アーツを使う、瞬間『Mon3tr』は一瞬で結晶の作品の一つに変わる、続け様に私は目を見開いているケルシーに加速した。

今までで出した事のない速度に今度は私が驚いた、こんな力今までなかった、まさか身体能力も上がったのか？

いや、今自分の体を考察している場合じゃない、レッドが間に入ろうとする前に私とケルシー以外の全方向に壁を生成し、かまぐらの形のように結晶を形成する。

これで私と彼女以外この空間には存在しないし、存在させない。

「私をどうするつもりだ？」と聞いてくるケルシーにどうもしないと返す。

私は殺し合いをしたい訳じゃない、ケルシー、あなたと話したかっただけなんだ、今回は本当に偶々、運が巡り合っただけだ。

暫く見つめあい静寂した空間は、ケルシーの言葉でその静寂が破れられた。

「気付いているか？その背中にあるソレを」

……ああ。

この羽の様なものはやはり私の幻ではなかったのか、頭の輪っかも

相まってまるで天使か……それとも悪魔か。

自分の体に起きている変化にケルシーは何か知っているのかと聞いてみる、自分の体について何も知らないのか？と逆に問われて、私は何も知らない事を話すとケルシーは片目を閉じて、言葉を放つ。

容姿の変貌、それがアーツによるものならそれは鉱石病の影響だ、だが私のソレは”人工的にオリジニウムを投与した研究の一つ”だとケルシーは語る、思い当たるプロジェクトがあるとケルシーは語って、私は不思議とソレを受け入れられた。

鉱石病になる前の記憶の殆どが欠落している、そのプロジェクトは実験体の死亡で失敗したと聞いているとケルシーは言うが、きつとそこで私の精神は一度死んだのだろう。

体の防衛本能によるものなのか、それとも奇跡でも起きたのか、私は奥底に眠る”ナニカ”を引っ張って『ソレ』を体に定着させた。

それが転生者の私であり、本来この世界に存在すら許されない人物なのだと、推察する。

私は転生者である事を、自分自身を話した、到底眉唾だとケルシーは言うが、私に取ってはこれが真実だ。

「……その目に嘘が無いのは分かった、だが信用も信頼もしない」
それで良いよ。

でも私達の目的は同じのはずだ、合致してる筈だ、それはケルシーもわかってるだろう？

そう言うとケルシーは深く溜息を付き、どの道負けた身だと言うと何が目的だと私の意図を伺う。

私は彼女の目を見て、しっかりと言葉を告げた。

——レユニオンと同盟を結ばないか？

ケルシーは僅かに驚いた様子で、直ぐに無表情で考える様に視線を下げる。

いつまでそうしていただろうか、ケルシーは私の顔を見て、次に手を出した。私に握手を求めてきたのだ、これがどういう事を意味するのかわからない私では無い。

「私はお前を信用しない、だがお前の考えには賛同しよう」

そう言われたので、私は笑って同じことを言った。

するとケルシーは皮肉げに笑う、やっど……この未来に辿り着いた。あとはタルラが帰ってきた時に改めて話さなければ、ケルシーも同じ様で他のロドスのメンバー達、特にドクターとアーミヤに話さなければと言う。

結晶を全て霧散させる、するとレッドが直ぐ様敵意を見せたが、私とケルシーが握手をしているのを見て呆気に取りられていた。

それを少し面白く感じて、瞬時に急激に来る痛み思わず意識を失いかけるが、ここで倒れる訳にもいかない。なんとか意識を保つ。

ケルシーは冷静に私の体を観察して、羽の生えていた両肩に鉱石結晶が表面化している事を告げた、その目は何処か……私を信用しないと云った割には、心配している様に見えた。

大丈夫だ、痛むだけでそれ以外の事はない、何より両足が動き、両腕が動く、五体が動くならさしたる問題はない、レユニオンのメンバー達には見せられないが……そうだな、次からローブを纏うことにしよう。

また会おうケルシー先生、次はもつとちゃんとした所で、さして。

へイズめ、何処に行つたんだ？

◆月☆日 雨

タルラが帰ってきた。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

a.m. 0:50 曇り レユニオン・ムーブメント

彼ら、或いは彼女らの日常

互いの隊長を置いて、私達クリスタルレンズとフロストノヴァさんの小隊、スノーデビルの方々の殆どは二次会に来ていた。

私はあまり人と話するのは苦手だけど、彼らと話すのは確かに楽しい、人見知りな私でも二次会に行く事に拒否感は無かった。

「ア〜！酒がウメエ〜！これもこの米って奴が美味いからっすねえ

！」

「そう言う彼に同意する、この米は美味しい。聞いた話によるとスカルシュレットダーさんの所の部隊の人達はこの米の魔性に取り憑かれてしまったとか。」

「それもこれも隊長がやった事だが。本当に恐ろしい人だ、何処からその食に対する熱意が出てくるのだろうか。」

「うーん……二人置いてきて良かったのかな」

「じゃあお前がミラー隊長の相手するか？」

「無理っす！無理っす！」

「ガハハ！」と笑う彼らに私もくすつとする、確かに面倒臭いよね、男性には次々と酒を進めて潰れさせるし、女性には抱きついたりなにかと触れ合いに行くし……最初は驚いたけど、今ではレユニオンの一つの日常になるぐらいには見慣れた光景だ。

「最近タルラさんが居ないから、気絶させる人も居ないし、あれ……フロストノヴァさん大丈夫かな。あの人が結構受けのタイプだね、家に連れ込まれるんじゃないかな、私も一回されたし。」

「どんちゃん騒ぎをする彼らを少し離れた所で飲んでいると、隣に誰か座った。スノーデビル小隊の方だ。」

「……ナンパ？」

「ち、違う違う！少し疲れたし、ゆっくり飲める所に来ただけだ！」

「成る程、確かに楽しいけどずっとあんな調子だから疲れるのも分かる、気付けば飲み比べ大会とか言ってるし、お金はみんな十分あるからって羽目外し過ぎだよ。」

「でも、まあいつか。この日常を私は気に入っている。」

「最初に隊長に付いて共に過ごした時から、この日まで私は感染者でありながら、こんなにも幸せを与えてもらった。」

「癒えない傷を隊長は癒す、凄い人だ。」

「君の話が聞きたい、ミラーとはどんな馴れ初めだったんだ？」

「馴れ初めか……最初は同期なんだって感情しかなかった、あの時の私は感情が凍り付いていて、人を信じなかったから。」

ある時に、確か部隊から逸れて、ウルサス帝国の部隊に襲われてる時だったかな、躓いて、武器も壊れた私に待っているのは死だけ。

死にたくなかった、当たり前でしょ？誰だってそうだ、何もしてないのに、感染者だけって迫害されて、そんな日々を変えようとレユニオンに来たのに。

目を閉じた、でもいつまでも痛みがこないのに疑問を感じて、目を開けると結晶の世界が広がっていた。

そこにいた全てを結晶にした隊長は、私の方に振り返って目線を合わせて一言だけ告げた。

「もう大丈夫、私が守る」

そう言っただけ抱きしめてくれた時に、私は初めて感情を剥き出しにして泣いた、ただ強く抱き締めるだけだったけど、私にはそれだけでよかった、余計な言葉なんか要らなかった。

それからずっとこの人について行こうって決めたんだ。

「なるほどな……君達も俺達も互いの隊長の為に命を張れる、似た者同士だな」

確かにそう言う所はスノーデビル小隊と似てる、だから気が合うのかな？どうだろう。

あなたはどうかなの？フロストノヴァさんとはどんな？

「俺か？俺はだな——」

「あっおい！あいつ可愛い子にナンパしてやがる！」

「は?!いや違う！お前ツ！」

「酷いっすよ！僕の事は遊びだったんすね?!」

「は?!おい待て、あーくそ！ごめん後でまた話そう！あいつぶっ飛ばしに行く！」

私はおかしくなって笑った。

この日常をくれた隊長に恩返しが出来る日が来たらいいな。

◆月☆日 雨「レユニオン・ムーブメントにて」

pm. 3:37 雨 レユニオン・ムーブメント

タルラが帰ってきた。

直ぐにでも会いに行こうと私はタルラの元に向かおうとするが、体が言う事を聞かない、激しくのたうつ様な激痛が私の行動を制限する。

ふざけるな、痛みなんて幾らでも受けてやる、いいから私の言う事を聞け。

私は痛みを無視して足を進める、途中ファウストとメフィストに出会ったが、ファウストのくぐもった表情に疑問を持ち引き留めた。

何か起こったのかと聞くがファウストは何も言わない、黙つていてもわからないと言つても口を割る事をしなかったので、これからタルラに会うとだけ言った。

するとファウストは引き留めようと動いたが、直ぐにその行動を辞めた、ファウストは「頼んだぞ」とだけ言つてメフィストを連れて去つて行った。

なんだったんだ?……いや、まあいい、早くタルラに会おう。

いつもの道を歩く、この廊下を曲がってすぐの扉にタルラはいる。ノックをして、扉を開けた。

まるで私が来る事を待っていた様にタルラは椅子に座っていた、意思を持った瞳が私を見つめる。

話をしよう、そう言う私にタルラは頷いた。

色々な話をした、今までの事を互いに言い合い、そして私はある程度話した後に、ロドスの件をタルラに話した。

レユニオンがロドスと手を組めば私達の鉦石病の進行はある程度抑えられる、互いに感染者を受け入れ、鉦石病を克服する未来はすぐそこだ。

「……なるほど」

タルラの顔は何も変わらない、もう少し喜ぶと思つていた。もう向こうのトップとは話を付けてある、後は正式な場所で互いに手を取る

だけだ。

「……そうか」

後はタルラの返答次第だ、まあ確かにタルラにとっては無名の製薬会社かもしれない、でも確かに信用できる企業だ。

「君は、私よりロドスを、その製薬会社を信用するのか？」

そうじゃない、違うんだタルラ、私は「もういい」

タルラが言葉を遮り、変わらぬ表情で言葉を放つ。

「私はチエルノボーグを落とそうと思う」

チエルノボーグを落とす……？

私は、頭痛から視界が移りそうになるのを堪えて、何故？とだけ言った。

「何故？それこそ愚問だ、ウルサス帝国は滅ぼさなければならぬ、見せしめの為にも——なんで震えている？」

私は言ったはずだ、それは何の意味も無い、ただ感染者と非感染者の亀裂を更に広げるだけだ、私達の掲げている理想を実現出来ない、そう言った。

武力で制する事に何の意味がある、確かに意味がある時もある、だが私たちがそれをして、不利になるのは私たちだ、私たちだけじゃない、このテラ中の全ての感染者を更に苦境に立たせるんだぞ。

「……いいや、それは違う、寧ろ彼らは奮い立つ筈だ、私達がやられてきた、虐げられてきた事をそっくりそのまま奴等と同じ事をするだけだ」

「それに非感染者と感染者の亀裂が広がるだけと言うが、以前にも言ったな、分かり合えないモノは居ると、その最もな代表者は奴等だ、君は話し合いで解決出来ないなら、最後は武力で解決するしかないと言ったな？それは今この時だ」

違う、確かに私はそう言った、だが分かり合えない事はない、時間はかかるが話し合いで解決出来る問題なんだ、行動で示し、鉱石病を治す事が出来れば互いに尊重しあえる未来が来る筈なんだ。

「……その時君はいるのか？」

いるよ、だから早まらないでくれ、タルラ。

「それは嘘だな、優しい嘘だ、残酷な嘘だ、最も聞きたくない嘘だ」
「君が長くないのを知っている、そのマントは結晶鉱石を隠すための羽衣だろう？今までマントなんて着なかったからな？君の左目の変色も鉱石病の影響か？……君を治す手筈は大方整ってきた、私に任せ
てくれ」

やっぱりタルラには隠せなかったか、微細な変化でもすぐ気付く。
私を治す手筈が整った……？まさか、それはつまり鉱石病を治すという事に他ならない、そんな都合の良い、いや違う、それは後で良い。
とにかく考え直してくれタルラ、戦争はつまり……今のレユニオン
を変えることに他ならないんだぞ、この日常を壊してしまう。

今彼らが笑えているのは、私達があくまでも平和的に交渉を続けてきたからこそなんだ、それはタルラだって分かっているだろう。

そういうと、タルラは押し黙る、思い当たる例があったからだろう、
こういう時タルラは言葉を閉じて考える癖がある、私は畳み掛ける様に考えを変える様に言った。

それに私の体だってロドスが何とかしてくれる筈だ、私自身も鉱石病を治す為に行動するし、している。

だからやめよう、武力で制するのは今じゃない。

「……思えばいつも私と君は衝突しあっていたな、互いに意見をぶつけ、その度にお互いの距離が離れていつている様に思えた、一時はそんな事は無いと思っただが、ああやはり……離れてたんだな、私と君は」
何を言っているんだ、そんな筈無いだろう？

「じゃあ君は何故私よりそのロドスを選ぶ？」

それは――

「私のやり方が気に入らないか？君は調停、平和を良しとするからか？それで君が減んでしまったら？君は心配するなどだけ言うが、私より深刻な君を見て心配にならない親友が居る筈が無い」

「私では君を治せないと思っっているんだろ？どうなんだ？ミラー」

その質問はダメだ。

だって私には答えられない、信頼信用していいしていないわけじゃない、そんな筈が無い。

でも私は、転生者の知識でタルラを知ってしまったている、だからこそ仮に私を治す事が出来ると言われても、その道に必要な無い犠牲が起きてしまうのでは無いかと、そう怖じけている。

怖じけている———そうか、私はタルラが変わってしまうのが怖いんだ、暴君になってしまう事を恐れている、指導者から制圧者にならわってしまう事を恐れていたのか。

現に今、タルラは必要のない犠牲を、必要だと言い実行しようとしている。

「意地悪な問い掛けだったな、謝る……ただ、君が私を信用しているなら、信頼しているなら、私の言葉を信じてくれないか？」

誠実で、どこか必死な言葉だった、気付けばタルラ椅子から立ち上がって、同じ目線でそう問い掛ける。

今までと変わらない表情だった、でも私にはそれが拒絶されたく無いと、そう言われている様に感じた。

……とりあえず、チエルノボーグを落とす事はダメだと告げると、タルラは「君の体を治す為に必要な事だ」と良い、私の言葉を跳ね除ける。

ああ、どうすれば良い？

私はタルラを信じたい、でもそれは開戦の始まりだ、やがてロドスとも敵対し、レユニオンは二度と今のレユニオンには戻って来れなくなる。

それだけじゃ無い、きつと多くの無関係な犠牲者が生まれる、私の知識にある様に……守りたい者達が生まれる。

死んでしまったら終わりなんだ、殺し合って得るモノなんて何も無いんだよ、ただ悲しみと憎しみしか生まれれないんだ。

それは、ダメだ。それだけはさせたく無い。

……タルラを信用している、信頼している。その事は変わらない、この目で見て経験した上で彼女は正しい指導者である事を知っている。

私は――

タルラ、私は君を信用している、信頼している。

「なら」

でも、ダメだ。ダメなんだよタルラ、私は他のレユニオン・ムーブメントの者達を死なせたたく無い、戦争とはつまり、誰かの犠牲を生むモノだ。

私は誰だつて死なせたくないんだよ。

「……そうか」

「やっぱり、君を納得させられなかった」

タルラは目を閉じて深く息を吸って、吐く。

次に開いた目は決意を宿諦めた目をしてしていた、それが私にはそれは少し狂氣的に見えた、執着というべき、ナニカを見据えた。

「ミラー、もう一度だけ言う、私の言葉を信じてくれ」

私だつて信じたいよタルラ。

「信じたい……か、それが君の言葉か、君らしい、残酷な程に」

そう言つてタルラは私を突き放した、簡単に崩れた私に少しだけ心配する様な顔を出したが、直ぐに無表情になる。

「もう話は終わった、どの道私は戻れない、君を救う為にもチエルノボーグを落とす」

???
ツ！

「その名で言うなミラー……クラウドスレイヤー、居るな？ミラーを運んでくれ、丁重にな」

扉を開けてクラウドスレイヤーは私に戻る様促す、軋む体を動かしてその手を払い除けて、タルラに向かってその足を進める。

「もう良い、歩くなミラー、体が痛むんだろ」

ああ痛むさ、心が痛む。

体の痛みなんて耐えれば良い、でも心の痛みは耐えられない！

私に何を隠している？ずっと前から隠してる事があるだろう？そもそもタルラは最初からそんな暴力的思想じゃなかった、それをなん

で教えてくれない？

「……ああ、なら私はこう言おう。君こそずっと私に隠してる事があ
るだろう？どう考えても知り得ない事を君は知ってるじゃないか」

それは私がーーツ

体が崩れる、痛み以上に機能が動かなくなってきた、不味いーー
！不味い、ここで倒れる訳にはいかない、このままじゃ何も変わら
ない。

崩れそうになる体を気力で立つ、まだ立てる。

「クラウンスレイヤー、もう良い。早く連れて行ってくれ」

タルラは再度クラウンスレイヤーにそう言うが、クラウンスレイ
ヤーは扉の前から動かない……私の味方をしてきているのか？

「私は、ミラーにも救われた、今この場でミラーの意識が有るのに連れ
て行く事など私には出来ない、人選ミスだったな、タルラ」

「お前……」

ああ、後でクラウンスレイヤーには奢ってあげないとな。

私は力を振り絞って、タルラと向き合う——そんな悲しそうな顔
をしないでくれ、私の体を気にしているなら大丈夫だ、タルラは私を
治すと言うが具体的にどうやって治すんだ、それは言える事だろう？

そう言うと、タルラは口を閉ざす。それも教えてくれないのか、な
ら先に私が教えてやる、荒唐無稽な話だと言うかもしれない、でも私
のこの言葉は真実で、事実だ。

そう口に出そうとしたその時、私の視界からタルラが消えた。

違う、これは私が、私の体が——倒れかけるその瞬間、タ
ルラが受け止めてくれた、そのことを嬉しく思うが、私はまだ言葉を
届けられていない。

次第に目蓋が重くなる、ああ……力が入らなくなってきた、こんな
時に私の体は思うように動かない。

「……ミラー、安心してくれ。絶対に君を治す」

そんな優しい言葉を聞きたいんじゃない、それじゃあダメなんだ、
あの都市を制圧してから全てが終わって、始まってしまう。

意識が保てない。

感染者の、ウルサス帝国やその他の国の迫害と人権無視の非合法な所業故だ。

同胞達と巡り合えた事に感謝こそすれ、奴らのやってきたことの罪が消える事はない。

これから起こる事はあいつらの自業自得だ、ミラーは否定したが、私はそれには否定しない。

他のレユニオンの同胞達の一部……いや半分ぐらいは良い顔はしないだろうが、命令には従うだろう。

幹部の数人は従わないかもしれないが、タルラがミラーの容態とそれに対する「アテ」、その為に必要な犠牲だと言えば従うだろう。

……ああただ、もう今までのような笑顔で飲み交わす彼らを見る事は恐らく一生無くなる、それは少し寂しいものを感じる。

何よりそれを最も悲しむであろう者が、タルラの救いたい者だという事実には、私は言葉にできないモノを感じた。

「ミラーを任せた」

そう言つてミラーを私に渡す、背中に乗せたミラーの体は見た目からは想像も出来ないぐらいにとても軽くて、病人の体のようなのだ。

いや私達皆病人である事には変わりないが、ミラーのこれは……そう考える私を察したのかタルラは私を睨み付けた。

「早く行け」

「……わかった」

狂気的なモノを感じる瞳に気圧されタルラの部屋を後にする。

医療室に運ぶ途中にWに出会った、いつものニヤケ面が形を潜めて、真剣そのもので私を、いや私の背中に乗せているミラーを見る。

ふとWの格好に疑問を持ち、口を開いた所でWが先に口を開く。

「あいつ、前から気に食わなかったの、この辺で雌雄を決してあげる」
「……止めはしない」

「それで良いわ、ミラーをよろしくね」

会話はそれだけだった、私はWの全力を見た事はないが勝算は一割も無いだろう、生きる怪物と語られるテラの英雄を一人で倒せる相手は二人と居ない。

ふとWから視線を外すと、今度はフロストノヴァが立っていた、Wの後を追ったらしい。

「あら、あなたは自宅にいるかと思っただけだねえ」

「ファウストが来るまではな……私も行く、良いな？W」

「はあ、まあ、構わないけど？」

そう言って並び立つように、今から強大なモノと戦いに挑むようにあの二人はさつきまで居たタルラの私室に向かう。

レユニオンは実際の所、ミラーを慕う人間の方が多い、こうなる事はタルラも分かっていただろうに、反旗を翻そうとする者達を前にして勝つ自信もあるのだろうか。

改めて私は医療室にミラーを運ぶ。

医療室に寝かせて医療担当者に後を任せる、ミラーの容体を見て泣きそうな担当者は彼女を良くして??だと言う。

……彼女は無理をし過ぎた、後に名前の付いた『ピースト』との戦闘が最もな例だ、それだけじゃない、何かと私達に隠してちよくちよくと使っているのも知っている、顔色を見れば分かる。

彼女は自分自身がどれだけ他人に影響を与えたのかいまいち理解していない、だからタルラも過保護になるんだよ、私から見ればミラーがタルラにする行動も過保護だが。

ミラー、君は多分こう考えて動いているんだろう？「例えば自分が死んでも、その先に輝かしい未来を作る為なら構わない」って。

でもそんな未来は誰も望んで無い、納得する筈がない、ミラーが死んだら全てお終いなんだよ。

私だってミラーに死んで欲しくなんか無い、長い目を見て何れ鉱石病が治る未来は確かに来るかもしれない、でもそこにミラーが居ないと何の意味も無い。

「こんな残酷な世界……」

いつそ壊れた方が良いんじゃないか？そう思うのは私だけじゃない筈だ。彼女はそれを望まないだろうが。

「何日後に起きそうさ？」

「……一週間は」

「そうか」

私はそれを聞いた後に医療室から出て、煙草を取り出して一服挟む。

吐き出した煙が虚しく空に舞った。

8 ページ目

◆月×日 曇り（朝〜夕方）

日記を書いて精神を安定させる。

先ずあの日から四日経った、四日間も寝たきりになってしまった事に私は悔しさが込み上げるが、医療担当者は「たった四日で起きれるような容態じゃない筈」と言う。

一週間ぐらいは寝ているべきだと言うがそんな余裕は無い、もうすでにタルラは動いているんだろう。

心配するように泣きそうな目で見てくる泣き虫な彼女に、私はぼんつと頭を撫でて安心するように言った。

泣いてしまった……私はあやすのが得意なタイプじゃないらしい。タルラが止まらないのなら、私も止まる事はない。

私は既にレユニオン・ムーブメントのNo. 2としての責務と重責から抜け出す事は出来ないが、本格的にチエルノボーグに侵攻する前に出来る事をやる。

直ぐに立とうとしたところで、私の頭上に違和感を感じた……遂に常時付いてくるようになったか。

サンクタ族の特徴であり、本来私がアーツを使っている場合のみに出現する輪っかが頭上に出現していた。

医療担当者は「アーツの使用で体の変化が定着してしまった」と言う、そんな状態で動くべきじゃない、お願いだから休んでいて欲しいと再度私に言った。

ごめんね、でもこの足が動く限り止まる事は出来ないんだ。

医療室を出て直ぐ様自宅に戻る、そこに彼女はいる。

道行く同胞が私を見て挨拶をする、未だ何も変わっていない彼らを見るにタルラはまだチエルノボーグに対して宣戦布告をした訳ではない事を悟った。

ふと、同胞の一人が気になる事を言っていたので、話を聞いて見る事にした。どうやら私が倒れた直ぐ後に、Wとフロストノヴァが組んでタルラと大喧嘩したらしい。

途中でレユニオンから離れて地形の変わる程の戦いを繰り広げたようだ。

結果勝者はタルラだったが、タルラも無事とは言えないダメージを食らったし、それこそどちら側が勝つのか最後までわからなかったと言う。

……まさかあの二人が組むなんて、私の代わりにタルラを止めようとしてくれたのか？感謝しないといけないな、医療室に三人が居ないのは私が起きる一日前に起きたかららしく、フロストノヴァはスノーデビル小隊を連れて任務に。

Wも同じくなんらかの任務を受けて何処かに行ってしまったと……私が1日早く起きていれば感謝を伝えられたのに、つくづくタイミングが悪い。

……少なくとも怪我が満足に回復するまでは動けないか？
数日で回復するだろうが、その数日で私ができる最大限の事をやる。

チエルノボーグ事変は起こさせない、それが止められない出来事になってしまうのならより良い結果を生み出させて見せる。

思案しながら歩き、自宅に着いた、玄関を開けて家に入る。

惰眠を貪っているヘイズがいた、毛布に包まって寝ているヘイズはまるで喧騒とは無縁だと言わんばかりに平和に寝ていた。

かわいい猫だ、私は叩き起こした。

不機嫌になるヘイズに私は仕事を言う。

ロドス・アイランドに向かつてレユニオンの現状と、これからの動きを言いに行ってくれと、最善を尽くして止めるが、もし止められなかったら後の事はケルシーに任せると伝えてくれ。

それから……ヘイズ、ロドスに着いたらもうレユニオンには来なくて良い。

そう言うのと寝ぼけ眼だったヘイズが、真面目な表情に変わり「それはやだ、私はミラーに付いていきたいと思ったから付いてきた」と言って私を睨む、その割には私が任せた仕事や、家事洗濯その他諸々他の人に任せてるけど……？

「それはご愛嬌ー」とぷんぷんするヘイズに笑って「会えなくなる訳じゃない」と言ってみるが、ヘイズは納得した様子を見せない。

なあ、お願いだヘイズ、君がこのままレユニオンにいれば優秀な術アーツの使い手として戦争に駆り出されるかもしれない、死んでしまふかもしれない。

でもロドスに入ればその危険性は殆ど消える、私の転生者としての知識の中のドクターは指揮官として芸術すら覚える程だ、例えば戦場に出ても必ず生きて帰ってこれる。

私はヘイズを失いたくない。

ヘイズはそう言われて、諦めたように溜息をついた「言ってくれればレユニオンから脱獄して二人で逃亡劇を始められるのに」と言うが、それは少し私には置いてく物が多過ぎる、ごめんね。

「ミラー、死なないでよ、私が初めて認めた人」と言うヘイズが深く帽子を被り直して、部屋から出ていく。

ありがとう、ヘイズ。

これでロドスにレユニオンの現状を伝えられる、あの企業は直接的な武力行使をしないが、背景を知っていればその為の戦力を整えるだろう。

チエルノボグには記憶を失ったドクターがいる筈、ドクター救出作戦とレユニオンの作戦の日はほぼ同時期。

思考を加速させて、私のこれからの動きを頭の中で整えて――

――ヘイズのいなくなった部屋を見渡す。

ああやつぱり、寂しいな。少なくとも時間を過ごしてきた仲間だ、もう二度と会えないかもしれない事実は私の心を強く痛める。

…いや、そうはさせない。

ふと、咳き込んだときの感触に嫌な物を感じた。

私は口に付いた血を拭き取り、決意を改めて握り締めた。

◆月×日 曇り (夕方〜深夜)

ページが尽きたので新しい日記に書き込む事にした。

次に私がやった事はクリスタルレンズの面々を集める事、彼、彼女らの情報伝達能力は卓越している、直ぐ様私が起きた事を知って、

各々私の自宅に集まってくれた。

私の部隊に任せる事は大まかに決まっている、直接戦闘に適していないこの部隊を上手く使うにはやはり工作以外にない。

チエルノボーグの侵入だ、だからって攻撃的な工作をしてもらいたい訳ではない、前以てルートを確認してあわよくば感染者を誘導し、レユニオン、あるいはロドスに逃げる様に促す。

それだけじゃない、あそこに住む民間人の大半は罪もない民間人の筈だ、死ぬ理由すらないのに殺される理由なんかない、もし戦争が始まってしまった時、タルラの過激な思想に染まりきった同胞はきっとその者達を手にかける。

それはさせたくない、だから彼らには民間人を安全な所に誘導、レユニオンが保護出来るわけでもないのでチエルノボーグから逃げる道に向かつてもらい、最小限の犠牲だけで済ませる様にする。

それをクリスタルレンズの者達に命令すれば、今度は「隊長はどうするの？」と訊かれたので、私は改めて考える。

……あの日最後まで説得できなかった私に、二度も話を聞く程タルラは悠長にしないだろう、実のところ、私はもうチエルノボーグ事変は起きてしまうと考えている。

それを少しでもマシにする為には、無関係な者達を手を掛ける事はさせてはいけない、そもそも制圧するだけならウルサス帝国の兵士達を倒すだけで良かったんだ。

……いや、待て。この行動をなんとか利用できないか？

チエルノボーグ事変が起きてレユニオンは他国、企業からの共通の敵になる、それが私の転生者の知識の中の流れ。

だが今の私達は感染者にとつての楽園と言われる程で、他国からも秘密裏に交易出来るぐらいにはなんとか信用を持っている。

一度災害を止めた、世界の英雄でもある。

……良い事を考えた。

「悪い顔してますよ隊長」と言われたが、そんな彼も同じような顔をしていたので私と同じ考えを模索したのだろう。

彼には別の作戦の工作活動を一任する事にした、そもそもウルサス

帝国は他国からあまり好かれていない、この状況を使つて良い方向に運べられれば、レユニオン・ムーブメントはこの窮地を抜け出せる。

これは誰にも知られてはならない、悟られてはならない、クリスタルレンズは影の部隊だ、決して表舞台に立つ部隊じゃない。裏で舞台を作つて、彼らが気付く頃は全ての作戦が成功している時だ。

「ミラー隊長、一杯ぐらいやりましょうよ！」と言われ私に瓶のビールが渡される。

……そうだね、一杯だけ飲もう。

「みんな持った？ごほんっ……隊長の目指す未来に、乾杯っ！」

総人数17人、元同期の彼らとまた一緒にこの酒を飲む為に……次はこの輪にタルラも入れて。

——始めよう、最善を尽くして。

◆月★日 晴れ

1日経った。

体調は絶^{絶不調}好調、頭痛に吐き気には後はなんだ？まあいい、体がこれ以上何か変容している様子も無い。

この足が止まる理由にはならない、まだ会わなければならぬ人はいる。

スカルシユレッダーを探す為、私は同胞達に彼の居場所を聞き出した。

タイミングが良い、丁度米の輸入から帰ってきた所のように、早速スカルシユレッダーに会いに行った。

スカルシユレッダーは話を聞いていたようで、現状を説明する必要はなかった、ならばと私が口を開く前にスカルシユレッダーは言葉を話す。

「悪い、俺はタルラに付くよ。ミラーの言いたい事もわかるつもりだが、俺はそれでも奴らにやられた所業を許せる気持ちはない、戦うことが性に合っているんだ」

それは——私では説得出来そうにないと瞬時に判断した。

私はスカルシユレッダーが受けた傷と同じ傷を持っていない、彼の

非感染者に対する恨みを私はどうする事も出来ない。

ならせめて無関係の人達の命を奪わないでくれ、やられた事をやり返す、それは簡単だ、だがそれはただの憎しみの連鎖でしかない、連鎖を断ち切るには暴力じゃ解決出来ないんだ。

そう言うとスカルシュレッダーは黙る、考えているのだろうか、何も言わなかった。

それから、死ぬ事だけはするな。

「それは約束する、俺にはまだやる事がある」
良かった。

私の転生者としての知識では、彼に関しての話はチエルノボーグ事変が起きた後の問題だ、レユニオンと龍門との衝突。だがこの問題はチエルノボーグには直接関わらない。

レユニオンと龍門の衝突はさせない、そもそもレユニオンが龍門に攻撃をしなかったら、恐らく……いや、今は良い。

協力は得られなかったが、だからと言って私のする行動を止める事もしないとスカルシュレッダーは約束してくれた、これだけで良い、私を尊重してくれている事に変わりはない。

ふと、スカルシュレッダーは呟いた、何気ない言葉の一つだったが、私も同じ事を感じ取った。

タルラを止める為にも私は――。

◆月○日 曇り

ついにこの日が来た。

私は深くフードをかぶり直す、まだタルラに私が起きた事を悟らせる訳には行かない。

近日にチエルノボーグを落とす、そうタルラが宣言する。

非感染者に、そしてウルサス帝国に我ら感染者の絶対的な存在を見せると言い放ち、武力を持って制す事を改めて全同胞達に告げた。

反応はまばらだった、賞賛の声は確かに多かったが疑問に持つ者や人知れず離れていく者もいた、そんな彼等はタルラの目にどう映って見えているのか。

結局、私は???にこの選択をさせてしまった、私ができる事はやって

きたつもりだがそれでも「つもり」だったのだろうか。

早い段階で私がタルラに転生者としての知識を知らせていれば、もっと早くにケルシーにコンタクトを凶れば、或いは最初からこのレユニオンに来なければ、様々な後悔が胸に残り、痛みだす。

過ぎ去った出来事は私の心を痛め続けるが、だからと言ってまだ終わったわけじゃない、まだ未来は変えられる。

ふと、いつ隣にいたのだろうか？ファウストが何かを探るように私を見つめてくる。

「レユニオンから抜けるのか？」そう単刀直入に問われた。

抜けるつもりは無いよ、と返してファウストは目を閉じて深くため息をついた後に、そうかと一言だけ言った。

……ああでも、そうだな。

ファウストには、彼には託しておこう。そうすればもしかしたら義理難く優しい彼は私の託した想いを受け継いで、生きてくれるかもしれない。

そう言った想いで託した言葉に、ファウストは決意を宿した瞳で頷いてくれた。

ありがとう、サーシャ。

後は任せた。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

a.m. 7:52 晴れ

そうして賽は投げられた?????

『全国放映ニュース速報』

「レユニオン・ムーブメントのNo. 2 ミラーはウルサス帝国に捕まり、チエルノボーグへと輸送された。

レユニオン・ムーブメントは確かに感染者達の集団であり、危険性は少ないものの我々非感染者を脅かす者達であるのは明白な事実だ。

だが、忘れた訳では無いだろう、百獣王討伐災害事変を、彼女も一人の片割れと共に一度世界を救った事を。

そんな彼女に対し、ウルサス帝国はレユニオン本拠地に潜入し、無

抵抗であった彼女を捕らえ、感染症の研究の為にその体を研究すると言うのだ。

感染症の研究の為と言うが、ウルサス帝国の本当の目的は重度の鉱石病感染者であり、とりわけ未知数である彼女を軍事的目的で扱うつもりのようなのだ。

軍事的、つまりは強大なアーツの本流、世界のバランスを変えかねない力をウルサス帝国は独自に使おうと考えているのだ。

如何に感染者とはいえ、この様な理由で彼女を研究する事は我々他国家に対する宣戦布告に他ならない。

世界を変えかねない力を手に入れると言う事はそう言う事だ。

また、近い内にレユニオン・ムーブメントは動くだろう、かの地チエルノボーグを制圧し、ミラーを取り戻そうとするだろう。

民間人は早々に避難を推奨する。

以上でニュースを終了する。また新しい情報が入るのを期待して欲しい』

それはタルラが演説をして少し経った後の出来事だ。あの時に前以て聞かされた時は正気かと思っただが、俺に止められる訳もない。

それにこの行動が上手くいくなら確かに、レユニオン・ムーブメントとしての立場は失われる事なく、正当な理由としてチエルノボーグを制圧出来る。

ウルサス帝国は俺たち感染者だけに恨まれている訳じゃ無い、20年前に龍門とウルサス帝国は争った経歴がそれを示している、他国に敵が多い国だ。

利用される前に利用する、ミラーはこれを今行える最大限の行動を実行した、チエルノボーグへの侵攻が止められないのならそれを利用して、少しでも他国、他企業に「あくまでも正当防衛である」と示す。

後はレユニオンがどう制圧するか、ここに掛かっている。

「それは本当なんだな？ファウスト」

能面のような表情で俺を見るが、その実その目は不安に怯えているようだ、タルラはミラーの事になると途端にわかりやすく目に出やす

い。

「事実だ、俺は言った筈だ、信用するなど」

「信用など最初からしてない、だが奴らは最初からこれが目的だったのか……いや、待て。まさかミラーがこの現状を利用したのか？」

流石に着眼点が冴えているな、俺はすかさず助言する。

「ミラーは寝ていた筈だ、何者かが侵入し連れ去ったのだろうか」

「ならこのニュースは誰が情報を得た？」

「俺は知らない、タルラはどうなんだ」

「……まさか」

「何方にせよチエルノボーグにミラーはいる。この情報が本当だったらどうするんだ、タルラ」

「愚問だ、連れ戻す。全ての戦力を持ってチエルノボーグを制圧する、その後にはウルサス帝国に改めて宣戦布告をする、例えば私の命が尽きようとも帝国を滅ぼす」

間髪入れずにそう告げるタルラの目は確固たる決意が宿っていた、そこに狂気的なモノを潜ませながらもそう告げた。

それだけ思う気持ちがあるのに何故タルラとミラーがすれ違ってしまったのか、俺には想像も出来ない。

互いに大事に思っているからこそすれ違うのだろうか。

ミラーに言われた事を改めて思い出す。

「サーシャ、タルラを裏で操る正体を探って欲しい、ある程度見立ては付いているけど、憶測だけではまだ『足りない』んだ、君には難しい事を任せてしまう……私のお願いを聞いてくれないか？」

そうミラーに命令——いや、お願いされた。あくまで一人の人として俺に頼んだミラーに対して俺は悩む事もしなかった。

ファウストではなく、一人の人として頼んだミラーの決意を、俺は受け取った。

「直ぐに準備をするぞ、真偽はどうあれ、チエルノボーグを陥落させる事に関わりはない」

俺は頷いて部屋から出る。

チエルノボーグにミラーが居るのは事実だ、それがどれだけ危険な

行為であろうとも、タルラはミラーが起きるまでの一週間で全ての準備を済ませ、ミラーが動く前にチエルノボーグを制圧しようとした。

ミラーが起きたのはそれこそ誤算だっただろう、ブレない、強力な精神力がミラーを突き動かす動力源なのだろうか？

何よりミラーに天運が傾いたのは、ミラーが起きている間にタルラはレユニオンに居なかった事だろう。

その間にミラーを見た同胞達は少なからず居るが、クリスタルレンズの情報規制は流石の一言に尽きる。この分野に於いてあの部隊を超える者達を見た事がない。

敵はウルサス帝国だけじゃないとミラーは言っていた、この情報を全世界に流すことでごたごたに紛れて出てくる企業と国家が必ず居ると。

俺のやる事はわかってる。

信頼に応える為にもこの足を動かした。

9 ページ目

□月◇日 晴れ

チエルノボーグに侵入出来た。

転生者の知識ではレユニオンは綿密な計画を立て、天災まで計算に入れて、タルラの圧倒的実力と合わせてチエルノボーグの防衛システムを瓦解させた。

具体的な日数は分からないが、数日もすれば此処は戦場になるだろう、その前に少しでも此処にいる犠牲者を少なくさせなければ。

クリスタルレンズの隊員達も一部を除いて全て侵入済み、後は手筈通りに残っている民間人と、大勢の感染者をチエルノボーグから離脱させる。

私はクリスタルレンズの中でも二人戦闘力に優れている隊員を連れていて、工作した情報に釣られてあの連中^{ライン生命}は動く筈。

それだけじゃない、ヘイズを逃した事をヴィクトリア王国が勘付き始めてきた、あの王国も私を狙っている。これを期に収容しに来るだろう。

後はなんだ？まあ何にせよ私のアーツを研究し、自らの手の内に収めたい企業や国は少ないまでも一定数いる、私は奴らにこの体を渡すつもりはない。

そうなるとうとうしても私一人では出来ない、場所が場所だ。私の痕跡がレユニオンが来る前に発覚してしまったら全ての作戦が水の泡、私は彼らが来るまでアーツは使えない。

短機関銃を扱うこの腕も中々になってきたが、近距離に私は対抗できる手段が少な過ぎる、それを補う為に二人私と行動してもらおう事にしたのだ。

フルフェイスで隻腕な盾使いの彼と、どこか可愛らしい双剣使いの少女はパトリオットのお墨付き、この二人がいれば近接面は安心できる。

戦闘以外の目的にも必要な二人だ。

今頃レユニオン・ムーブメントは混乱しているだろうか、その事に

申し訳なさを感じるが、あのままウルサス帝国に戦争をふっかけてしまったら、他国から見た私達はただの無法者と成り下がってしまう。統率の取れ、あくまでも平和的手段で感染者の環境を変えようとしている私たちの努力がそこで終わってしまう。

だが、私を囚にすれば少しでも『大義名分』を得た行動だと認識する筈、それにウルサス帝国は敵が多い、レユニオンでない感染者からの目もそうだが、そもそもあの帝国は他国と戦争していない時期の方が少ない。

これを期に潰したいと思う国は少なくないと踏んでいる、表舞台上がってこないまでも、裏でレユニオン・ムーブメントを支持する国や企業は現れるだろう。

……何よりこの後に最大のチャンスが転がっている。私はこれを逃す気はない、こうなってしまうたら私は出来る事を全てする。より良い未来に繋げる為に。

□月☆日 曇り (夕方)

一日たった。

潜入し潜伏し、垂らした釣り糸に魚が引っかかるのを待っている。すると垂らした釣り糸に引っかかる前に、別のモノが引っ掛かった。

隊員の一人から「怪しい場所を見つけた」と連絡を受け、地形情報を転生者の知識と照らし合わせると、そこが『ドクター』の眠っている石棺の場所と合致した。

よく見つけてくれた、後であの子には飴ちゃんをあげよう。

今回チェルノボークに潜入した理由の数ある内の一つに、ドクターへの接触も含んでいた、ロドス・アイランドと信頼を築き上げる為に現状は一番効果的に働く状況にあり、私はこの機を逃すつもりは毛頭無い。

すると「その人に何を見出したんですか、隊長」と双剣少女に問われた、確かにその疑問も最もだろう、他の者からしたら得体の知れない人だ。

私自身、転生者の知識で彼が記憶喪失になる事を前以て分かっていたらロドスと協力しようとは思わなかったと思う。

『ドクター』は確かに学者として、オリバシー鉋石病に対する思想や思考は私と近い観点にあり、その点では非常に気が合う。

ただ、Wが見たような『悪魔』としての一面は、戦場を見据える目は人としてではなく、駒”として扱う人物へと変わるという面だ、それが戦争とは無縁だった筈の彼が変貌してしまった姿なのか、元々なのかは知らないが。

しかし記憶が消失したドクターの在り方は好きだ、好ましい、人として失ってはいけないものを持っている。

そしてそれはテラの、感染者の新しい光になってくれると私は期待せずにはいられないんだ、この世界の主人公ヒーローに夢を見てしまう。

だから彼と手を組みに行く。

ごめんねアーミヤ、先に起こすよ。

□月☆日 曇り (夜)

遂に襲撃に遭った、私は少しでも襲撃を避ける為にシルエツトを隠す外套と、フードを深くしているが何かしらの追跡能力が奴らにはあるのだろうか、すれ違い様の一撃に盾使いの彼が反応し、路地裏での戦闘は開始された。

練度はそこそこ、統一感には欠ける事からライン生命の刺客だろうか？何にせよ申し訳ないが此処で眠っていけ。

湧いて出た狙撃者達をその引き金を引く前に私の短機関銃で撃ち落とす、サブマシンガンだからといって遠距離に分があると？笑わせな、私はそこまで甘くないぞ。

近付いてくる戦闘員を私は気にしなくていい、私に近づく前に数回の斬り合いで行動不能にし、避けようのない意識外からの攻撃を重厚な盾で守り、そのまま盾で押し潰す。

二人の連携は流石だ、やっぱり一緒に来させて正解だった。

鎮圧は時間の問題だ、そう考えて少し気が緩んだのが失敗だったのか、私は次の瞬間大きく吐血し、視界がふらついた。

とても銃を扱える状態じゃない、私は地面に崩れ落ちそうになる体をなんとか踏ん張る。そうして踏ん張って気付いた。

視界がおかしい、急に変色した方の目が、左側が見えにくくなった、傷を負った覚えはない。

いや——まさか。

私が倒れても戦闘は続いている、二人は残った刺客を全て倒しきった後に急いで私の元にやってきて心配してくれた、双剣少女の肩を借りて立って、目の前に写った隻腕の彼が震えた声で私を呼んだ。

私は鏡を取り出して自分の顔を見る……なるほど、こうなったか。左目が結晶に覆われていた、左側の視界は完全に閉ざされたといってもいいだろう。

私は持つて来ていた眼帯を着けて左目を隠す、双剣少女が悲しそうに私を見つめるが、眼帯姿の私はどうだ？かっこいいだろ？と言ってみると私から顔を逸らして、表情を隠して「そうですね」とだけ言う。……ごめんね。

このタイミングでこうなることは読めなかったが、いずれそうなるんだらうとは思っていた、目で良かった。これが腕や、足だとしたら身体機能に影響する、歩けなくなるのが一番の問題だ、それだけは避けたい。

片目ぐらいくれてやる、まだ視界は閉ざされていないぞ。

私は力強く意識を保って、足を踏み出した。

□月◆日 ???

辿り着いた、チェルノボークの中核エリア、彼の眠っているその施設に。

周りの安全を確認した後、直ぐに私の医療知識と助手に隻腕の彼を使い、ドクターの治療を開始する。

私はこの日の為に医療についてしっかりと学習し、一定レベルでの医療行為を問題なく出来る様になっている。

というより私が何をやるまでもなく隻腕の彼の言う通りにやれば良い。

彼は盾を持つ前は医者を見ても好青年だったらしい。鉱石病で虐げられ、片腕と共にその夢を潰されてしまったが。それでも知識を失ったわけでは無い。

彼の助言と私の知識を総動員してドクターのオペを開始する、目に見える傷などはないが、長い眠りから起きるには些か体温が低い、健康に保たせる必要がある。

此処で私がやることは至って単純、ドクターを起こして、ロドスの面々が到着するまで話す、私の時間が許す限り彼に私の知る全てを教えよう。

自分が何者なのか、此処は何処なのか、何をすべきなのか、私が出る範囲で助言しよう。

到着してからはアーミヤ達と行動するのがベストだろうか？レユニオンとロドスが衝突しない為にも付いていくべきだ、ロドスが同胞達と接触する時に私がいるといた方が遥かに良い。

だが此処にドクターがいる事を私知ってしまったっている異常性は彼女達からすれば異質そのもの、何か言い訳を考えないといけないか？

とはいえ妙に簡単に潜入できたな、そもそもチェルノボーグ、ウルサス帝国はなぜロドスのドクターを此処に？

驚異たり得ると判断したのだろうか？ドクターの動きは読めないと思っただのか、それとも……これはただの考察、私の取るに足らない考えに過ぎないが。

ドクター自ら記憶を消しに此処に来たのかも知れない。

正気で生きるにはこの世界は残酷過ぎる、誰かが皆何かに固執してないと、簡単に自分を保てなくなる。

私だって???? (塗り潰されている)

だけど前^に進む足を止めることは私には出来ない、立ち止まる事は私は知らない。この体は進むしかない、進み続けて歩み続けて、やっとな手に入れるモノがそこにあるから。

君もそうだろうか？ドクター

休む時間はそろそろ終わりだよ、君には待ってる人がいるんだか

ら。

さあ、起きて。

d r .
???

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

??月??日 ??

プロローグ。

「さあ、起きて」

その言葉が私の意識を徐々に覚醒させていく。

初めて聞いた声だった。

声のした方に振り向いて見れば、眼帯を付けた彼女はそこに存在し

ていた。

初めて見た少女だった。

天使のような輪っかを光らせた彼女は、触れたら壊れてしまいような姿のように見えるのに決意を宿した黄昏色の瞳がそれを感じさせない、所々が灰色な黒い髪で、背丈は高くも低くもなく、白色の外套を身に纏っていた。

「おはよう」

お、おはよう。

「自分の名前は分かるか？」

そう言われて私は自分の名前を言う、自分の名前を忘れる筈がない。

「では他の事は？」

そう言われて思い出そうとして、何も思い出せない事に気付く、自分の名前以外の、自分が何者なのか、そもそも此処は何処なのか、なぜ此処にいるのか、全てがわからない。

記憶喪失、という事だろうか。

「先ずは君自身の事を教えてあげよう」

そう言って彼女は私が何者であったのかを告げる、曰くロドス・アイルランドという企業のトップ3の一人だったらしい、神経学者でありながらロドスの黎明期からリーダーとして軍事的な指揮官をも務め

ていた人物。

それが私のようなだ。

「いまいち実感が湧かないか？」

当たり前だ、本当にそれが自分なのか？君が嘘を言っている可能性だってあるじゃないか。

「む……信用出来ないか？まあそうか、今の君は何も分かっていない、いきなりこんな事を言われても何が何やらだろうな」

ところで君は？そのロドスという企業の一人なのか？

「違うよ、そうだな、君は私をどう見る？ロドスの一員か？友人か？それとも無関係の人物か？或いは君の命を狙いにきた刺客だったり？……ああ、恋仲の類では無いよ」

質問を質問で返された……。

少し考え、そのロドスの企業の一人ではないと思う、だからと言って自分に関わりのない人物ではないだろう、命を狙いにきた者とは思えない。

友人、だろうか。

「ふふっ……ではそうしよう、君が記憶を失って初めての友人は私になっちゃったな？」

少し嬉しそうに言う少女は場所が場所じゃなかったらまるで年頃の少女の様だ、しかし本当に此処は何処だろうか？疑問が疑問を呼ぶ。

「隊長、侵入者だ……あのロゴはロドスじゃない、レユニオンでもない、ウルサスだ」

双剣を手にした少女は事務的に私と話していた彼女にそう告げた、すると先ほど自分に見せた表情を消す。

「帝国が何故、つけられてたか？……まあいい、此処で殲滅する」

「分かった、作戦は？」

「そうだな……」

悩んだ様子で彼女が私に振り向いた、そして私を見ると頷き、柔らかい表情で私を見つめる、何だ？

「なあ君、記憶を失ったとはいえ、指揮官としての腕は失ってない筈

だ、私を使ってみろ、これから来る敵に対して適切な指示をして欲しい」

それは——無理だろう、自分は記憶喪失で、これからどうするかも分からない、何も分からない状態の自分に何を期待しているんだ。

「出来るさ。君なら」

何を根拠にそんな事を？

「信用しているからさ」

——信用、か。

「改めて名乗ろう、ロドスの指導者。私の名前はミラー、今はそれだけ分かっていれば良い」

ミラー、初めて聞いたと言うのにまるで何処かで聞いたような響きだ、記憶を失う前の私は彼女に会った事があるのだろうか。

他二人も私の指揮に従ってくれるようだ、そこにミラーのような信用はないが、どこか自分が試されているような感覚がする、私を見極めようとしているのだろう。

未だに右も左もわからないが、私を信用していると口に出す彼女を蔑ろにする訳にもいかない、思考を切り替えて、今の状況を確認して——頭に展開した戦術を引き出す。

初めての^{懐かしい}感覚だ。

正面の扉が強引に開かれ、武装した兵士達がこの場所に進入してきたと同時にこの場を切り抜ける最適解を瞬時に思い付き、ミラーとその部下であろう二人に指示を出す。

「良い指示だ、ドクター」

今この瞬間だけは、自分がどうすれば良いか理解できた。

10 ページ目

?月?日?

モノの数分で戦闘は終わった、ドクターの指揮の上で動いてみて分かったが、これはもはや魔法にかかったような感覚だ、最適解を見つめるスピードの速さ、そして状況に合わせた適切な指示は惚れ惚れする。

ウルサス帝国の兵士達はたしかに私達三人を相手にするには格下だったが、それでも遥かに楽に動けた。

私は過去のドクターの指揮を見たことはないが、記憶を失っても指揮官としての実力はなんら衰えていないのだろう、そう言わしめる程だ。

流石だなとドクターに告げるが、彼は彼で自分が指揮をするまでも無いぐらいに実力がかけ離れていると言い、本当に自分の指揮が必要だったのかと言う。

その言葉に私がフォローする前に、双剣少女が「謙遜するな、お前の実力は測れた。指揮官としてお前を認める」と言ったので、私は驚いた。

彼女が私以外に意見を言うなんて珍しい、心から思ったのだろう。言った後に照れたのか、暗闇に姿を消して偵察に励んだ双剣少女に微笑ましい気持ちになる、そういえば彼女はレユニオン全体から見ても年下の少女だったな。

倒れた兵士の装備を探ってみるが、無線をしていないのを察するにこのサルカズの兵士達ははぐれだろうか。

それでも不可解だ、この場所の情報は数少ないはず、それとも何者かが情報を得たのだろうか？

いや、今気にする事じゃ無い。

とすると——と、ペンを走らせていたらドクターは「何を書いているんだ」と聞いてきた。

この状況で紙媒体にペンを走らせる私を疑問に思えただろうか、これは私にとってもはや呼吸のようなモノ、記録を書いているんだと話

すと「そうなのか」と言い、それ以上の事は聞かなかった。

アーミヤが来るまでにまだ時間があるみたいだ、ならばとドクターにこの世界の事を学んでもらう事にした、基本的な知識を私はドクターに教える。

変な感じだ、このテラで生まれ育ったとはいえ、転生者としての意識を持っている私が、このテラの中心人物になる者に知識を授けているなんて。

簡単な世界情勢、このテラを蝕む鉱石病の存在などを教えたところで、「それで君たちは何者なんだ」と言われたので、再度改めて自分たちがレユニオン・ムーブメントと言われる者達の一員だと言う事をドクターに告げた。

反応は淡白なものだった。

記憶を失っているとはいえ私はしっかりと鉱石病とはなんなのか、感染者とは何か教えたのだが、「そうか」の一言で流され呆気に取られてしまった。

「何を驚いているんだ」と言われたが驚かない者がいるだろうか。

記憶を失って現実感もないだろう、そう言ってくれるのを予測していたが、実際に言われてみるとなんとというか……なんとも不思議な感情になるじゃないか。

そしてその人間性、感染者であろうと差別のしない在り方に心から嬉しく思う、この世界を蝕む全ての元凶に一石を投じる人物なのだ。改めて理解する。

そういうところは昔と変わらないじゃないか、君。

「ロドス・アイランドを見かけた、直ぐに此方に来る」と偵察から帰ってきた双剣少女は伝えた。

アーミヤとその面々だろう、遂にここに現れるか……さて、どの様に説明しようかと考えると、ドクターは疑問に思いながら今から来るのは仲間なのかと、そう聞いた。

そうだよ、君の帰るべき、待っている者達のいる居場所だ。

元々私が何かしなくても君は彼女達に助けられていた、私が君を助けたのは……そうだな、これから分かるよ。

と、少しはぐらかしてドクターに言う、そういうと「どんな理由であれ助けてもらった事は事実だ、ありがとう」と言われて少し照れた。確かにドクターに会いたかった気持ちもあった、ただ打算も無しに会いにきた訳じゃない、私が彼を助けたという事をロドスに知ってもらい、レユニオンとロドスの間をより近付ける目的が主なところだ。……いや、助けたというか、ウルサス帝国に同じ所に拉致られたと言いついた方が通り安いだろうか、一応私は捕らえられた身だし。その考えが実際どうなるかはこれから分かる事だ。

ロドスの公表リーダー、最高執行権を有する彼女とのファーストコンタクトは果たして、どの様になるだろうか。

私は彼女を歓迎する、あの子は少し純粹過ぎる所もあるが、非情になれる側面も持っている、何があろうと決して自分の信じた道を進み続ける。

その在り方は私と似ている、だから分かり合える筈だと私は思っている。

微かに足音が聞こえた、もう間も無く私は邂逅を果たすだろう。

待ってたよ、ロドスのリーダー。

警戒しつつ扉が開かれたのを見て、私は歓迎の一言を放った。

部屋に入ったアーミヤと、複数のロドスの面々は私の存在に更に警戒を強めてしまった様だ。

ファーストコンタクトは失敗したらしい、何がいけなかつただろうか。

「貴女は何者ですか」とアーミヤに問われる、ケルシーから聞いていないのか？……いや、ケルシーが素直に話す人物だとは思わないな。

そうか、アーミヤは私を知らないのか、姿形だけでは何者か判断出来ないという事だろうか？

まあ確かに、私よりタルラの方が圧倒的に知名度が多い、表舞台に立つのは彼女だからな。

私が名乗る前にアーミヤが私の近くにドクターがいる事に気付い

てその表情を驚愕に染める、もう起きているとは思わなかったのだろう、その肝心のドクターは何をしたら良いか分かってないらしい。

行ってやれ、彼女には君が必要だ。

そう言うのとドクターは少し躊躇した後にアーミヤのいる方に歩いていく、近寄るドクターにアーミヤはすぐに駆け寄るが「君は一体……？」とドクターに言われてその動きを止める。

アーミヤは自分の名前を言って、ドクターに私達ロドスの仲間だと言う、そう言うアーミヤに対して「思い出せない」とドクターが言い、ドクターが記憶喪失だとアーミヤは知った。

アーミヤは一瞬、此方に敵意を向けたが、それは直ぐに霧散した。私がおかしたのではないかと思っただろう、そして直ぐにそうだとするならここに居るのはおかしいし、何よりロドスとドクターを接触させる意味がわからないと、多分こう考えた筈だ。

とにかく無事で良かったと安堵したアーミヤは、一頻りドクターと話した後はこちらに一歩踏み出す。

私もアーミヤとはゆっくり話し合いたかったが、それは叶わないようだ。

刹那、地面が揺れた。

私はこの揺れを転生者の知識で知っている、始まったか。

アーミヤ含めロドスは今の現状を掴めていない、それはそうだ、この情報は私しか知らない。

私は軋む体を動かして、彼女達についてくる様に言う。

早く此処から出ようとロドスの者達に言うが「信用ならない、アーミヤ、ドクターの回収はした。私達の作戦で此処から出るぞ」と見覚えのある人物が助言する。

あれは確か、ドーベルマンか。

ポリバルの元軍人であり、行動隊E1の隊長、詳しい実力は知らないがドクター救出に同行している事を考えれば、優秀なオペレーターなのだろう。

私について来ないならそれでも良いが、どうする？アーミヤ。

そう私に問われて、アーミヤは「……貴女がドクターを起こしたの

ですか？」と言われたので、そうだと返す。

「わかりました、此処から出る目的は同じです。協力しましょう」
ドーベルマンは考え直すようにアーミヤに言うが、アーミヤは信じ
てみましようドーベルマンに促す。

良かった、少しは信用してくれたらしい、未だに私が此処にいる猜
疑心もあるだろうが、私がドクターに対して「何もしていない」とい
う事が分かったのだろう。

私はロド~~ク~~についてこいと言って先導する、時間は限られている。
次に私は
????????

(空白)

(空白)

(空白)

(空白)

(空白)

と、目眩がした。

「隊長？」

「隊長」

「隊長！」

体が揺すられた。

意識を失っていたようだ。

状況を確認する。

ドクターが眠っていた建物から脱出し、私達は外に出た。

外に出れば、壮絶な光景が広がっていた。

レユニオン・ムーブメントとウルサス帝国のチエルノボーグでの戦争だ。町を破壊し、兵士が惨殺され、同胞の一人が無残に切り裂かれ頭を潰される。

如何に被害を減らしたところでそれがゼロになるわけじゃ無い、関係の無い人を避難させたからと言って、ウルサスの兵士は同胞はその命を散らし、同胞はウルサスの兵士の命を刈り取る。

……本当は同胞達に争いなんてさせたく無かった。

こんな戦いに――

ふと、泣いている少女が居た、チエルノボーグの市民なのだろう、逃げ遅れてしまったのだろうか。

そんな少女にレユニオンの同胞が駆け寄る。

そして少女に対して刃を――振るわなかった。

刀を仕舞って少女の頭を撫でて、避難誘導を始める、少女だけでは無い、彼らは抵抗を辞めて武装を解いたウルサスの兵士を殺さなかった。

殺したいだけの恨みを彼らは持っている、それでも抵抗を辞めた者に対して、憤怒の言葉を吐きながらも、殺める事をしなかった。

ああ、良かった。

私は振り返って、今起きている状況を理解出来るかとアーミヤに考えさせた。

そう問われて彼女は「今日だとは思いませんでしたが……」と前置きをして、自らの考えを話した。

「数日前、レユニオン・ムーブメントのNO2がチエルノボーグに幽閉されたと全国で情報が拡散されました、レユニオンはこの事に怒り、実力行使にてチエルノボーグを制圧する事を決めた」と

では、彼らの行動をアーミヤはどう見る？正義だと思うか？悪だと

思うか？それとも別の、善悪でも無いなにかか？

「……以前に調査に来てから明らかに民間人や感染者の数が少ない、レユニオンは予め戦場から遠ざけたのでしよう、必要以上の犠牲を生まない為に」

「この戦争の発端はウルサス帝国に有ります、レユニオンはある日を切っ掛けに組織的になり、理性ある行動で感染者の権利、共存を訴えていました」

「だからこの行動は、それ以外に方法が無かったから」だと、私は推察します」

「この戦争が善か悪か、私にそれを選定する権利は有りません」

成る程、アーミヤはそう考えるのか。

「でも」

「ロドスとレユニオンが争う必要も、有りません。私は彼らは歩み寄れると、そう思いたいから」

———
そっか。

歩み寄れる。

そう言ってくれたアーミヤに対して私は微笑んでアーミヤの頭を撫でる、急に撫でられた事に私の行動に疑問を持ちつつ赤くなつて「や、やめてください……」と恥ずかしげに言う。

ふと、ドクターと目があつた気がした、私はアーミヤを撫でる手を辞めて、ドクターに向き合つた。

君はまだ何もわからないだろう。

自分が何者なのか、何をすれば良いか、これからゆっくり、知っていけば良い。

君は君の目的の為に進め、それがどれだけ難しい道でも、必ずやり遂げられる筈だから。

私はドクターに対して握手を求めた、フルフェイスで表情の見えない彼、或いは彼女は何を思っているのだろうか、暫くした後私に私の握手に応えてくれた。

ムツとしているアーミヤに「別に取らないよ」と言うのと、そういうことじゃないです！とムキになったので、此処が戦場だというのに、

微笑ましくなった。

私は隻腕の彼に、他のクリスタルレンズの隊員を集めて「例」の作戦を実行する様に言った。

寡黙だったが、忠実に私のお願いを聞いてくれる彼は良い奴だ。

次に双剣使いの彼女に、このままロドスがチエルノボーグに脱出するまで手助けをする様に告げた、レユニオンとロドスが接触したとしても、彼女が居れば説明もスムーズだろう。

会った当初は感情の無い機械のようだったのに、今ではそんな過去を感じさせない、可愛らしくなった少女だ。

私は私の目的を実行しに行く、たった一人の親友に会いに行つて、ちゃんと話さない。

集団に離れてその場を離れようとした時に「待つて、名前を教えてください」とアーミヤに言われた。

私？私ミラー。

そう告げると、アーミヤは驚愕した顔を隠さない。

アーミヤだけじゃない、ドクター以外のロドスの面々は私が何者なのかを理解した、ある者は警戒し直して、ある者は逆に警戒を解いて。

アーミヤは、真面目な顔で私を見続けた……そこに敵意は感じられなかった。

私は体の制限を解除して、肩から翼を出して広げた、時間は限られている、走るより飛ぶ方が速い。

さて、お別れだロドス、そしてドクター。

また会おう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

?月?日 チエルノボーグ

黒兎から見た結晶娘。

「行ってしまいました……」

誰に言うわけでもなく私はそう呟いた、先程まで話していたあの人がまさかレユニオン・ムーブメントのN02だったなんて。

ウルサス帝国に囚われたというのは嘘だったのでしょうか？でもそれなら尚更何でドクターと同じ場所に居たのかわからない。

思えば最初あの人を見たときに少し既視感があった、でも私が前以て資料で見たあの人とは全然違って見える。

片目を眼帯で隠してなかったし、サンクタ族特有の輪っかも無かった、髪の毛の長さも変わっていた気がする、

それに上手く隠していたけど、時々意識がはっきりしていないようにも見えた。

『結晶世界』と名を轟かしたあの人に弱々しいなんて、当て嵌まらない筈なのに。

ミラーさんは「アーツを使った時に出現するあの輪っかは鉱石病の進行で出現する」とケルシー先生は言っていた。

ならあの翼も鉱石病の進行で得たものなのでしょうか……？

まるで結晶のような羽だった、白くも黒くも無い、鏡の様に透明で、触れたら割れてしまうんじゃないかと錯覚するような、そんな翼。

その姿にまるで、段々と人の形から外れていつているような、そんな印象を抱いてしまった。

それに、私の思い違いじゃ無かったら、翼を出した時、微細だったけれども空間にオリジニウムの結晶のようなモノが生まれては消えてを繰り返していたような。

嘘。

もしかして——原石結晶、滲出性の？

滲み出している……？

そんな、あの方は……

いえ、いえ、ミラーさんは「また会おう」って言ってくれました、だから絶対にまた会いに来てくれる、来ないなら私たちから会いに行く。

まだミラーさんとちゃんと話していない、話すことはいっぱいあるのにその一つも話せてない。

だからお願い、生きて。

『序章』

加速する

まるで最初からあったかのように私の思い通りにこの翼は空を飛ばたい、空と同化する。

加速する

この力は有限で、本当は使っちゃいけないモノなんだろう、私が何故こんな姿になったのかは鉱石病によるモノだ。

だが、それ以外の要因がある事を私はチエルノボーグに来る前に知ってしまった。

加速する

いつかの日記に書こうと思った事だ。

私の母親はサンクタ族で父親は???族だった、奇跡的に私は産まれたらしい、それを奴ら???が目に付け、私を人体兵器として利用しようとした。

それに対して両親は二人共反対、幾たびの逃避行の末に流れ着いたあの場所は、たった数年の——長い数年の平穏を両親に与えた。

それから直ぐだった、刹那の一時に母親が先に奴らに?された、??され??され、人の悪意に満ちたそれは父親を狂わすには充分過ぎた。

それでも両親としての責務を父親は捨てられなかった、だから私を???????
そして『私』は、タルラと出会った。

……いや、もう一人いた気がする、でも彼女の名前は?????ない。
あれは誰だっただろうか?

加速する

加速して、そうして私は彼女が居る場所を認識した、低空飛行でレユニオンとウルサス帝国の争いの場とは離れながら飛んでいた。私の存在を奴らに知らしめる為にも、羽を広げる必要があった。

——来た。

意識外からの攻撃を結晶を盾にする事で防ぐ、続け様に放たれたアーツの光線を結晶を展開して防ごうとして、急激に起きた痛みには空を飛ぶ力を失った。

落下していく、降下していく、下落していく。

翼を使って勢いを消して地面に降り立って、私を囲む様に奴らは現れた。
奴らは奴らを知っている
奴らは私を知っている

ウルサス帝国でもない、我らが同胞でも勿論無い。

ではライン生命か？——違う、ヴィクトリア王国の追手でも無い。

では何か？

それは深淵、知ってはならない者達だ。

黒い外套の奥に隠れた目と目が合う、無機質に私を見つめる奴らはまるで死神だ。

最も、私は死神などにくれてやる命は無い。

軋み続けるこの体を駆使して私は奴らに結晶の刃を展開する、全力で対処しなければ私はきつと??される。

私の展開した刃は私に襲いかかる標的に対し、無慈悲に斬り裂きその生命活動を終わらせようと舞い踊る。

刃を掻い潜った者には空から降る氷柱の結晶をお見舞いし、それを打ち破った者には今度は予備動作も無く地面から結晶を生やして閉じ込める。

そうやってアーツを駆使して一人を無力化し、また一人無力化していき。

それでも減らないこの軍勢に私は溜息を付いた、そうまでして私に固執するのか、お前らにくれてやるモノなど一つもないと言うのに。脱力していく体を引き締めて、私は視界に映る、否、視界以外の私の空間の構造を把握し、未だに加速的に成長するアーツを解放した。

全てを結晶に閉じ込めよう――

周囲一帯を結晶化させる、生も無も全てが結晶に変わる。

ここに私と奴ら以外に存在していない事は確認済み、私のこの行動で無駄に命を減らす者も居ない。

これで私を止める者はいなくなった、翼を広げて空に羽ばたこうとした時、私の体から力が抜ける。

いいや、まだだ。

まだ私の体は動く、こんな所で寝てられるか。

地面に倒れそうになる体をなんとか繋ぎ止めようとするが、私の意思に反して体はそのまま地面に倒れようとしてしまう。

ダメだ、くそ、このままじゃ……

「辛そうね」

――声がした。

反応する前に、体を誰かに支えられた。

「そんなになつてまで、何処に行きたいのかしら?」

この挑戦的な口調が当てはまる人物は一人しかいない。

――W!

「暫くぶり、ミラー。随分とイメチェンしたわね」

あ、ああ、似合ってるかなW

「いいえ、全然?」

転生者の知識で彼女がチェルノボーグにいる事は知っていた、けど全部が全部知識通りに事が進むとは限らない、あの一件以降連絡すら付かなかつたから、もしかしたらもう会えないんじゃないかと思っ

てしまった。

だから驚いた、Wに助けられるなんて、何で私を？

「何故って？……はあ、何故かしらね」

な、何だろう。

今物凄くバカにされた気がする。

「バカよ、本当にバカ、そんなにボロボロになって、死んだらどうするの？死んでいいと思ってるの？私は……」

その続きはWは言わなかった、彼女の顔を見ようと思って、顔を背けていて表情を確認出来ない。

私は死ぬつもりなんてない、それにほら、まだ体は動かし、翼だって生えた。この体が動かなくなっても飛ぶ事が出来るようになったんだ。

私はまだ限界なんかじゃない、それにやるべき事をやらないで私は死なない。

「っ……そう、もう良いわよ。言っても聞かなそうだし」

Wは私をおぶって走り出す、その方向が私の目指している場所だという事に嬉しくなった、私が何処に行きたいかも分かっているWに申し訳ないと思いなながらも、体を委ねる。

「前からそうだけど、貴女も他人に頼る事を全然しないわよね、そういう所、時が時なら本当に嫌いになりそう」

「ご、ごめんW……でもこれはきっと私にしか出来ない事なんだ、だから。」

「うるさい」

私は黙ることにした。

怒られるのは慣れてない、というかこんな怒っているWは初めてだ、少し、いやかなりこわい。

「はあ……なんで貴女に??の影を見るんだか」

その名は、確か――

「ミラー、貴女はアイツタルラに会ってどうするのよ」

どうする？決まってる、目を覚まさせるんだ、レユニオン・ムーブメントを導く本来の指導者としての彼女を取り戻す。

彼女は誰かの下に着いていい人なんかじゃない、その意思は誰にも濁らせない、私の親友はそんな場所に留まるような人じゃない。

私は彼女に全て話す、その上で彼女を止める、ウルサス帝国の良いようにはさせない。

「その為なら自分の命も使つて良い、そう思つてるんでしよう」

そんな事は、ないよ。

「貴女、嘘は苦手ね……わかつてる？アイツが何より気にしているのはミラー、貴女の命なのよ」

それは……分かつてる。

だからこそ、鉱石病をどうにかする為にもレユニオン・ムーブメントは正しい感染者の位置に到達しなければ、間違つてはダメなんだ、私達を狂わした全ての元凶は鉱石病なんだから。

そしてそれは絶対に解決出来る未来な筈なんだ、レユニオンがロドスと手を組み合つて、そして他の国や企業とも……いや一部はどうしようもなくダメだが、手を取り合えば、必ず治すきっかけが出来る。

私はそう信じた、彼らと出会つてそれは尚強くそう思えた。

「……そう、まあ。貴女を止める事は私はしない」

ありがとう、W。

「別ごと？」

それから会話は生まれなかった、でもそれは決して悪い事とかではなく、もう私とWは話終えたのだ、後は私は進むだけで、Wはそれを分かってくれた。

そうして進み続けて、そうしてようやくたどり着いた。

「体は動くわね？」

うん、もう大丈夫だ。

Wは私を下ろして、すぐにその場を後にした。他にやる事があるのだろう、彼女は彼女の意思で進み、その人生を全うとしている。

それを少しだけ、その足を止めて私を助けてくれた事に、私は返しきれない恩をWに返さないといけないな……だからやっぱり、私は死

ねないし、死ぬつもりなんてない。

私は一度？だ身かもしれない、この転生者の知識は私にこの世界の出来事を教えてくれただけで、それ以外の事は殆ど教えてくれなかった。

私は歪だ、しつかりそれを自覚している。

この世界は歪だ、身を以てそれを実感した。

でも、人は、彼等は、生ある者は――

相對する彼女を見据えて、私はその足を動かした。

それは彼女も全く同じで、自然と私たちは互いに手の届く距離まで移動した。

ゴシックドレスのような黒を基調とした服装は、今ではタルラを象徴する服装になっている、銀色に輝く髪色と相まってとても良く似合っていた。

彼女と向き合い、決意を宿した瞳を見てまるで私がここに来る事を予知していたかのように、その瞳が輝いていた。

もう、何度目だろう、君とこうやって話すのは。

いつまでそうしていただろうか、この空間の沈黙を最初に破ったのは私だった。

さあ――話し合おう、タルラ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

初めて会った時、彼女は感情が気薄だった、今から死にいくような全てを諦めた目をしていた。

それがいつの間にか……鉱石病を患ったあの日から『決意』を宿した瞳が変わっていた、表情はまるで変わらないのに、どこか感情豊かになっていった。

彼女と関わる事を辞めなかった私は当然のように私自身も感染者になった、それが何故か??かった。

彼女と逃避行を繰り返して、最終的にレユニオンで互いに手を取り合い、私はレユニオンの指導者になった。

本当は彼女こそが相応しいと思っただけでその席を彼女に渡そうとした時がある、その時彼女は首を横に振って「私は指導者じゃない」と言った。

最初は彼女が言うならそうなんだろうと納得した、だが指導者になり、レユニオンをどう動かすのか、この先を見据えて動き続けて。

ある一件の出来事をきっかけに私はそれ以降彼女と衝突する事が多くなった、その度に「正しい」彼女と衝突して、やっぱり私ではない、彼女こそがレユニオンの指導者なのだと思いはじめた。

段々とレユニオンの「彼ら」は私ではなく彼女を支えとして、その在り方を変えていった、怒りの矛先は徐々に鉱石病へと変化した。

それは彼女がそうだから、彼らも次第にそうなっていったのだ。

私も鉱石病への恨みはある。

だがそれ以上に彼女を迫害した「奴ら」を許せない、居場所を奪った奴らを生かしてはおけない。

そうしていた私の決意は、ある日をきっかけに変わった。

彼女が私の前で意識を失った時がある、彼女と行動を共にする事の多い部隊の者達は、脈絡も無くこうして倒れることが多いと言った。初めてだった、今まで一度もそんな素振りを見せた事すらなかった、彼女の「弱さ」を私は従前に理解していなかったのだ。

それから直ぐに彼女の体が??の??に??

語りたくもない。

その彼女を見て、私は鉱石病を恨むようになった。

彼女を失うのは耐えられない。

彼女が居ない世界に最早意味なんてない、???しまう前に私はどうかしようとして持てる全ての知識を使った。

知識を使ってもダメなら、行動で示した。

そして彼女を生かす方法を見つけた、その為に払う代償は大きく多

かったが、どうでも良かった。

彼女さえ生きてくれれば良い。

ミラーさえ、私の隣に居てくれれば……私はこの世界で生きられる。

……なあ、ミラー、君は今何を思っている？

目の前の彼女は片目を眼帯で隠し、輪っかに羽と、まるでサンクタ族のようだ。

その姿を見て、様々な感情が浮かび上がった。

ウルサス帝国に囚われていた事が嘘だった事に対する安堵。

先ほど、とある一帯が結晶になったのを知って、アーツを使った事に対する怒り。

そもそも何でここに居るのかに対する疑問。

ああ、でも何より。

「体は……平気か……？」

私が真っ先にしたのは心配だった。

「平気だよ、タルラ」

平気？何処が平気なんだ、刻一刻と君は鉋石病が進行しているのに、本当は立っているだけで辛いんだろう、なのに平気なんて口にする。

その笑顔が私は嫌いなんだ。

私を安心させようとする顔が。

きつと君は平気なんだろう、自分がどれだけ傷付いていようが、??
ていようが、止まる事をしない限り、平気なんだろう。

そんな君が――

「タルラ、このチェルノボグを制圧した後に君はどうするんだ」

「決まってる、チェルノボグを制圧して、龍門にぶつける、ウルサス帝国は龍門との戦争がしたいらしいからな、その土俵を作ってやる……それから、やつと君を治す事が出来る」

そう私が言うと、ミラーは瞳を閉じて首を横に振った、ゆっくりと開いた瞳には、悲しさが宿っていた。

「それじゃだめだ、いいように使われてるだけだ、違うだろ。君は、タ

ルラは誰かに使われていい器じゃない筈だ……もう、分かっている。そんな事をして意味なんかないんだよ」

「意味がない？違う、意味ならある、君を治す手筈が出来る、その忌々しい鉱石病から解放させられるんだ」

「それは違う、君を騙してるだけだ、第一その約束を保証するような奴らじゃない」

「なら君をどうやって助ける……？君は死なないと言うが今にも……私はミラー、君に死んで欲しくないだけなんだ」

「私は死なないよ、その未来をこれから全員で力を合わせて手に入れるんだ、私の信じたモノは確実に成し遂げてくれる、私はそれを待つだけで良い」

「……平行線だな、何を言っても納得してくれない」

「タルラだつてそうじゃないか」

当たり前だ、私は君に時間がない事を知っている、時間がないのにそれを待つなんて出来る筈がない、明日死ぬかもわからないような状況で、不確かな未来を掴むよりは。

私は確実な未来を掴む。

「言っても聞かないなら……少し寝ていてくれ、ミラー」

「目覚めさせてやるタルラ、この頑固者——ツ！」

「頑固者はどっちだ——ツ！」

互いのアーツがぶつかり衝突し、反発し合う。

これじゃあ本末転倒だ、互いに寿命を削って、不毛な争いだ。

ではこんな争いは無意味なのか？

違う、意味ならある。

彼女は眠らせない限りその動きを止める事は出来そうにない、もう何度も話し合った、その度平行線を辿った私達がこうなる事は、決まっていた事なのかもしれない。

私は初めてミラーと交差する。

予備動作のない結晶の生成は確かに見切り難いが、それだけだ、私のアーツで溶かせる。

銃弾も全て溶かしてしまえば良い、彼女の懐に入り、刀の柄で意

識を刈り取ろうとした時、風圧が私とミラーの距離を離れた。

ミラーに生えているあの翼が厄介だ、再度動こうとして、両足が結晶に閉じ込められている事に気付いた。

両足の結晶を溶かせば今度は腕、腕を溶かせば次は全身。それも溶かして次の結晶を発生させる前に脱出し、足をバネの様に使って一気に加速する。

この速さにはついて来れないだろう、ミラーの目の前に瞬時に飛翔する。

ミラー……寝ててくれ。

意識を飛ばそうと手刀をする刹那、ミラーと私は目が合った。

瞬間ミラーは私の手刀を紙一重で避けた後に、私を押し倒して私の両手足を地面とくっつける様に結晶を発生させる。

私は融解しようとしてアーツを発動しようとして……やめた。

「もう、良いでしょう、タルラ」

「負けた、か」

「違う、最初から本気で戦ってないのなんて分かった、本気を出せば私は簡単に倒れてしまう、タルラはそれを分かったんだろ」

その通りだな、勝つのは出来た、簡単では無いが私のアーツを最大限に利用すれば、彼女の命を引き換えにこの戦いに勝利を刻めた。

生かしたいと願っている人物にそんな事ができる筈がない。

互いに生かし合う戦い方で、彼女に上を行かれただけの話だった。

「ミラー……私は間違っているか、君を救いたいと、一人の親友を死なせたくないと思う事は間違いないのか」

「間違いじゃない、でもタルラ一人じゃ治せない、だから周りと協力し合って、手を取り合って、そうやって見つけていくしかないんだ」

「……本当に、それは君が死ぬ前に出来る事なのか？」

「出来るよ、私は君を置いて死なない。絶対に」

私はそう言う彼女の決意を宿した目を見て、本当に私を残して死ぬつもりは無いことを悟った。

いや、ずっと前からそれは変わらない、死ぬつもりなんて最初から無いのは分かっている、解ってたんだよ。

その強い意志を持つ黄昏色の瞳は昔から色褪せる事無く、人の目を焦がし続ける。

「なら約束してくれミラー、私を置いていくな」

「約束するよ、タルラ」

ミラーは結晶を解除して私を自由にさせる、座り合って、互いに小指を絡ませてゆびきりをした。

見合わせた私たちは、何だかおかしくなって笑った。

「何でこんなに拗れてしまったんだろうな……」

「それは、タルラが頑固だからだよ」

「違うな、君が頑固だからだ」

「むっ」

抗議する様な目で私を見るがミラーは頑固だ、一度決めたことを簡単に曲げない、私も簡単に曲げないがミラーはそれ以上だ。

一度も自分の考えを曲げた事は無かった、根底にある考えを今も尚貫いている、その在り方に私だけじゃ無い、同胞全てが……いや、言葉にしなくても良い事か。

「ミラー、レユニオンはこのままチェルノボーグを占領する」

「……次は？」

「このチェルノボーグを占領し、ウルサス帝国と『交渉』しよう、互いの生殺与奪を掛けた話し合いだ、感染者を代表する者として、奴等に選ばせてやる」

「そっか……分かった、君を信じる」

帝国だけじゃ無い、他の問題も山積みだ、全く……私を指導者にしたのは??だな。

そうと決まればと立ち上がり、ミラーの手を取る、そのままミラーも立ち上がった後に、私の方に倒れかかったのを受け止めた。

「ミラー……ッ」

「流石に疲れたかな……もう動けそうにない」

軽い。

受け止めた彼女はあまりにも生物としての??をしていない、それが何を意味するのか私が理解出来ない程察しの悪さをしていない。

「そんな顔して見ないでくれよタルラ、私は……」

「わかってる、わかってるさ……だからもう、眠って良い」

ふと、灰色混じりの黒かった髪色が一部変色していた、橙色のような、いやそれよりも暗く、存在感のある、夕焼けを感じさせる色に変わっていく。

それと共に翼が消え、末期の鉱石病者が見せる滲出性の原石結晶が形を潜めた。

いやそんな、まさか――

今、私の表情は??しているだろう、??の??は、?を??する。

「ミラー、後は任せて、休んでくれ」

私がそう言うと、彼女は昔の呼び方で私の名前を呟いた後に、その目蓋を閉じた。

彼女を抱えて、空を見る。

もうじき始まる、その前に彼女を安全な所に連れて行く必要があるが……ふと、私とミラー以外の存在に気付いた。

「何故……いや、良い。お前なら預かれる」

猫とは気紛れなモノだと認識していたが、どうやら受けた恩に報いる猫らしい。

彼女にミラーを預け、私は再度、目を閉じ、決意する。

舞台の幕引きの時間だ。

長い、長かった『序章』を終わらそう。

が始まった
が終わった

それから、全て

彼女の知識で起こるはずの戦いは??し。

彼女の知識で消えるはずの者達は??し。

彼女の知識で救われない出来事は??し。

彼女の????????し。

そうして世界を巻き込んだ一人の??は。

たった一つの日記となって存在している。

これが彼女から渡された一人の物語、その序章だ。

ため息を一つ、珈琲を飲もうとカップを手に取り、中身が無い事に気付く、それから時計を見れば随分と時間の経っていたようで、やつとの思いで手に入れた休日が残り僅かで終わってしまう事を意味していた。

また理性回復剤を多用する日々が始まるのか。
嫌だなあ、つらいがんばろう。

そういえば、そろそろ約束の時間か、忘れていたわけでは無いが、つい夢中になってしまった。

日記を嚴重に保管して、自分の部屋を後にする。

歩く。

誰かに命を狙われたような……嗤われた気がした。

歩く。

白い兎と黒い兎が談笑しているのを見た。

歩く。

あれは、確か……あの時の。

そして、止まる。

——そうして。

扉をノックした後、部屋に入った。

優雅に、毅然としていた??と、目が合った。

さあ、この先これからを始めよう。

「やあ、ドクター」

『断章』

風がそよぎ、海が凪ぎ、空に虫と鳥が戯れる。木々は今青々と、四季の変わり目にさんざめく。

そんな、ある日の出来事。

「海に行こう、よし行こう、すぐ行こう、ほら行こう、さあ行こう！」

海……？

Wの一言に私は思わず難色を示した。

海といえばシエスタだろうけど、いやしかしなげ急に。

「……はあ、あのねえ、最近の私たち、あなた理解してる？」

うん？それはまあ、最近といえば。

いつもの様に会議、軍議、または資料作成、外交、食事、そしてお酒。

うん、なんてことのないいつも通りの平和な1日をここ最近は毎日と言って良いほど過ごしている、なんと心地良いだろうか、無理もしていないので体の調子も悪くない、目眩もしなければ吐き気もしない、たまに疲れはするがただそれだけだ。

うん、今日も良い一日。

「そうね〜〜良い一日〜〜……じゃないわよ！」

ドン！つと机を叩くWにわつとびつくりした、何事。

「毎日のように仕事！仕事仕事仕事！そりゃあねえ、大きな戦争も小競り合いも減ってきたから休日もあるけど、息抜き出来るような場所に行きたいのよ私だってねえ！」

ええ……なら行けば良いのでは？

「ええ行くわよ！あんたも付いてきなさい！」

何故そこで私も付いていくのか、これがわからない、別に私なんかより、それこそフロストノヴァと行けば良いのでは？仲良いし。

「良くない！」

顔に出ていますよ？

「うるさい……つ〜〜あー！もう！たまにはミラー！あんたも休めって事よ！一度も有給取った事なんて無いんじゃないの？」

おや、心配してくれているかな、優しいね、ありがとう。

「べ、別にそんなんじゃないけど？」

いやでも心配しなくても大丈夫だよ、過度な仕事はしてないし、しなくても出来ないし……有給も使ってるよ、実は誰にも言っていないけどロドスに遊びに行った事もあるんだ

「へえ〜ロドスに……っは?!なんで!?!」

なんでって、うーん、まあ、興味？

「何その漠然な……つまあそれは良いわ、と・に・か・く！行くわよ、シエスタに」

うーん。

とは言っても流石に私のとWが今抜けたら色々と問題が起きそうだし、まあ今度また別の埋め合わせするからー

「何言ってももう決定だから、ジジイも来るし、ファウストもメフェストも……まあ乗り気だし？他の幹部も全員参加よ、不本意だけどフロストノヴァもね」

え、ええ……？

まじか、みんなちゃんと休みを作つてあげたと思うし、可能な限り環境も良くしたと思うんだけど、何か足りなかったのだろうか？

まだまだ私の頑張りが足りないって事なのか、尚更行くわけには行かないのだが。

「あーもうこの解らずや！なんでそっちに思考が行くのよほんと……」

……ん？全員参加？もしかしてだけど、いや、まあ流石にあり得ないと思うけどーと。

Wに思つた事を聞き出そうとした時、コンコンと扉をノックしてくる。

控えめに、だが力強く叩くこの癖は。

「…………タルラ。」

「……Wもいるのか」

「何よ、いちやダメ？龍女」

「別に、そうは言っていない」

「は、はあ？何よ、調子狂うわね……」

あの時から少しだけ素直になったタルラにWはやりにくそうな顔をする、その様子を見て私は思わず頬が緩んだ、私が見たかった世界にまた一つ近付いた証拠が、目の前のこの光景が、私がこの体で生きている事を許しているように思えて。

きつとあの時付いて行く事を辞めて、身を隠してしまった彼女も喜ぶ筈だ、最近やつと消息を掴めた、タルラも喜ぶだろうし、私の選択が身を結んだんだって今になって実感したんだ。

つと、タルラ、何か用があつて来たんじゃないのか？

「ん、ああ、そうだ」

「ミラー、シエスタに行くぞ、祭りだ」

その言葉に呆気になった私を見てニヤついたWと、悪戯が成功したかの様にほんの僅かに表情が変わったタルラは、まあなんとというか、初めて見た顔で、そんな顔も可愛いとか何処か上の空で考えちゃつてて。

「……………ああ……タルラも行くんだ???

と、言う事で私達レユニオン・ムーブメント御一行はシエスタに遊びに来たのだった。

「あら？あーらあら？何々？そのかつこく！変ね！変！」

「人のこと言えるのか爆弾魔」

「はくくく?!言ってくれるじゃない白兎！上等！炭まみれにしてあげるわよ！」

「大体私は変な服じゃない、そうだろう？ミラー」

ん？うん、かわいいよ。いつもより少しだけ露出が多いんだね、綺麗な肌だと思うよ、フロストノヴァの雰囲気と似合ってるし、良いと思う。

「ふふん、そうだろう」

「こつ、この、ねえミラー！私は？かわいいでしょ？」

え？うん、かわいいよ。Wはあれだね、過激だね、でもスタイルが良いから、とっても似合ってるよ、カッコ良さまで感じられるかな、良いと思う。

「でしよ〜?」

「むっ……この色魔」

「は?!ファック!もう許さない!今日こそ潰してあげるわ」

ああ……どうして彼女達は争ってしまうのか、二人ともかわいいのだから別にそれで良いのではなからうか、それではダメなのか、何故なのか。

「いやミラー、それわかって言っ……るわけないか、ミラーだもんな、うん」

……はて?何かスカルシュレッダーに何か言われた気がするよう
な。

「お兄ちゃん、私たちも遊ぼうよ」

「わかってるよ、ちよつと待っててくれ」

喧嘩しながら何処かへと行くフロストノヴァとWを眺めながら、近付いてくるスカルシュレッダーに気付いた、戦闘を目的として来ている彼はいつものあの格好を着ていない。

ラフな服を着て、一人の青年として、今のこの時だけはとその仮面を外している。

そんな彼の後ろで他の……スカルシュレッダーの部隊の子達だろうか?と遊んでいる彼似のあの少女は、もしかして。

「ミラー、俺達は少し離れた所で楽しんでくるよ」

「うん、行ってらっしゃい」

「それから……ありがとう、色々……これからも」

少し照れた様にその場を後にするスカルシュレットダーの……アレックスの後ろ姿は、いつか見たあの記憶なんかよりよっぽど今を生きていて、素敵だ。

その後ろ姿を眺めてたら、何処かで見たような服をした人が、見知っている服をした人と話している、というか……あの人。

思わず体が動いていたので、感情に従ってその人物に近づけば、その人物も此方に気づいた様で、何処か大袈裟なりアクションをしながら、私の事を歓迎してくれた。

「はっは！まさか將軍サマと会えたと思えば、ミラーとも会えるなんて、おや？あそこにいるのは將軍サマの娘さんじゃないか！」

久しぶり、ボブおじさん。

「おうおう、久しぶり、なんだってシエスタに？」

いや、えーつと、まあ何と言いますか。

「休暇だ」

言い淀む私を見かねてか、失礼だけどこの中で一番画風が違う人が、大真面目にそう口に出した。

その言葉にボブおじさんは吹き出して腹を抱えて笑おうとして咳き込む、その様子に心配になったが「これが咳き込まずにいられるか！」と言われたので、思わず笑ってしまった。

「ひ、ひひ、は〜……まさか將軍サマも一緒なんてこの後火山が爆発して天変地異が起きたっておかしくねえなあ!？」

「縁起でも無い、辞めろ」

「それもそうだな、っと……うっ」

何かに気付いた様子のボブおじさんの目線の方角を見れば、ボブおじさんの仲間達がボブおじさんと呼んでいた。

「すまん、そろそろ戻らねえとな」

元気でね、ボブおじさん。

「おうよ……ミラー、元気でな、また会える事を祈るよ、おっと勿論將軍サマもな！」

そう言つて背を向けて仲間達の元へ帰ろうとするボブおじさんは、何かを思い出したかの様に急に立ち止まって、振り返る。

その表情はフルフェイスに隠れて見えないが、確かに私と目があつて。

「タルラによろしく」

それだけ言つて、今度こそ仲間達の元に帰つていった。

「……彼奴について、色々思う事はある、だが、それもまた道だ」

「ミラー、この今の光景は、景色はお前自身が作った、そしてこれからも、お前が作り続けなければならない道だ」

真剣に語るパトリオットは決して私の方を見ない、空を眺めながら、一言一句私に語りかける様に言葉を話す。

だけどその厳しいようで、優しい言葉に私は何処となく安心する時

がある、彼は愛国者であり、感染者の盾だからなのか、それとも何か別の要因だろうか。

「お前の序章はまだ始まったばかりだ、だが」

「今日ぐらいは休むと良い」

ゆっくりと、私の頭に手を置いてパトリオット……ボジョカステイは静かに立ち上がって、見守る様にその視線の先を見ていた。

……休み、か。

確かに、今このひと時ぐらいは、純粹に楽しむのも良いかもしれない。

勝ち取った私の平穩を、他でも無い私自身が楽しまないでどうするのか、そうする事も出来なかった前の私と、今の私とは……っと。

考え事をしていた私に何かを口ずさみながら近付いてくる二つの影を見かけた。

「ミラー……どう？歌えてた？」

うん、歌えてたよ。

「えへへ……」

私の言葉にメフェストは照れながら、口ずさむ。

わかっている、これが歌でも何でも無い事に、それはメフェスト自身が一番わかっている、それでも口ずさむ、そうする事がメフェストにとっての唯一の“癒し”だから。

だから私も歌えてたよって嘘を言う、こんな気休めの嘘がメフェス

トの……イーノの傷を少しでも癒せるなら、私は吐いた嘘をいつか必ず真実にする為に、言い続けるんだ。

その様子を静かに見ていたファウストは、何度かの瞬きの後に、口を開いた。

「ミラー、体は大丈夫か」

平気だよ、心配しなくても大丈夫。

「……そうか、なら良いんだ、何も無いなら、それで」

寡黙な彼はそれつきり、メフェストと私の会話を聞く事に専念するかの様に沈黙する、それがファウストなりのコミニケーションで、彼なりの人と人との関わり方なのだろう。

私はそんな彼に色々任せ過ぎてるかもしれない、でも、一人じゃ全てが変わらない事の方が多い、私が何も出来ない時、ファウストは……サーシャは私の代わりになり得るのだろうか。

……そんな日は来させない、私の代わりは何処にでも居るかも知れないけど、サーシャの代わりは何処にもいないのだから。

「……そういえば、クラウンスレイヤーを見なかったか？」

サーシャに言われて、おや？と気づいた。

言われてみれば見てない、少し探して見るかと、二人に後でねと別れを告げて、クラウンスレイヤーを探してみる事にした。

クラウンスレイヤーと初めて会ったのはタルラの紹介からだった、内に燃える強い炎の瞳は今でも覚えている、それが何なのかは、今でこそ少しだけわかってる気にはなっているけど。

狂気に傾きそうな彼女とは、最初の頃は全く気が合わなかったと言え、何人が信じるかな、あの時の記憶を知っているのは、タルラと私と、クラウンスレイヤー、たったの三人だったり。

そういえば……あの時も一人の彼女を探していたっけか。

こんな所にいたんだ、クラウンスレイヤー。

「ミラー」

一人海から離れた所にいたクラウンスレイヤーは、もう少しで夕暮れ時になるであろう海を……いや、この世界を見つめて何かを思考していた。

「ミラー、私より他に……それこそタルラと行動する方が楽しいんじゃないか？」

そんな事ないよ、誰の隣でも私は楽しい、それこそクラウンスレイヤーの隣もね。

「そうか……それならミラー、話半分に聞いてくれないか」

良いよ、何の話だろう。

「もし私がレユニオンから抜ける、って言ったら、ミラーは……止めるか？」

……難しい質問だ、でもクラウンスレイヤーの表情は真剣そのものだった、だから私も真剣に考えて、答えを出す。

数分か数秒かの後に、私は言葉にした。

止めない。

「そうか、止めない、か」

でも、それはクラウンスレイヤーが……リユドミラがレユニオンを抜けて何をするか、何をしたいか、その果てに何になりたいのか、ちゃんと聞いてからだよ。

それを聞いて、私が納得したら私は止めない、だからもしその時が来たら私を納得させてみてよ、リユドミラ。

「……………は、ははは！そう来たか！……大丈夫、冗談だから」

どうだろう、リユドミラは偶に大胆な嘘を吐くからね。

「冗談だよ、少なくとも、暫くは、私の中の答えが見つからない限りは」

嘘つきだな、その答えがとっくに出ているだろうに。

でもそれならつまり、そう言う事だ、彼女はまだ私達と行動したいと思ってくれている、着いて行きたいと思ってくれているんだ。

ならその信用を、信頼を私は裏切りたくない、だから彼女の中に眠る炎も私も力になれたらと、その思いは変わらない。

……お節介は、嫌いそうだけどね。

「さ、もう行った行った、これ以上ミラーといると氷漬けにされた後に燃やされて爆発されそうだ」

……そんなひどい。

「酷いのはミラーの天然……まあそう言う所嫌いじゃないけどさ」

リュドミラに追い出されるように海に戻れば、何処かで見たシルエットを見かけたので、近づいて挨拶して見る。

やあ。

「わあ！」

こっそり近づいて後ろから挨拶を試みれば、予想通りの反応を示してくれた、良い反応だ、こうしてみるとどこにでもいる少女の様に思える。

だけどこの小さな背に、色々な、様々な思いを乗せていると思えば、彼女は立派な一人の指導者でもあるのだろうか。

「ミ、ミラーさん?! どうしてシエスタに？」

休暇だよ、アーミヤ。

「なるほど、じゃあ私たちと似た様なものですね」

へえ、奇遇だね。

「そうですね! ……えっと、その、ミラーさん、体は大丈夫でしょうか」

大丈夫だよ、こうしてしっかり生きてる。

「生きて……はい、はい! 本当に良かったです! 折角ですし、もっとお話ししませんか?」

もちろん、喜んで。

それから暫くたわいのない「……」お互いの日常の話を代わり代わり話した後に、アーミヤは真剣な眼差しで、私を見つめた。

「……私は、まだレユニオン・ムーブメントの方々を詳しく知りませんが、それでもあの時私達は確かに協力できました、ドクターを助けてくれた事も、感謝してます」

「だから、いつの日かまた、ロドスとレユニオン・ムーブメントが手を取り合えるような、そんな未来を私は目指したい」

「……って、その、改まって言う事じゃないかも知れませんが……これからも、よろしくお願いしますね、ミラーさん」

そう言い切って、握手を求める様に手を差し出してくれたアーミヤに、私は「……」万年の思いが叶ったかの様な感情を覚えて、ゆっくりとアーミヤのその手に触れた。

ああ、いつか見たあの記憶の彼女なら、限りなく最善に近い選択を進んでいた、その最善の選択に、彼女達は居なかった。

だけど、ああ、されど、あの記憶ではない、確かなこの今ならば、或いは。

「温かい手ですね……」

アーミヤこそ。

二人して同じタイミングで笑い合っていると、アーミヤを呼ぶ声が聞こえて来た、この声は「……」

「ドクター……！あ、すいませんミラーさん、ドクターが呼んでいるので、その」

うん、行っておいで。

「はいー」

元気に返事をしてこの世界の救世主プレイヤに小走りで戻っていく、私の姿に気付いたのか、彼、或いは彼女は私に会釈をした。

……ああ、彼女も居るじゃないか、あの黒猫め、全然気付いてない、それとも気付いてないフリかな？……ロドスは居心地良いか、今度こっそり近づいて聞いてみようか。

「……へえ、あいつ、こんな所にも居たんだ」

わ！

「びっくりした？ミラー」

後ろから耳元で言葉をかけられて、思わずびっくりした私にニヤツきながら、その目は私の後ろにいる人物に向けていた。

と思えばすぐに視線を切り替えて、私を見る。

……まさにトリックスター、爆弾魔の異名はその性格にも表れているのだろうか？

「ね、ミラー、少しは気は休んだかしら」

もちろん、このひとときを過ごさせて私は幸せだよ。

「そこまで言えって言っていないけど……まあいいわ」

ちよつと不満げな彼女は、地面に座ると、隣に座れと言葉でなく目で語るの、隣に座った。少しだけ距離が近い、わざとかな。わざとっぽい。

「ミラー、実はね……自分でも意外に気に入ってるのよ、今のレユニオン」

……それは、初めて聞いたかもしれない、何処かで聞いたようにも思える、でもこれが嘘ではなく真実だと言う事はちゃんと理解できた。

だから少しだけ驚いた、素直じゃない彼女が素直にそう言うことに。

「……少しだけ懐かしい気持ちになるのよ、あんたと居るとね」

Wの言うその懐かしい気持ちは、彼女の中にしか存在しない、知り得ないのだろう、少なくとも私は知らない、Wが誰と私を重ねて見るのか。

気にならない、と言えば嘘になる、知りたい気持ちも少しぐらいある、だけど自分から聞くのは多分、Wに嫌われてしまうだろうから。

私はその心に干渉する事は辞めた。

「……長生きしてよね、私これでも涙脆かったりするかも知れないわよ?」

それはそれで見てみたいな、涙もろいW。

「バカにした?!」

ふふっ。

「笑うんじゃないわよ！……はー、もういいわ」

……ん？何処に行くの？

「ちよつと会いたい奴いるから、だからミラーは白兔でも探しなさいな」

……やっぱなんだかんだ仲良いじゃないか。

「ふん！……まあ、認めてあげなくもないけどね」

そう言つて何処かに向かおうとするWは、「あつ」と何かを思い出して、私に振り返る、珍しく、何の邪気の無い笑顔を浮かべて。

「特別に教えてあげるわミラー、別に意味なんてないけど、私だけハブなのもムカつくし、良い？ちゃんと覚えなさいよ」

私の名前はねー……

Wに言われた場所に向かえば、もうすっかり夜になっていて、火が見えたと思えばスノーデビル小隊が卓を囲みながら、砂浜でバーベキューを開催していた。

というか、見ないと思つたら私の部隊もいるじゃないか、すっかり仲良くなつて……私は嬉しいよ。

「隊長！」

「ミラー姉さん！」

みんな、楽しんでる？

「そりや勿論！僕ナンパって初めてしたんですけどアレっすね！全然っだめっすね！」

「そのちんちくりんな髪がだめなんだよ」

「ええ！そんな事ないっすよ！ねえ？ミラー姉さん？……なんで目逸らすんですか？」

あいや、まあ、うん。それよりフロストノヴァは？

「雑っすね！姉さんはあつちに居るっす！」

「雑ぐらいで丁度いいんだよ」

「酷いっすよお〜！」

「ふふっ……じゃあ甘やかして欲しい？」

「え」

おや、おや、これは本格的にお邪魔みたいだ。

無口の子だと思ってたけど、こう言う時は結構攻めるんだね、10年前に見かけた君がこんな幸せそうな顔をするのを、あの時の私に教えてあげたいよ。

さておじやま虫は退散するとして……つと、いたいた。

「ミラー、何処に行ってたんだ？」

いろいろ。

「ふっ、そうか……一杯、飲むか？」

もちろん。

フロストノヴァから貰った瓶を手にとって、互いに乾杯する、グビツと喉に酒を流し込めば、その独特の苦味と甘みが私を内側から包み込んで、気を良くさせる。

程良い冷気が風と共に運んできた、気持ちの良い涼しさだ、私はこの涼しく、何処か温かい風が好きだ。

「……ミラー、初めて会った時を覚えているか？、ウルサスの、忘れてくも忘れる事のない、あの日々を」

覚えているかと言われれば、勿論覚えている、レユニオン・ムーブメントが形になる第一歩と言つていい、その瞬間の時だ。

「私はミラーが実権を握ると思った、ミラーの発言は、軍略は、一切の間違いをしなかった、だから指導者が、レユニオン・ムーブメントのトップがタルラになった時、少しだけ嫌だったんだ」

……驚いた、そんな事を思っていたのか、初めて知った。

ファウスト程ではないが、フロストノヴァもまた寡黙な方だ、当時の心境をこんな風に聞かされるのは、なかなか新鮮味がある。

「今でこそ納得しているが、あの時はまだ若かった、だから同じぐらいの年なのに、何処か大人びて、正解を選び続けたミラーを私は頼つて……頼り過ぎてた事に気づいた時には、もう遅かった」

……そんな事ない、私は頼つて欲しかったし、それで良かったんだ、

私がもう少しだけ強い体を持つてれば良かっただけの話だよ。

「なら私はミラーに頼る必要のない自立した大人になれば良かったんだ」

それは……そう言うのを言い出したらキリがないと思う。

「言い出したのはミラーだろう？」

……たしかに。

ぐいっと飲もうとして、もう瓶の中身が空になってる事に気付く、気付いたら空けていたのかと思わずフロストノヴァに目を向ければ、苦笑しながら開けてない瓶を私に渡してくれた。

「これからは私にも頼れよ？」

そうだね、うん……もちろんだよ、エレーナ。

すっかり夜になって、私はいまだに続く……というか白熱して来た（主にスノーデビル小隊の）喧騒から少し離れて、彼女が居そうな場所に向かう。

こう言うときは大抵、離れ過ぎず近過ぎない、景色が良く見える場所にいるんだ、何年も一緒にいるから自然とわかる様になっていた。だから向こうも、私が探すのを分かっていたのだろう、だからほら、ここに居た。

タルラ。

「抜け出してよかったのか？ミラー」

そう言うタルラこそ、参加しなくて良いの？

「私には少し眩し過ぎる」

小さく笑みを浮かべる彼女の隣に座れば、ちよつとだけ、体がくつつかない程度にタルラが近付いた。

「懐かしいな、この喧騒」

そうだね。

「忘れていた訳じゃないんだ、思い出そうとしなかっただけで、先の見えない未来に押し潰されれない様に必死なっていたら、自然とこの感情すらも無くしてた」

そっか。

「……エレーナを、覚えているか」

優しい人だった、あの村で出会った、かけがえの無い同胞。

「私は炎に、身を焦がす程の怒りに身を任せそうだった」

そう思えば、チエルノボーグの時はまるであの日の続きみたいだった、あの日と違うのは、全てをぶつけ合ったか、合わなかったか。それだけ。

「今は、もうこの怒りの本流は止まった。だがこれからは？ 私は偶に不安になる」

不安になる必要はない、その怒りを向ける先は然るべき場所に向かうんだよ。

「キミがそうさせるのか？」

ううん、少し違う。

私達で向けるんだ。

「二人で？」

そう、二人で、もう離れないし、離さないよ、タルラ。

「ふっ……少し怖いぐらいだな」

怖いって……いやまあ、ちよつと変に言い過ぎたかもだけどさ。

「ミラーらしいと思うよ」

私らしい、か。

海から見える、空の向こうにある星々と共に輝く月は、綺麗な満月を浮かべ、まるで私達のこれからの門出を、この先の未来を祈っているようだ。

なんて、ドラマチックな感情を面と向かって言ったら、キミは笑うかな、タルラ。

「……私は、私達は変える、この世界^{テラ}を、感染者を遍く全ての問題を必

ず解決に導いてみせる、私達のやり方で……それでも足りないなら、私達の味方を増やして、手を取り合つて」

うん。

「私達に出来ない事は無い、必ずやってみせる」

そうだね。

「だからまずは……改めて、この手を取ってくれないか？ミラー」

差し出された手を、私は何も言わずに手に取る。

「……ふふっ、少し酒に酔わされたらしい」

それを言うなら私もかもね？

「さ、戻ろうか」

手を繋ぎながら、私とタルラは喧騒に戻る、戻りながら、私はつい最近知ったあの事をタルラに話す事にした。

実はタルラー……

「っ、それ、は、本当か？」

今度会いに行こう、きつと喜ぶよ。

「……そうだな、行く時は、一緒に来てくれよ」

これから先の未来は、きっと必ず……どれだけ苦境であろうと、困難な道であろうと、必ず、切り開いてみせる。

……ああ、本当にキミとなら出来る気がするよ。

だけど、まあ、一先ずは。

風がそよぎ、海が凪ぎ、空に虫と鳥が戯れる。木々は今青々と、四季の変わり目にさんざめく。

そんな、ある日のこの『断章』を、ひと時を、心から。